

Strategic Business Innovator



アニュアルレポート 2006

SBI Holdings

トピックス

目次

表紙裏	SBIグループの概要
1	連結財務ハイライト
2	SBIグループの経営理念／ SBIグループのビジョン Strategic Business Innovator
3	3つのコアビジネスから5つのコアビジネスへ
4	株主の皆様へ
6	北尾CEOインタビュー
14	アセットマネジメント事業
16	フローカレッジ&インベストメントバンキング事業
18	ファイナンシャル・サービス事業
20	SBIグループ
	20 SBIグループの社会貢献の3つの柱
	20 人材育成への取り組み
	21 CSRへの取り組み
	22 コーポレートガバナンス
24	財務セクション
	24 財務報告
	30 連結財務諸表
	36 連結財務諸表注記
	62 独立監査人の報告書
63	主要グループ会社／沿革
64	役員
65	会社概要／株式情報

見直しに関する注記事項

このアニュアルレポートに記載されている、SBIホールディングス株式会社および連結子会社の現在の計画、見直し、戦略などのうち、歴史的事実のないものは、将来の業績に関する見直しであり、これらは各資料発表時点においてSBIホールディングスの経営方針により、入手可能な情報およびSBIホールディングスが合理的であると判断した一定の前提に基づいて作成したものです。従って、主要市場における経済情勢やサービスに対する需要動向、為替相場の変動など、さまざまな要因の変化により、実際の業績は記述されている見直しとは、異なる結果となり得ることをご承知おきください。

2005

- 5月 ● シンガポール投資会社(テマセクグループ)と中国投資ファンドの共同設立に関する基本合意を発表
- 7月 ● ファンド運営事業等を分割し、連結子会社であるSBIベンチャーズ(株)(同月「ソフトバンク・インベストメント(株)」に商号変更)に承継するとともに、商号を「SBIホールディングス(株)」に変更
 - ソフトバンク・インベストメント(株)(旧商号SBIベンチャーズ(株))とパイオビジョンキャピタル(株)およびソフトバンク・コンテンツ・パートナーズ(株)はソフトバンク・インベストメント(株)を存続会社として合併
- 8月 ● SBIパートナーズ(株)の株式を追加取得し子会社化
- 9月 ● 総合不動産企業である(株)ゼファーの株式を取得し、持分法適用関連会社化
 - SBIホールディングス北京駐在員事務所を設立
- 10月 ● 財団法人「SBI子ども希望財団」を設立
 - 住友信託銀行グループとの新ネット銀行の共同設立と資本業務提携に関する基本合意を発表

2006

- 3月 ● 連結子会社であるSBIパートナーズ(株)およびファイナンス・オール(株)はSBIホールディングス(株)を存続会社として合併
 - 株式交換により、SBI証券(株)を完全子会社化
 - あいおい損害保険(株)との新ネット損害保険会社の設立についての共同検討・準備開始に関する基本合意を発表
- 4月 ● 新ネット銀行設立に向けて、設立に関する調査・情報提供を行う「(株)SBI住信ネットバンク設立準備調査会社」を創設
 - 主に金融機関向けのソフトウェア受託開発会社である(株)ソルクシーズとの資本・業務提携契約の締結を発表、同社の株式を取得し持分法適用関連会社化
- 5月 ● ダイレクト・マーケティングにおける広範な経験とノウハウを有する(株)ネクサスとの資本・業務提携契約の締結を発表、同社の株式を取得し持分法適用関連会社化
 - SBIフューチャーズ(株)が大阪証券取引所ヘラクレス市場に上場
- 6月 ● 保険業免許取得を目的とした準備会社である「SBI損保設立準備(株)」を設立
- 7月 ● アクサ ジャパン ホールディング(株)と合併による新ネット生命保険会社の設立に関する検討開始を発表
- 8月 ● インド最大の商業銀行インドステイト銀行グループとのインド投資ファンド共同設立に関する基本合意を発表
 - モーニングスター(株)の子会社ゴメス・コンサルティング(株)が大阪証券取引所ヘラクレス市場に上場
 - ソフトバンク(株)の完全子会社であるソフトバンク・イーエム(株)(現 ソフトバンクテレコム販売(株))が保有していた当社株式を売却したことに伴い、当社とソフトバンク(株)の資本関係は消滅。また、同月にソフトバンク(株)と金融ポータル事業の企画、運営等を行う合併会社設立について協議開始を発表

SBIグループの概要

SBIグループは2006年6月30日現在、当社及び連結子会社38社、持分法適用会社12社より構成されております。SBIグループは、主に金融業の分野である、ファンド運営事業を中心とする「アセットマネジメント事業」、証券業務を主とする「ブローカレッジ&インベストメントバンキング事業」、及び住宅ローン、保険をはじめとするさまざまな革新

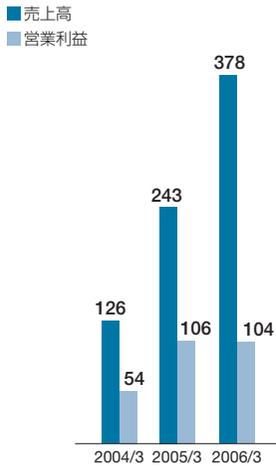
セグメント区分 連結売上高に占める売上構成比 (2006年3月期、%)	事業内容及び主な業務の内容 (2006年6月30日現在)	会社名 (持株シェア(間接保有を含む)、2006年6月30日現在)
アセットマネジメント事業  <p>27.6%</p>	<p>投資事業組合等の管理・運用 インターネット、バイオ、ブロードバンド、メディア関連のファンドの設立、管理及び運用等</p> <p>国内外のベンチャー企業等への投資 SBIホールディングス及び連結子会社の自己勘定による国内外のインターネット、バイオ、ブロードバンド、メディア関連を中心としたベンチャー企業等への投資</p> <p>住宅不動産 資産価値の向上が見込まれる不動産物件への投資や、開発利益が見込まれる不動産開発、不動産を中心とするファンドの組成・運営及び不動産関連ビジネスを展開するベンチャー企業への投資等</p> <p>投資顧問業務等 投資顧問業法に基づく投資運用・投資助言等</p>	<p>SBIインベストメント(株)(100%) SBIブロードバンドキャピタル(株)(100%) ソフトトレンドキャピタル(株)(80%) SBIキャピタル(株)(100%) SBIキャピタルソリューションズ(株)(100%)</p> <p>SBIホールディングス(株) SBI KOREA HOLDINGS CO., LTD.(100%)</p> <p>SBIホールディングス(株)(不動産事業本部) SBIプランナーズ(株)(100%) (株)ゼファー*(21.4%) [東証1部/8882]</p> <p>SBIアセットマネジメント(株)(100%)</p>
ブローカレッジ&インベストメントバンキング事業  <p>58.4%</p>	<p>証券業・商品先物業 投資家の幅広い投資ニーズに対応する証券や商品先物などの金融商品の提供及びブローカレッジ業務での集客力・販売力を生かした新規公開株式引受、社債引受などの投資銀行業務等</p>	<p>SBIイー・トレード証券(株)(53.0%) [JASDAQ/8701] SBI証券(株)(100%) SBIフューチャーズ(株)(62.1%) [ヘラクレス/8735] E*TRADE KOREA Co., Ltd.(87%)</p>
ファイナンシャル・サービス事業  <p>14.0%</p>	<p>マーケットプレイス、ファイナンシャル・プロダクト、ファイナンシャル・ソリューション 保険・ローン等金融商品の比較サイトの運営、住宅ローン、個人・事業者向けローン、リースなどの金融商品サービス、決済サービスの提供、金融向けソフトウェアの開発、投資信託の評価、コンサルティング事業等の幅広い金融サービス事業</p> <p>生活関連ネットワーク 行政サービス比較検索サイト「生活ガイド.com」及び総合比較・見積もりポータルサイト「比較ALL」にて提供する各種比較・検索・見積もりサイト等の運営を柱に、ライフイベント・ライフシーンから派生するあらゆるニーズに応えるためのネットワークを構築し、最良の商品・サービスの選択支援を通じて、顧客の購買行動をサポートする事業</p>	<p>SBIホールディングス(株)(ファイナンシャル・サービス事業本部) SBIモーゲージ(株)(81.2%) SBIイコール・クレジット(株)(100%) SBIリース(株)(100%) SBIベリトランス(株)(40.6%) [ヘラクレス/3749] SBIテクノロジー(株)(94.9%) モーニングスター(株)(49.92%) [ヘラクレス/4765] ゴメス・コンサルティング(84.9%) [ヘラクレス/3813] (株)キャナウ*(49%) (株)ソルクシーズ*(21.5%) [JASDAQ/4284] (株)ネクサス*(23.4%) [JASDAQ/2799]</p> <p>SBIホールディングス(株) (生活関連ネットワーク事業本部)</p>

*持分法適用関連会社
 注:ソフトバンク・インベストメント(株)は2006年10月1日付で、SBIインベストメント(株)に商号変更。

的金融サービスを提供する「ファイナンシャル・サービス事業」の3つのコアビジネスを中核的事業として事業展開し、さらに「住宅不動産事業」と「生活関連ネットワーク事業」を新たなコアビジネスと位置づけ、金融と非金融分野を併せ持つ5つのコアビジネス体制へ進化してまいっております。

業績
(2006年3月31日現在)
(単位:億円)

2006年3月期のハイライト

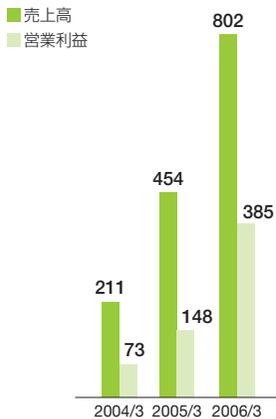


極めて好調な運用パフォーマンス

- 過去に設定したファンド群は償還期に向けて順調に分配金を積み上げ、運用期間中のファンドにおける2006年3月末までの累計分配実績の総額は818億円になりました。今後一年間、主要ファンドで2,000億円以上の追加分配を実施する見通しです。
- ITファンドの2006年3月末時点での時価純資産は、当初出資金1,505億円に対して約1.8倍の2,775億円に達しました。
- 2005年4月から2006年3月までの期間における、当社グループ並びに当社グループ運営ファンドからの投資先企業の株式公開は9社となりました(M&Aによるものを含む)。
- SBIアセットマネジメント(株)が運用する未公開株組入ファンドI・IIはともに基準価格の2倍程度の水準で償還し、未公開株組入ファンドIIはLipper Fund Awards Japan 2006の最優秀ファンド賞を受賞しました。

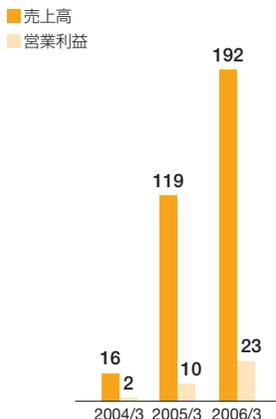
拡大し続ける運用規模

- ITを主要投資領域として、バイオ・企業再生分野、投資信託・投資顧問等を含めたSBIグループ全体の運用資産規模は2006年3月末で5,590億円に達しました。



ネット証券業界で圧倒的な競争優位性を有するSBIイー・トレード証券

- オンライン専門証券において国内最大の口座数、委託売買代金、預り資産を有するSBIイー・トレード証券(株)は、売上高602億円(前期比122%増)、連結経常利益300億円(前期比165%増)となり、ともに過去最高を更新しました。第4四半期の連結経常利益率は53.7%となりました。
- 2006年3月期の年間獲得口座数は575,035口座、同年3月末での口座数は116万口座を突破し、預り資産は前期比95.8%増加し4兆5,800億円に達しました。
- 圧倒的な顧客基盤を背景に、2006年3月期通期の個人株式委託売買代金シェアは続伸し23.1%となり、同第4四半期には24.9%とさらに躍進しました。また、機関投資家も含む全株式委託売買代金シェアにおいても、第4四半期に初めてシェア10%超となりました。
- 新規公開株式の引受実績は通期で94社となり、過去最高を更新しました。
- 対面型証券会社であるSBI証券(株)においても、2006年3月期営業収益160億円(前期比50%増)、経常利益81億円(前期比181%増)となり大幅な増収増益となりました。



良好な事業環境のなか安定的に業績拡大を続け収益に貢献

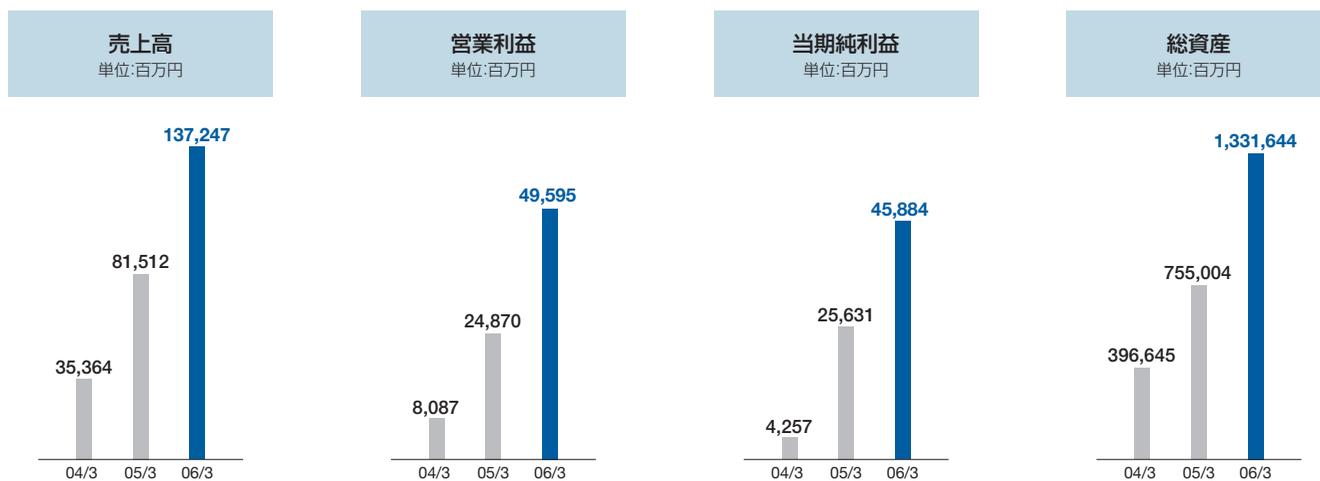
- **マーケットプレイス事業**
国内最大級に成長した金融系比較サイト「イー・ローン」「インズウェブ」を中心に見積もり等の取引数や提携金融機関数が順調に増加し、これら2サイトで売上高は29億円(前期比35.6%増)、営業利益は10億円(前期比39.6%増)となりました。
- **ファイナンシャル・プロダクト事業**
SBIモーゲージ(株)は、証券化を前提とした最長35年固定金利の公庫提携商品「フラット35」を最低金利水準(2006年4月実行金利2.701%)で提供、2006年3月末時点の住宅ローン実行残高は2,062億円(前期末比202.7%増)と堅調に推移しております。
- **ファイナンシャル・ソリューション事業**
SBIベリタランス(株)は、ブロードバンド化の進展とEC市場・クレジットカード市場の拡大を背景に売上高・利益の全項目において過去最高を更新しました。
- **その他**
昨今の日本における個人金融資産の貯蓄から投資への流れにのり、モーニングスター(株)の2005年12月期通期連結業績は、売上高12億円(前期比24.1%増)、営業利益2.5億円(前期比47.4%増)となりました。

連結財務ハイライト

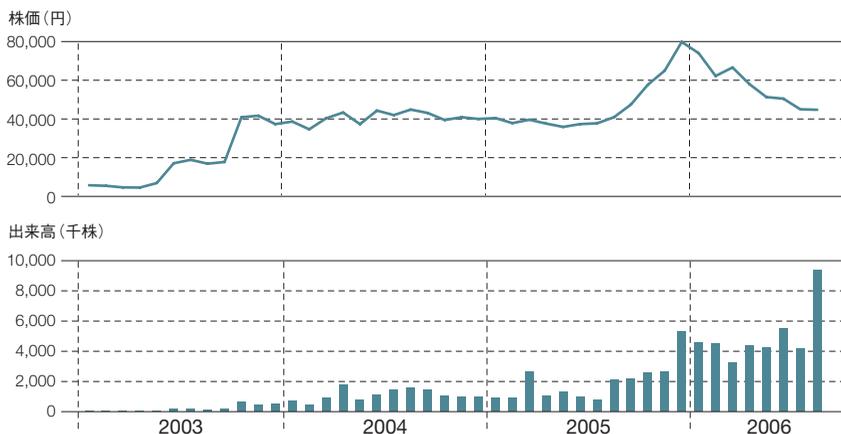
SBIホールディングス株式会社及び連結子会社

	単位:百万円 3月31日終了年度			単位:千ドル 3月31日終了年度
	2004	2005	2006	2006
売上高	¥ 35,364	¥ 81,512	¥ 137,247	\$1,168,359
営業利益	8,087	24,870	49,595	422,196
当期純利益	4,257	25,631	45,884	390,603
株主資本	47,465	129,419	268,123	2,282,480
総資産	396,645	755,004	1,331,644	11,336,034
株主資本比率 (%)	12.0	17.1	20.1	20.1
営業活動によるキャッシュ・フロー	(1,479)	(25,531)	(132,740)	(1,129,993)
投資活動によるキャッシュ・フロー	12,170	3,352	(33,137)	(282,085)
財務活動によるキャッシュ・フロー	16,453	94,305	200,746	1,708,911
現金及び現金同等物期末残高	34,361	106,460	132,545	1,128,329

米ドル金額は、便宜上、2006年3月31日現在の円相場1米ドル=117.47円で換算しています。



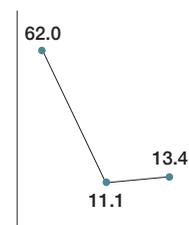
株価と出来高の推移



注: 株価は当該月の平均終値、出来高は当該月の平均出来高(遡及修正後)を使用。

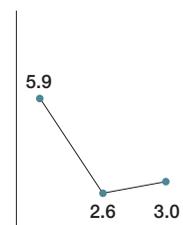
PER・PBRの推移

株価収益率 (PER) *1



第6期 (2004年3月期) 第7期 (2005年3月期) 第8期 (2006年3月期)

株価純資産倍率 (PBR) *2



第6期 (2004年3月期) 第7期 (2005年3月期) 第8期 (2006年3月期)

注1: 株価収益率(第6期、第7期及び第8期) = 各期末東証終値 ÷ 一株当たり当期純利益
なお、第8期末株価終値は66.600円
注2: 株価純資産倍率 = 各期末東証終値 ÷ 一株当たり期末純資産

SBIグループの経営理念

正しい倫理的価値観を持つ

「法律に触れないか」、「儲かるか」ではなく、それをすることが社会正義に照らして正しいかどうかを判断基準として事業を行う。

金融イノベーターたれ

従来の金融のあり方に革新を与え、インターネットの持つ爆発的な価格破壊力を利用し、より顧客の便益を高める金融サービスを開発する。

新産業クリエーターを目指す

21世紀の中核的産業の創造および育成を担うリーディング・カンパニーとなる。

セルフエボリューションの継続

経済環境の変化に柔軟に適應する組織を形成し、「創意工夫」と「自己改革」を組織のDNAとして組み込んだ自己進化していく企業であり続ける。

社会的責任を全うする

SBIグループ各社は、社会の一構成要素としての社会性を認識し、さまざまなステークホルダー（利害関係者）の要請に応えながら、社会の維持・発展に貢献していく。

SBIグループのビジョン

(2005年7月策定)

1. 顧客価値を土台として、株主価値・人材価値との相乗効果を働かせ企業価値の極大化を図る。
2. グループ内上場企業の合算時価総額を現在の約1兆円から3年後に3兆円、5年以内に5兆円とすることを目指す。
3. 「強い企業」から「強くて尊敬される企業」を目指す。

SBIグループでは、「経営理念」と「ビジョン」を明確に区別し、「経営理念」は経営トップの交代や環境変化で簡単に変更されるべきものではなく、長期的・普遍的な価値観を体現するべきものとして捉えています。

一方、「ビジョン」は望ましい組織の将来像を具体的に示すもので、現実妥当性や信頼性がなければならないものです。現在のような変化の激しい時代では、中期的なものになります。

Strategic Business Innovator—戦略的ビジネスの革新者として

SBIグループは、これまで主に金融分野において3つのコアビジネス「**アセットマネジメント事業**」「**ブローカレッジ&インベストメントバンキング事業**」「**ファイナンシャル・サービス事業**」を中核的的事业と位置づけ事業展開してまいりましたが、新たに「**住宅不動産事業**」と「**生活関連ネットワーク事業**」をSBIグループのコアビジネスと位置づけ、金融と非金融分野を併せ持つ5つのコアビジネス体制へ移行し、新たな進化のプロセスを歩んでいます。

この新体制のもとで、金融分野におきましては、より一層創造性にあふれる魅力的な金融商品の開発に取り組み、より多くの方々に利用していただけるよう「ネット」と「リアル」

の販売チャネルを通じて幅広く提供してまいります。また、投資家・消費者の皆様がそれぞれのニーズにあう商品やサービスを選択できるような充実した比較・検索サービスを合わせて提供し、我が国最大規模の金融商品ディストリビューターを目指します。さらに、金融の枠にとどまらず、さまざまな消費活動の場においても、金融分野同様にスマートで豊かな生活の創造に貢献する多様なサービスの提供にチャレンジしてまいります。

SBIは**S**trategic **B**usiness **I**nnovator (戦略的ビジネスの革新者)として、あらゆる業種・業界に革新をもたらす事業ポートフォリオを有する企業集団を目指します。

3つのコアビジネスから5つのコアビジネスへ



株主の皆様へ

2005年度のSBIホールディングスの連結業績は、全事業が極めて好調に推移し、売上高・営業利益・経常利益・当期純利益のすべてにおいて過去最高を大幅に更新しました。過去3年間も上昇基調で推移してまいりましたが、特に2005年度の連結業績は飛躍的に上昇しました。現時点での好業績に留まらず、すべての部門で今後の一層の飛躍を予想させるような決算状況となりました。

連結売上高は前年度比で68.4%増の1,372億円となり、ついに1,000億円を突破し、経常利益も500億円を突破して前年度比で88.2%増の513億円となり、営業利益は、99.4%増の495億円となりました。いずれも過去最高を大幅に更新しました。

配当につきましては、好調な業績推移を踏まえて、普通配当として1株につき600円(合併記念配100円を含む)の配当を実施し、前年度の350円から大幅な増配となりました。

また、グループ内の再編や、SBIグループとシナジーを有すると考えられる有力企業との資本提携を行った結果、期末発行済株式数は前年度末比1.4倍の1,222万株に増加しましたが、1株当たり当期連結純利益は前年度比で1.4倍、同連結株主資本は前年度末比で1.5倍となり、今後も1株当たりの価値を高めながら、さらなる成長ステージに向けた飛躍を目指してまいります。

各事業セグメントにおいては、アセットマネジメント事業が極めて好調なファンドの運用パフォーマンスを背景に、出資者への分配金が増加し、それが新規ファンドへの資金調達を容易とし、さらなる運用規模の拡大に繋がるなど、正に好循

環サイクルに入っており、またブローカレッジ&インベストメントバンキング事業においては、SBIイー・トレード証券が圧倒的な競争優位性を有し、いよいよ競争の最終局面を迎えるに至りました。ファイナンシャル・サービス事業においては「貯蓄から投資への動き」「ブロードバンド化の進展」「制度改革」など、日本に起こりつつある大きな潮流が同事業にとっての良好な事業環境をもたらし、業績にさらなる好転がもたらされました。

2005年度において当社は、2005年7月にファンド運営事業等を分割し、当社の100%子会社であるSBIベンチャーズ株式会社(同月「ソフトバンク・インベストメント株式会社」に商号変更)に承継したことにより、SBIホールディングス(ソフトバンク・インベストメントより商号変更)を中核とする持株会社体制へ移行し、「第二の創業期」とも言える大きな飛躍の時を迎えました。

2005年10月には、住友信託銀行株式会社との間で、オンライン証券業務をはじめとするSBIグループ各社の事業と親和性の高い「新ネット銀行」の設立に関して基本合意し、設立準備を鋭意推進するとともに、2006年1月には、双方の競争力・収益力の強化につながる多面的な業務提携を締結いたしました。

2006年3月には不動産関連事業を手掛けるSBIパートナーズ株式会社並びに、比較・検索サイトの運営と金融サービスを提供するファイナンス・オール株式会社を吸収合併すると共に、SBI証券株式会社を株式交換により完全子会社化し、5つのコアビジネス体制への進化を強力に推進する事業

体制を構築いたしました。

SBIグループは、これまで主に金融業の分野において3つのコアビジネスである「アセットマネジメント事業」、「ブローカーレッジ&インベストメントバンキング事業」、「ファイナンシャル・サービス事業」を中核的の事業と位置づけて事業展開してまいりましたが、これらに加えて新たに「住宅不動産事業」と「生活関連ネットワーク事業」をSBIグループのコアビジネスと位置づけ、金融の枠を超えて投資家や消費者の皆様の豊かな生活の創造に貢献できる企業を目指して、新たなスタートをきりました。

また、2006年8月には、ソフトバンク株式会社との資本関係を完全に解消し、同社の持分法適用会社ではなくなりました。これによって今後は、株価の相関関係の解消や、より柔軟な財務戦略・事業戦略の展開が可能になるものと認識しております。なお、同社とは今後も双方折半出資による合併会社を中核として事業上友好な関係を維持していく方針であります。

SBIグループはかかる新体制のもと、お客様のために、投資家のために、より革新的なサービス、ビジネスの創出にため、顧客価値、株主価値、人材価値の総和たる企業価値の極大化を追求してまいります。



北尾吉孝

代表取締役執行役員CEO

プロフィール

- 1951年 兵庫県生まれ
- 1974年 慶應義塾大学経済学部卒業後、野村證券(株)に入社
- 1978年 英国ケンブリッジ大学経済学部を卒業
- 1989年 ワッサースタイン・ペレラ・インターナショナル社(ロンドン)常務取締役
- 1992年 野村證券(株)事業法人三部
- 1995年 孫正義氏の招聘によりソフトバンク(株)入社(常務取締役管理本部長)
- 1999年 ソフトバンク・ファイナンス(株)代表取締役社長に就任
- 2005年 SBIホールディングス(株)代表取締役CEOとして現在に至る

主な著書

- 『進化し続ける経営』(英語翻訳・John Wiley & Sons, Inc.より出版予定)
- 『Eファイナンスの挑戦Ⅰ』(中国語翻訳・商务印书馆出版)(韓国語翻訳・Dongbang Media Co. Ltd.)
- 『Eファイナンスの挑戦Ⅱ』(韓国語翻訳・Dongbang Media Co. Ltd.)
- 『「価値創造」の経営』(中国語翻訳・商务印书馆出版)(韓国語翻訳・Dongbang Media Co. Ltd.)
- (以上、東洋経済新報社)
- 『中国古典から学んだ「不思議な力」』(三笠書房)(中国語翻訳・北京大学出版社)
- 『不変の経営・成長の経営』(韓国語翻訳・Dongbang Media Co. Ltd.)
- 『人物をつくる』(以上、PHP研究所)

新たな進化のプロセスへ—Strategic Business Innovator

SBIグループは、創業の原点である「顧客中心主義の徹底」をさらに進化させ、金融を超えた総合企業グループへと飛躍していきます。

Question | 1

主要ビジネスラインにおける今期（2006年度）の事業概況及び位置付けについて、教えてください。

投資の収穫期を迎えた運営ファンドの良好なパフォーマンス等を背景に、アセットマネジメント事業において特に好調な推移が見込めると同時に、ブローカレッジ&インベストメントバンキング事業とファイナンシャル・サービス事業においても引き続き好調に推移する見通しであり、2006年度の連結業績は、第1四半期のみで前中間期の各利益を大幅に上回っております。これらの極めて堅調な状況を勘案して株主還元を積極的に行うこととし、このたび初の中間配当を実施いたしました。なお、1株あたり中間配当金は前期通期の600円と同額を実施し、期末配当も600円を予定しております。

では、各事業部門ごとに今期の位置付けについて述べましょう。

アセットマネジメント事業

（1）名実ともに我が国のベンチャーキャピタル業界トップであることを明らかにしていく期

最近のファンド運用成績としましては、2002年に設立した企業再生分野のファンドである「企業再生ファンド1号投資事業有限責任組合」及び「ブイアール企業再生ファンド投資事業有限責任組合」を2006年8月に早期償還させ、いずれも25%を超える年間投資利回り（IRR）を達成し、運用実績を着実に積み上げております。また、当社グループの運用実績はいずれも概ねIRR20%を越えているなど、国内他社の競合ファンドと比較しても、圧倒的に高いパフォーマンスを挙げております。引き続き好調なパフォーマンスを持続させながら、既存ファンドの償還を補いつつ新たな資金も加える形で新規ファンドを設立し、ファンドの運用総額においても我国トップとします。

（2）BRICsを中心とするグローバルベンチャーキャピタル体制への移行期

旗艦ファンドであるソフトバンク・インターネットテクノロジー・ファンド（ITファンド）では、含み益が実現するなど本格的な投資の収穫期に入っておりますが、今後は国内IT関連に限らずグローバルな投資展開を積極的に図るべく、例えば日本においてはITやバイオ、中国では製造販売業、インドではソフトやハイテク分野、ロシアでは資源・エネルギーなどのように、各地域の最も成長が見込まれる産業群に積極的に資金を集中投資することで、多様化したポートフォリオをグローバルに組むことを図っていく予定です。

償還済みファンドのトラックレコード（償還実績）

2006年9月末現在（%）

償還ファンド名	償還時期	ネットIRR
ソフトバンクベンチャーズ匿名組合	2002年12月	20.5
ソフトベン2号投資事業組合	2004年10月	20.4
SBI・LBO・ファンド1号	2006年6月	18.3
企業再生ファンド1号投資事業有限責任組合	2006年8月	25.7
ブイアール企業再生ファンド投資事業有限責任組合	2006年8月	27.7



北尾吉孝
代表取締役執行役員CEO

(3) グループ内に銀行・損保・生保等の機関投資家群を抱えることによる新運用体制構築に向けた準備期

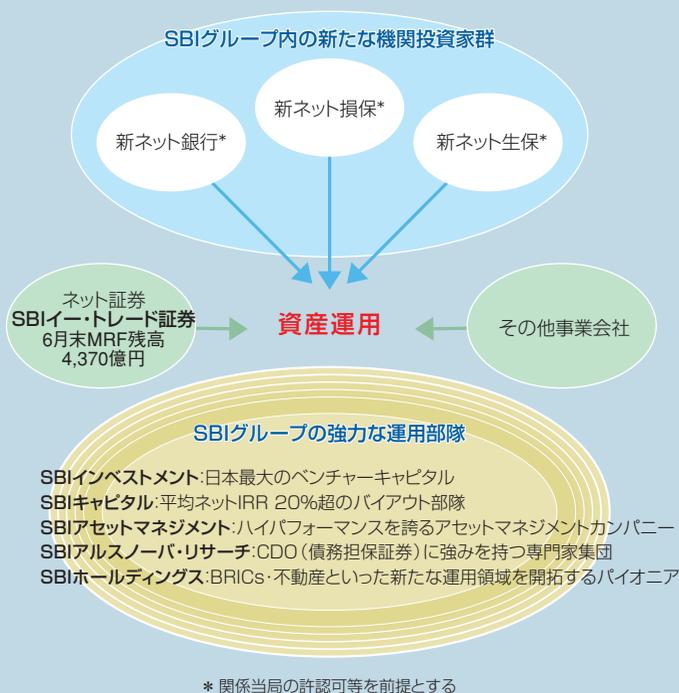
住友信託銀行との提携による新ネット銀行設立準備を始め、あいおい損保との新ネット損保の設立準備およびアクサ ジャパン ホールディングとの新ネット生保の設立準備などを背景に、当社グループ内に新たな機関投資家群を抱える土台を整えつつあります。それにより運用資産規模の拡大を図り、当社グループの運用ノウハウを活かして、継続的に良いパフォーマンスを生み出す運用体制を築き上げていこうと考えています。それが、各新事業会社の業績を上げていくことにも大きく寄与するものと確信しております。例えば、ネット銀行では高い預金金利が可能となったり、ネット生保ではより大きな配当を可能とするわけです。

ブローカレッジ&インベストメントバンキング事業

(1) ネット証券業界の競争に決着をつけるべくシェアを一層高める期

SBIイー・トレード証券は、ネット証券業界の競争に決着をつけやすい低迷する相場環境の中で、業界最低水準の手数料体系を提示するとともに、魅力的な商品・サービス、安定的なシステムの提供によりシェアを一層高めていくことを目指します。これまで、個人株式委託売買代金シェアにおいて、2006年3月期通期23.1%、2007年3月期第1四半期27.3%、2006年6月単月では33.5%とシェアを高めてきております。

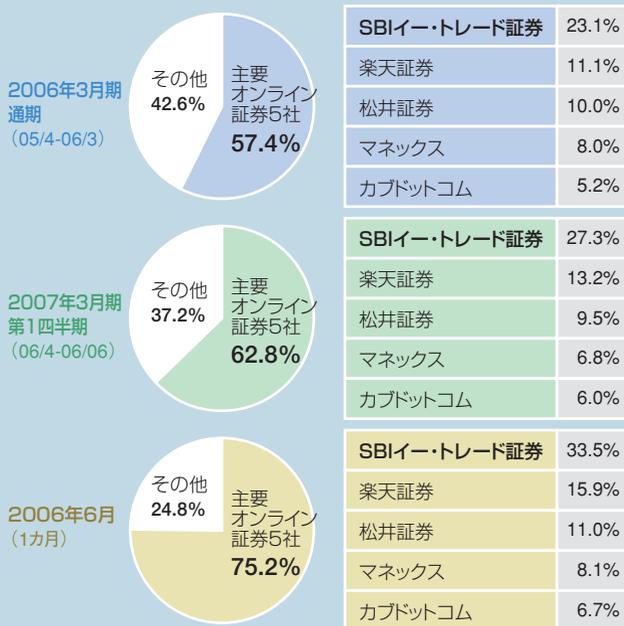
尚、2006年9月末現在の同社の口座数は131万口座を突破し、預かり資産の残高は9月末現在で3兆8,284億円と、それぞれネット証券会社で圧倒的に優位なポジションを確立しています。



主要オンライン証券の個人株式委託売買代金シェア

SBIイー・トレードのシェアは第1四半期27.3%、6月33.5%へと上昇

個人株式委託売買代金比較



出所:東証統計資料、JASDAQ統計資料、各社ホームページ等公表資料より当社にて集計
 注1:個人株式委託売買代金は3市場(1・2部)とJASDAQを合算
 注2:マネックス証券、日興ビーンズ証券はマネックスとして合算
 注3:カブドットコム証券は2006年1月にMeネット証券と合併

(2) 収益源のさらなる多様化を推進する期

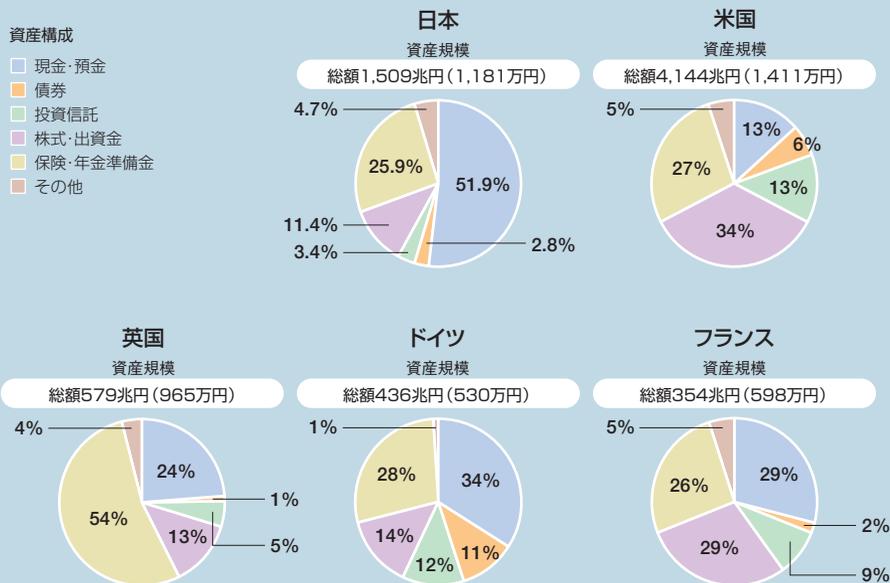
SBIイー・トレード証券は、口座数・預かり資産・売買代金シェアといった圧倒的な顧客基盤を背景に、収益源のさらなる多様化を目指してまいります。例えば、信用取引における金利収入を中心とした金融収益は、2007年3月期第1四半期で4,086百万円（前年同期比80%増）を計上するに至っておりますが、他にも外国債券の販売、先物・オプション取引、貸し株業務の展開等、顧客ニーズにあった多種多様な商品・サービス提供による収益拡大を図ってまいります。

(3) 投資初心者層の取り込みにより、さらなる顧客数増加を目指す期

SBIイー・トレード証券は、「貯蓄から投資へ」の流れの中、投資初心者向けサイト「イー・トレード エレメンタリー（仮）」や投資家と企業とのコミュニケーションサイト「イー・トレード SNS (Social Network Service) (仮)」などの立ち上げによる、飛躍的な顧客数増加を目指してまいります。2007年3月期第1四半期におけるSBIイー・トレード証券への新規口座開設者のうち、株式投資未経験者は約63%に達しておりますが、より初心者に特化した別サイトを立ち上げることにより、「貯蓄から投資へ」の流れを的確に捉えてまいります。

日本は今、欧米諸国並みの個人金融資産ポートフォリオへの移行期

- 日本の個人金融資産の総額は1,509兆円で英独仏3カ国合計（1,369兆円）を上回る規模
- 日本国民一人あたりの金融資産は1,181万円



注：()内は国民一人あたりの金融資産の額
日本銀行調べ 日本2005年12月末、米国2005年6月末、他2001年12月末時点

(4) ネットとリアル連携強化およびインベストメントバンキング業務・プライベートバンキング業務等に本格的進出する布石を打つ期

SBIイー・トレード証券においては、ブローカレッジにおける圧倒的なシェアを背景に、株式新規公開の主幹事業のみならず、SBI証券との連携を強化することでセカンダリー（PO）での引受業務等のインベストメントバンキングを強化してまいります。また対面型証券であるSBI証券においては、きめ細かなサービスを必要とする顧客に対するプライベートバンキング業務の本格的展開へ向け、体制構築を進めてまいります。そして、両社が相互に補完・連携し、SBIグループとして多様な顧客ニーズへ応えられる体制を目指してまいります。

ファイナンシャル・サービス事業

(1) 安定的収益部門としての当部門の貢献度を高める

ファイナンシャル・サービス事業においては、「貯蓄から投資へ」「ブロードバンド化の進展」「制度改革」などの時流に乗り、グループ各社を取り巻く良好な事業環境がさらに好転している状況の中、業績拡大に拍車をかけ、安定的収益部門としての当部門の貢献度を高めてまいります。

グループ各社においては、日本の家計の金融資産が「貯蓄から投資へ」の移行を背景に、モーニングスター（株）では、株式投資信託など資産運用商品の評価や中立的な立場からの投資アドバイスに対するニーズの増加により収益機会が拡大いたしております。

また、ブロードバンド化の進展に伴い当社が運営する国内最大級に成長した保険やローン商品を中心とした比較・一括見積もりサイトを運営するマーケットプレイス事業が安定的に見積もり・仮申込み等の取引件数を伸ばしております。また、EC（電子商取引）事業者向け決済ソリューションを提供するSBIベリトランス（株）では成長市場であるEコマース市場の伸びを上回る成長が期待できる状況であります。

さらに、2007年4月に住宅金融公庫が廃止となり独立行政法人の住宅金融支援機構へ移行していくといった流れの中、SBIモーゲージ（株）は業界最低水準金利での長期固定金利型住宅ローン商品を提供する会社として独自のブランドを確立しつつあり、着実にローン実行残高を伸ばしております。

(2) 金融生態系の完成を目指すとともに近い将来の飛躍的収益拡大の礎を築く

革新的な金融サービスを提供する「金融イノベーター」として事業を展開する上では、信頼と信用の証としてのブランドを早期に確立することが重要であると考えております。また、有力な事業パートナーを得て、今期（2006年度）については、ネット銀行・ネット損保・ネット生保業務等を新たに開始する本格的準備を行い、金融生態系の完成を目指すとともに、グループシナジーを追求し、近い将来の飛躍的収益拡大の礎を築く期と位置付けています。そのためにも、グループ内企業との強力なシナジー効果を生み出す事業分野への進出や、非金融分野へのサービス拡大を事業の一つとして確立することが必要であると考えています。具体的には、証券業務との高い親和性を有する銀行業務への進出、モドルリスクに焦点を当てた消費者及び事業者ローン事業やカード事業の展開、金融商品を中心としたマーケットプレイス事業の非金融分野への拡大などであります。

事業環境の好転が確実に業績数字に具現化

（ ）は前年実績比増減率 (百万円)

		2004/3	2005/3	2006/3
SBIベリトランス（株）	売上高	544	944 (+74)	1,916 (+103)
	経常利益	135	225 (+67)	395 (+76)

		2003/12	2004/12	2005/12
モーニングスター（株） （連結）	売上高	924	1,015 (+10)	1,259 (+24)
	経常利益	136	174 (+28)	263 (+51)
ゴメス コンサルティング（株）	売上高	163	234 (+44)	373 (+59)
	経常利益	54	80 (+48)	127 (+59)

		2003/9	2004/9	2005/9
ファイナンス・オール（株）* （単体）	売上高	760	1,654 (+217)	2,922 (+77)
	経常利益	91	318 (+249)	628 (+196)

* ファイナンス・オール（株）は2006年3月、SBIホールディングス（株）と合併

Question | 2

SBIグループの企業生態系を今後どのように成長させていくのでしょうか。

SBIグループは、1999年にソフトバンク本体が純粋持株会社に移行し、各事業部門を子会社として独立させた際に、私が管轄していたソフトバンクの旧管理本部55名で金融関連事業を担当する中間持株会社「ソフトバンク・ファイナンス（現ソフトバンクテレコム販売（株）」）を中核として設立した企業グループであり、これまで金融を中心業務に据えてさまざまな事業を展開し、総合金融グループの形成を目指してまいりました。

2005年3月にソフトバンクの連結から外れて事業領域の制約がなくなって以来、金融事業で培ってきた経営資源やビジネスノウハウを活用することにより、金融と密接する事業領域やグループ各社と関わりの深い金融以外の事業領域など、金融生態系をより拡大・強化していくことに貢献する領域への積極的な進出を図ってまいりました。現在では「金融生態系」「住宅不動産生態系」「システム関連生態系」の3つの生態系の構築を推進しております。これら3つの生態系が相互にシナジーを働かせることにより、グループ全体を

1つの大きな企業生態系に発展させていく新たなステージにSBIグループは到達しております。

1) 金融生態系

我が国最大の金融商品ディストリビューターになる

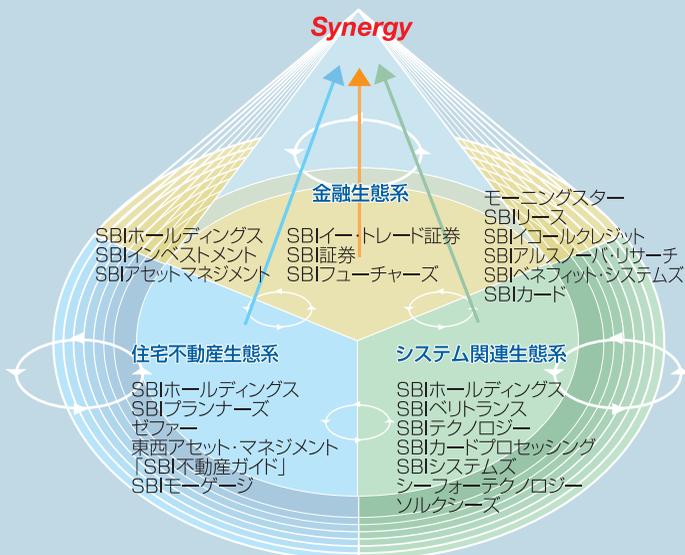
今後の事業展開としては、2007年度に住友信託銀行との提携による新ネット銀行の設立を目指しています。銀行は金融業の中でも中核的な業務であることから、金融を主たる事業分野とする以上は必要不可欠な業務だと考えていました。同時に、証券業とは異質のストックビジネスであることや、80年代の米国や90年代の日本における銀行の状況を鑑みてそう簡単なものではないという認識も持っており、どの時点で進出に踏み切るかが大きな課題になっていました。

このタイミングで設立に踏み切った理由としては、SBIグループとしての企業生態系がある程度確立できたと判断した為です。すなわち、我々は新銀行で、銀行の三大機能である「調達（預金受入）」「運用（貸出）」「決済」のすべてを行うフルバンキング業務を展開したいと考えており、その成功のためには、新ネット銀行自身が他の企業生態系内のグループ各社、例えば、日本最大級のベンチャーキャピタルであるSBIインベストメント（旧ソフトバンク・インベストメント）や、131万超の口座を有する国内オンライン証券最大手のSBIイー・トレード証券、2,400億円超の住宅ローン実行残高を有するSBIモーゲージをはじめとしたグループ各社と関連を持ち、グループのシナジーを十分発揮でき、新銀行とのシナジーが期待できる企業生態系が整うことが不可欠だという考えがあったからです。

例えば、ベンチャーキャピタル事業との連携で株式公開を目指す企業へ融資するといったことも新銀行の柱の一つになると考えています。我々のグループがベンチャーキャピタル事業で投資した先は毎年20社程度が公開しており、それらの成長企業を良質な融資先とした銀行取引も可能になるものと考えています。

なお、住友信託銀行との提携以外にも、例えば、あいおい損保と共同で新ネット損保の設立準備を進めているほか、アクサ ジャパン ホールディングと新ネット生保の設立を目指しているように、今後もリアルな世界のエスタブリッシュメントとさまざまな提携をしながら、ネットの世界での我々のプレゼンスをより高めていくことになると思います。そして、銀行、損保、生保をそれぞれSBIイー・トレード証券並みに育ててい

企業生態系相互のシナジーによる新たな発展のステージへ



くことに全力投球していきます。これが育てば、巨大な金融グループの完成といえます。

ネットという非常に強力な武器を手にしなが、顧客中心主義を貫き、あらゆる金融商品において顧客にとって最も良い商品を販売する「我が国最大の金融ディストリビューター」になるべく、着々と構想を描いているところです。

2) 住宅不動産生態系

既存生態系と多大なシナジーが見込める住宅不動産分野においても強力な企業生態系の構築を目指す

不動産分野につきましては、不動産証券化商品などに代表される不動産金融化商品の広がり背景として、この分野での事業展開に向けた中核会社とするべく、2005年8月にSBIパートナーズ(株)を子会社化いたしました。その後、総合不動産企業である(株)ゼファーや、不動産証券化等に実績を有する東西アセットマネジメント(株)を持分法適用会社化するなどし、住宅不動産生態系のさらなる拡大を目指して、2006年3月にはSBIパートナーズ(株)と合併しました。今後は当社の信用力ならびに資金調達力をもって同住宅不動産事業の拡大を図ってまいります。

また、2006年7月には住宅不動産情報のポータルWebサイトである「SBI不動産ガイド」(<http://www.re/guide.jp/>)

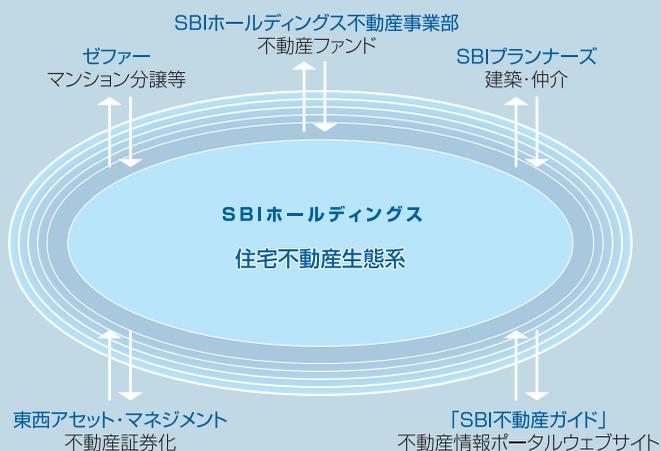
を新たに開設し、不動産購入希望者や所有者に対して「選ぶ」「建てる」「投資する」「売る」「管理する」「調べる」「リフォーム」の 카테고리の中から利用者のニーズに応じてさまざまな情報を提供するとともに、投資物件を中心としたオークションの場を提供いたします。なお、住宅不動産取引に付随して必要となる金融商品や管理サービス等に関しては、SBIグループ各社と連携して住宅ローン商品や損害保険、家賃保証等のサービスを紹介するなど、SBIグループの持つ強みを活かしてまいります。

3) システム関連生態系

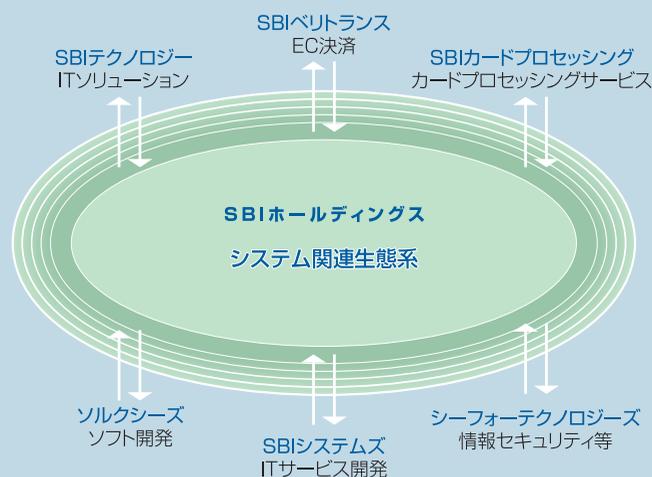
グループ内企業のシステム構築・維持管理に大きく貢献するシステム開発分野での企業生態系の形成を目指す

SBIグループでは、インターネットを媒介として金融及び金融以外の分野での広範囲にわたる事業展開をしております。そのため、グループ内のシステム構築を重要事項と捉え、グループ内企業のシステム構築や維持管理に大きく貢献するシステム関連生態系の形成を促進させております。具体的には、情報セキュリティ技術を有する(株)シーフォーテクノロジーやソフト開発会社である(株)ソルクシーズとの業務・資本提携を行っております。また、カードプロセッシングサービス事業へと新規参入するため、当社とマレーシアの

住宅不動産分野においても強力な企業生態系の構築を目指す



システム関連分野においても企業生態系の構築を目指す



SilverlakeGroupと合併会社を設立し、日本において共同事業の運営を開始しております。

SBIグループは、金融の枠にとどまらず「住宅不動産分野」及び「システム関連分野」においても企業生態系の構築を目指し、消費者の皆様のライフイベントやライフステージで常にお役に立てる多様なサービスを提供し、成長し続ける企業集団を目指してまいります。

Question | 3

ソフトバンクとの資本関係が解消となりましたが、SBIグループにとってどのような影響があるのでしょうか。

当社は、財務戦略の一環として、経営環境の変化に対応した機動的な資本政策を遂行するべく、7月31日に約500億円の自社株買いを発表し、その後、ソフトバンク(株)が同社の完全子会社であるソフトバンク・イーエム(株)(現 ソフトバンクテレコム販売(株))を通じて、保有する当社の全株式を売却しました。

なお、当社はこれまでの利益等により十分な純資産を積み上げてきており、今回の自社株取得発表後の8月1日にも、日本の格付機関(R&I)より「安定した経営基盤を構築している」「2006年6月末の連結純資産は3,507億円あり、格付けを変更するほどの影響はない」「格付の方向性:安定的」との評価をいただいております。

ソフトバンク(株)と当社との資本関係は消滅となりましたが、事業面においては今まで以上に強固な関係を維持、発展させることで両社は合意しております。その一環として、同月にソフトバンク(株)と双方出資による金融ポータル事業の企画・運営等を目的とした合併会社の設立について協議を開始するなど、今後も事業上友好的な関係を維持していく所存であります。

ソフトバンク(株)が中間持株会社ソフトバンク・イーエム(株)を通じて保有するSBIホールディングス株式の保有比率と関係

年月	保有比率	摘要
2004年9月末	46.9%	連結子会社
2005年3月末	38.3%	持分法適用関連会社 (公募増資及び第三者割当増資)
2006年3月末	26.5%	持分法適用関連会社(2006年3月1日の株式交換・合併により)
2006年8月1日	19.1%	持分法適用関連会社から除外 (ToSTNet-2を通じた当社株式一部売却)
2006年8月2日	0%	資本関係が解消 (SBIホールディングスの全株式を売却)
2006年8月18日	0%	金融ポータル事業を目的としたソフトバンクとの合併会社設立に関する協議開始を発表

アセットマネジメント事業

好循環サイクルに入ったアセットマネジメント事業

アセットマネジメント事業の主要企業

SBIインベストメント(株)*

ベンチャーキャピタルファンド等の運用・管理

SBIキャピタル(株)

バイアウト・企業再生ファンド等の運用・管理

SBIキャピタルソリューションズ(株)

メザニンファンド等の運用・管理

SBIブロードバンドキャピタル(株)

ブロードバンドに特化したベンチャーファンドの運用

SBI KOREA HOLDINGS CO., LTD.

ベンチャーキャピタルインベストメント

SBIアセットマネジメント(株)

投資信託委託業、有価証券等に係る投資顧問業

*2006年10月1日付でソフトバンク・インベストメント(株)より商号変更

アセットマネジメント事業では、既運用ファンドの好調なパフォーマンスを背景に、出資者への分配金が増加し、信用力・ブランド力が強化されると同時に、新規に立ち上げているファンドへの資金調達が容易となり、運用資産が順調に拡大していくという好循環サイクルに入っております。

ITファンドの運用状況

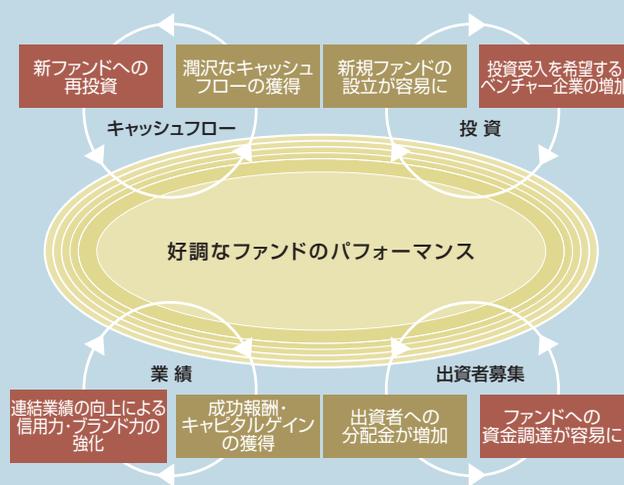
旗艦ファンドであるソフトバンク・インターネットテクノロジー・ファンド(ITファンド)の2006年6月末時点での時価純資産額は、当初出資金1,505億円に対して約1.7倍の2,567億円に達しました(内訳:投資残高197億円、累計配当含む現預金2,030億円、含み益113億円、成功報酬227億円)。

尚、2006年4月にITファンド及びソフトバンク・インターネットファンドにおいて、含み益の現金化による出資者への分配見込額が大幅に増加するなど、業績ならびに信用力・ブランド力の強化に寄与しております。

新設ファンド

ITファンドが2007年6月に償還を迎えますが、その次期主力ファンドとして積極的に新ファンドを設立しており、2004年9月以降に設定してきた「SBIブロードバンドファンド(SBIブロードバンドキャピタル投資事業匿名組合とSBIブロードバンドファンド投資事業有限責任組合を総称)」(535億円で募集完了)や、その衛星ファンドの一つとして(株)フジテレビジョン、(株)ニッポン放送と共同で2005年3月に当初出資金額200億円で設立した「SBIビービー・メディアファンド(SBIビービー・メディア投資事業有限責任組合)」が順調に育っております。その後、2006年3月には「モバイルファンド(SBIビービー・モバイル投資事業有限責任組合)」の募集が順調に進み、募集上限金額の320億円で設立が完了しました。このファンドは、モバイルテクノロジー・モバイルコンテンツ・無線技術等に関連する企業のうち、中長期的に高い成長が見込まれる国内外の未公開企業が発行する株式・新株予約権等に投資し、今後拡大するモバイル&ワイヤレス関連のベンチャー企業を育成していきます。

アセットマネジメント事業の好循環サイクル



ITファンドの運用状況と成功報酬体系



成功報酬の算出テーブル
 当初出資金を超えるキャピタルゲイン*に対する成功報酬の割合
 ・50%以下の部分⇒20%
 ・50%超200%以下の部分⇒35%
 ・200%超⇒50%
 *キャピタルゲイン≒簿価純資産-当初出資金

企業再生分野においては、上場株も対象とする「バリューアップファンド(SBI Value Up Fund 1号投資事業有限責任組合)」の募集が順調に進み、2006年9月に231億円で設立が完了しました。このファンドは、事業承継・MBO等をはじめとするバイアウト投資や企業再生投資等を積極的に推進し、高いパフォーマンスを目指します。

このように、各ファンド事業とも順調に進捗しており、今後も現状の運用資産残高を維持しながら同事業の推進を図ってまいります。

また、グローバルなアセットマネジメント事業の展開については、中国経済の今後の高い成長を見込み、中国への事業進出と現地市場の開拓を図っており、2005年5月にはシンガポールの投資会社TEMASEK Holdings (Private) Limited(テマセク・ホールディングス)の100%子会社と共同で、当初出資額1億米ドルの投資ファンド「New Horizon Fund」を設立し、同年9月に設立した北京駐在員事務所を拠点として、有望な中国企業へ積極的に投資を行ってまいりました。2006年8月には、インド最大の商業銀行State Bank of India(インドステイト銀行)の100%子会社であるSBI Capital Markets Ltd.と、インドの有望な新興企業を投資対象とする出資約束金額1億米ドルの投資ファンド共同設立について基本合意したほか、2005年9月には近年高い成長を遂げているマカオ(中国)に100%出資による現地法人を設立し、住宅不動産事業を起点とした投資を展開してまいります。

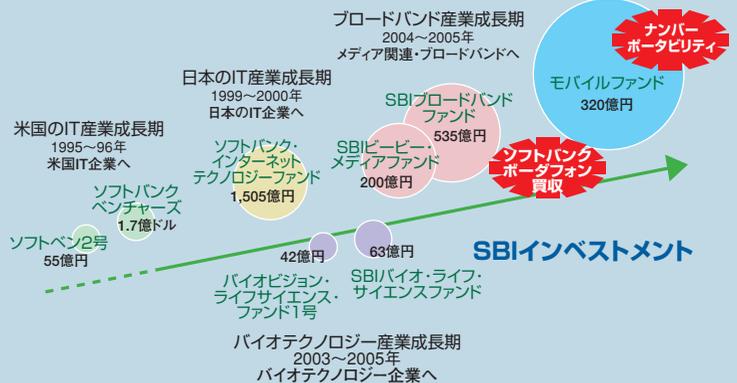
現在のSBIグループのファンド運用規模

従来より主要投資領域としてきたIT・バイオ・企業再生分野に加えて、新たなコアセグメントである不動産事業分野においても積極的に新ファンドの設定を行い、2006年6月末現在のSBIグループ全体の運用資産規模は、総額で4,776億円、投資企業数は300社(延べ社数)となっています。

モバイルファンドの新規設立が完了

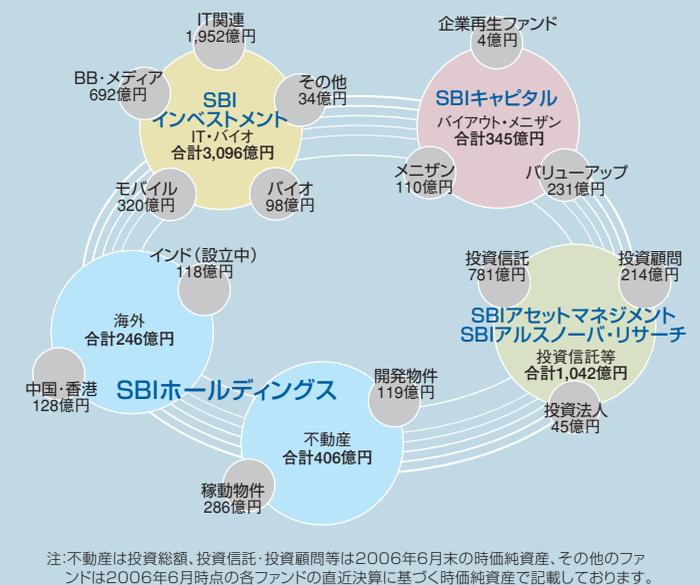
募集上限金額の320億円で設立が完了

モバイル&ワイヤレス産業成長期
2006年～
モバイル&ワイヤレスへ



SBIグループファンド運用規模

今後大量に流入することが見込まれる運用資産を待ち受ける規模・質ともに充実したSBIグループの運用ラインナップ



注:不動産は投資総額、投資信託・投資顧問等は2006年6月末の時価純資産、その他のファンドは2006年6月時点の各ファンドの直近決算に基づく時価純資産で記載しております。

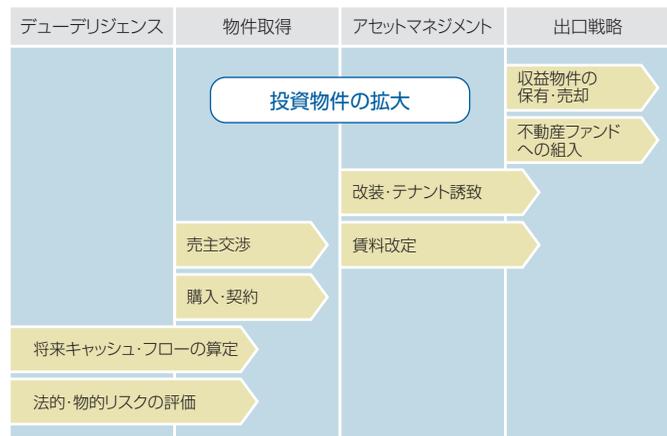
住宅不動産事業

SBIグループの新たなコアビジネスとして、金融の枠組みを超える成長分野として「住宅不動産事業」への取り組みを本格化させております。

物件の開発からファンドの出口戦略まで、SBIグループのビジネスラインを最大限活用して、資産価値の向上が見込まれる不動産物件に対して積極的に投資し、不動産投資ビジネスを強力に推進しています。

新設ファンドについては、当社グループのベンチャー投資における強みを活かし、未公開株式を組入れた公募型不動産ファンド「SBI未公開株式組入不動産ファンド匿名組合(愛称“四葉のクローバー”)」の組成を行い、グループのネット証券会社SBIイー・トレード証券(株)及び、リアル証券会社SBI証券(株)を通じて個人投資家へ販売するなど、グループ内の経営資源を最大限に活用しております。

また、2006年9月に、中国の特別行政区として近年高い成長を遂げているマカオにおいて、100%出資による現地法人「SBI MACAU HOLDINGS LIMITED」を設立しました。好調な観光・娯楽産業、大型カジノ設立計画などを背景に居住・商業用不動産の需要が急拡大しているマカオにおいて、当社は住宅不動産事業を起点とした投資を展開してまいります。



ブローカレッジ&インベストバンキング事業

業界最低水準の手数料体系を維持し続けている 圧倒的な競争優位性を持つネット証券事業

ブローカレッジ&インベストメントバンキング事業の主要企業

SBIイー・トレード証券(株)

オンライン総合証券 JASDAQ上場(銘柄コード 8701)

SBI証券(株)

証券業

SBIフューチャーズ(株)

オンライン商品先物取引業 大証ヘラクレス上場(銘柄コード 8735)

E*TRADE KOREA CO., LTD.

韓国におけるオンライン証券業

証券業界におけるポジショニング

業界最低水準の手数料体系を常に提示し続けるSBIイー・トレード証券は、オンライン証券業界でトップの地位を確立しております。

SBIイー・トレード証券は、2006年1月にオンライン専門証券として初めて顧客口座数100万口座を突破しました。2006年9月末現在の口座数は131万1,004口座(前年同月末は77万7,455口座)、信用取引口座数は13万5,163口座(前年同月末8万1,195口座)、預り資産は3兆8,284億円(前年同月末2兆9,631億円)に達し、それぞれオンライン専門証券の中で第一位であるばかりでなく、業界でのシェアをますます拡大しつつあります。

株式委託売買代金比較

SBIイー・トレード証券の株式委託売買代金(機関投資家や外国人からの委託を含む)は、2005年3月期4Qに野村証券を抜いて以来、2位以下との差をさらに拡大させながら、全証券会社中No.1の地位を確立しております。

また、2006年6月の1日当たり平均株式委託売買代金*は325,955百万円(前年同月は179,926百万円)となり、前年同月と比較して大幅に増加しております。

*機関投資家・外国人を除く。

SBIイー・トレード証券のIPO引受実績

2006年3月期のSBIイー・トレード証券の新規株式公開の取扱い実績は94件、累計で330社となりました。2006年4月から6月の引受社数は34社となり、新規上場企業49社に対する関与率は69.4%と、全証券会社中で第1位となっております。

また新規上場株式主幹事引受業務につきましては、2005年9月の業務開始以来、2社の主幹事を務めております(2006年8月現在)。今後も、グループのベンチャーキャピタル部門との連携を活かして、新規上場の引受実績を積み上げてまいります。

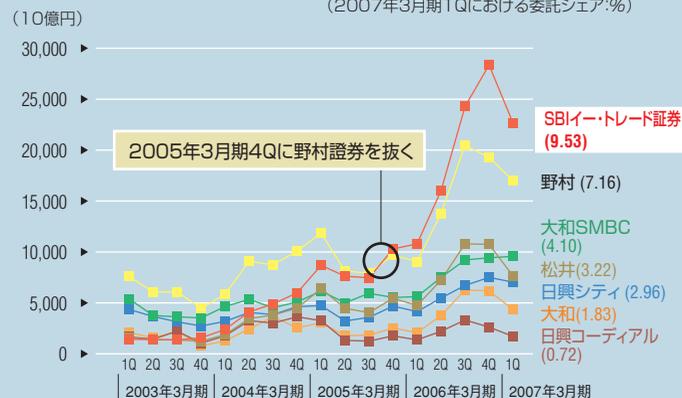
圧倒的顧客基盤の獲得

主要オンライン証券の口座数(2006年9月末現在)



主要証券会社の株式委託売買代金比較

(2007年3月期1Qにおける委託シェア:%)



(())内は各社委託売買代金を3市場委託で除したシェア
出所:証券会社各社・東証の公表数値をもとに当社作成(SBIイー・トレード証券分には海外投資家からの注文を含みます)

実績を積み上げるIPO引受実績

SBIイー・トレード証券
新規公開株式引受実績



当四半期は前年同期を上回る社数を獲得
*上場日ベース、委託販売・不動産投信を除く

IPO引受社数ランキング
(2006年4月~2006年6月)

全証券会社中第1位

順位	社名	引受社数	関与率 (%)
1	SBIイー・トレード証券	34	69.4
2	三菱UFJ証券	32	65.3
3	新光証券	26	53.1
4	マネックス証券	26	53.1
5	大和証券SMBC	23	46.9
6	野村証券	22	44.9
7	日興シティグループ	21	42.9

*公表資料等より分かりうる限りで当社にて集計。
集計対象は06年4月~6月までの新規上場企業49社(上場日基準)の国内引受分で、追加売出分などは含まず。

ロングテール理論からの戦略

SBIイー・トレード証券の131万口座には、インターネットの特質から、株式投資初心者やアクティブ層、若年層から60代・70代の層まで幅広く存在しています。これら多様化する顧客を広くカバーして“ロングテール”の収益化に努めております。

SBIイー・トレード証券では、富裕層をターゲットとするリアル（対面型）証券とは対照的に、金融資産が少ない小口の顧客をもターゲット層としており、コストの高いリアル証券がこれまで収益化できなかった小口顧客を圧倒的多数獲得するなど、多数の個人顧客の開拓が実現し、“ロングテール”の収益化に成功しました。

SBIイー・トレード証券では、このロングテール理論のさらなる発展戦略として、「新規顧客の獲得」及び「取引頻度の上昇」に注力することで、ロングテールをさらに長く太くしていくことが可能であると考えています。

ロングテールをさらに長くする「新規顧客の獲得」の戦略

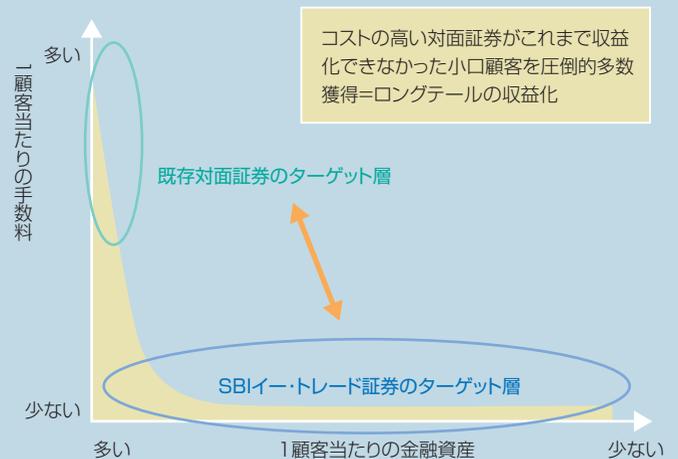
SBIイー・トレード証券の口座開設者における株式投資未経験者の割合は64.5%を占めていますが、さらなる株式投資未経験者獲得を図るべく、例えば、これらの投資家をターゲットとした初心者向けサイトの開設に向けて取り組んでいます。

ロングテールをさらに太くする「取引頻度の上昇」の戦略

アクティブトレードを支援する取引機能を充実させたリアルタイム・トレーディングツール「HYPER E*TRADE」やそのモバイル版「HYPER MOBILE」の提供、ATMカード（キャッシュカード／イー・トレードJCBカード）の発行開始などにより、取引頻度の増大を図っております。

また、2005年12月には、取引システムをこれまでの100万口座体制の1.5倍となる150万口座体制に増強し、2006年5月には175万口座体制へ、さらに7月には200万口座体制に増強しました。オンライン専業証券にとって取引システムは重要な生命線であるとの認識に立ち、今後も

SBIイー・トレードは“ロングテール”の収益化に成功



使いやすく、多機能で、オンライン証券初のマウス操作だけで注文ができる機能を備えたHYPER E*TRADE

機動的なシステム増強を行っていくことで、個人投資家に対してストレスのない取引環境の提供に努めております。

このように、引き続き業界最低水準の手数料体系の維持を追求するとともに、顧客利便性の向上を図ることにより、顧客の裾野の広さであるロングテールを長く太くし続け、さらなるビジネスの拡大を図ってまいります。

証券事業における「ネットとリアルの融合」

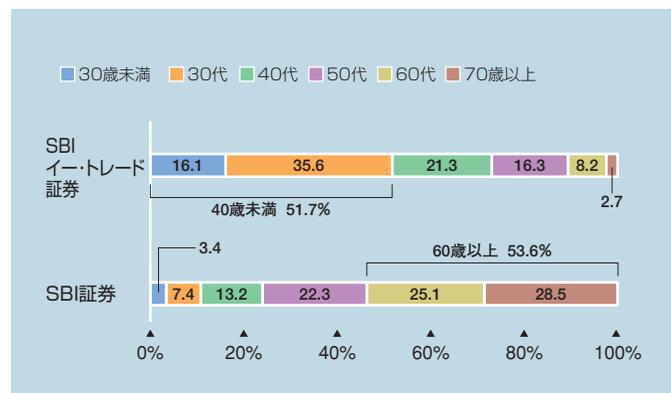
ネット証券であるSBIイー・トレード証券の顧客は、40歳未満が約52%を占めている一方で、リアル（対面型）証券であるSBI証券では、60歳以上が53.6%も占めています。

SBIグループが目指す「顧客中心主義」とは、インターネットを利用する・しないに関わらず、すべての世代のお客様に対してあらゆる商品・サービスを提供していくことであり、そのためにはインターネットを使わない世代に対しても十分なサービスを提供していくことが必要だと考えています。

また、詳しい説明が必要とされる商品及び高リスクの商品は、営業担当があらゆる質問に答え、納得して買っていただく必要があるため、インターネットでの販売は困難であり、リアル（対面）での販売が適しています。そのような面からも、顧客中心主義を徹底するためには、ネットとリアル双方のチャンネルが必要であり、今後もあらゆるお客様の幅広いニーズにお応えできる投資環境の構築に努めてまいります。

ネットとリアルの経営資源の融合

年代別顧客の相互補完（2006年3月末）



ファイナンシャル・サービス事業

良好な事業環境におかれたファイナンシャル・サービス事業

ファイナンシャル・サービス事業の主要企業

当社(ファイナンシャル・サービス事業本部) モーニングスター(株)

投資信託を主体とした金融商品の評価情報の提供
大証ヘラクレス上場(銘柄コード 4765)

ゴメス・コンサルティング(株)

Eコマースサイトの評価・ビジネス支援
大証ヘラクレス上場(銘柄コード 3813)

SBIベリトランス(株)

EC事業における電子決済サービスの提供
大証ヘラクレス上場(銘柄コード 3749)

SBIモーゲージ(株)

住宅ローン事業

SBIイコール・クレジット(株)

個人向け無担保消費者ローン事業、事業者向けローン事業

SBIリース(株)

IT分野を中心とした総合リース業

SBIテクノロジー(株)

アカウントアグリゲーションソフト「MoneyLook」など金融分野向けソフトの開発・提供

「貯蓄から投資へ」の流れをとらえ好調なモーニングスター

主にインターネットサイトを通じて金融商品等の広告業務を手がけてきたモーニングスター(株)は認知度向上により、ページビュー(PV)とユーザー数を大幅に増加させており、PVは2006年1月から6月までの中間期では46,933千ページビュー(前年同期比119.6%増)、ユーザー数は4,516千件(同57.9%増)となりました。

また、同社の子会社で、Eコマースサイトの評価・ランキング及びビジネス支援サービスを提供するゴメス・コンサルティング(株)は、2006年8月16日に大証ヘラクレス市場に株式上場を果たしました。

「ブロードバンド化の進展」で成長が加速するSBIベリトランスとマーケットプレイス事業

EC(電子商取引)サイトの決済ソリューションを提供するSBIベリトランス(株)は、成長市場であるEC市場やクレジットカード市場の拡大とともに、2006年3月期のトランザクション件数を2,125万件(前年同期比46.8%増)、利用店舗数を2,219店舗(2006年6月末現在)と、順調に増加させております。

また、アフィリエイト(成果報酬型)広告会社等と提携し、新たにECサイトへの集客支援サービスを開始するなど、中長期的な収益拡大へ向けても注力しています。

保険やローン商品の比較・見積もりサイトを運営する当社マーケットプレイス事業においては、提携企業数を拡大させるとともに、主力の金融系サイトである「保険の窓口インズウェブ」や「イー・ローン」を中心に各サービスの利用者は順調に増加し、年間約80万人が見積もりなどの取引を行っています。

国内最大級に成長した金融系サイトの運営ノウハウを活かして、金融・非金融分野の双方で順次新規サイトを開設するなどサービスラインアップを拡充し、事業基盤の強化を図っております。また、大手ポータルサイトへのコンテンツ提供や付加価値の高い情報提供に努め、さらなる認知度向上と利用者数の拡大を実現しています。

モーニングスターブランドの向上に併せ著増するウェブサイトのページビューとユーザー数



SBIベリトランス トランザクション件数の推移



成長するマーケットプレイス事業

取引ユーザー数が順調に拡大、参加会社数は約1,300社に
～金融分野だけでなく、非金融分野の件数も好調に推移～



注1:取引ユーザー数はサイト上で一括見積もり、資料請求、仮申込等の取引を行ったユニークなユーザーの数。
注2:件数、PVは金融6サイト、非金融11サイトの件数及びPV。イー・ゴルフ・サイトの件数とPV(月間1,400万PV)は含んでおりません。

住宅ローン分野の「制度改革」で急成長するSBIモーゲージ

長期固定金利住宅ローンで業界最低水準の金利を提供し続けるSBIモーゲージ(株)は、住宅金融公庫提携商品「スーパーフラット35」(35年固定金利住宅ローン、2006年10月融資実行金利2.781%)を主体に融資残高を大幅に伸ばし、2005年8月の残高1,000億円達成から7カ月後に2,000億円を突破し、2006年9月末現在では2,465億円となるなど、2007年4月に住宅金融公庫が独立行政法人の住宅金融支援機構に移行していく流れの中で、順調に融資残高を積み上げております。

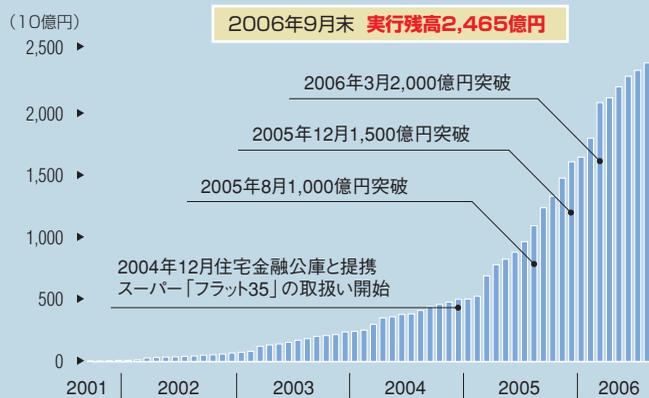
また、販売体制の強化策として、全国の独立系有力生命保険代理店12社と提携した住宅ローン制度を構築するなど、住宅ローンの申込取扱拠点の拡大に注力し、新たな収益獲得を図っております。

同業他社が減益となる中、短期間で短月黒字化を達成したSBIイコール・クレジット

消費者・事業者向けローン事業を手がけるSBIイコール・クレジット(株)は、貸付残高が営業開始後20カ月で約100億円となり、同業他社が減益となる中、同社は単月で黒字化を達成しました。

また、出資法の上限金利の引き下げが議論されている中で、同社においては自動審査システムをASPで提供するビジネスモデルを構築し、ASPサービスによるフィー収入など収益構造の多様化を目指してまいります。

成長著しいSBIモーゲージの住宅ローン事業 住宅ローン実行残高推移



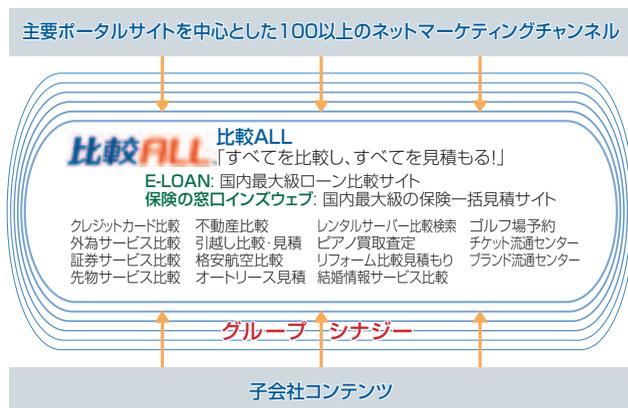
SBIイコール・クレジットの貸出実績推移



生活関連ネットワーク事業

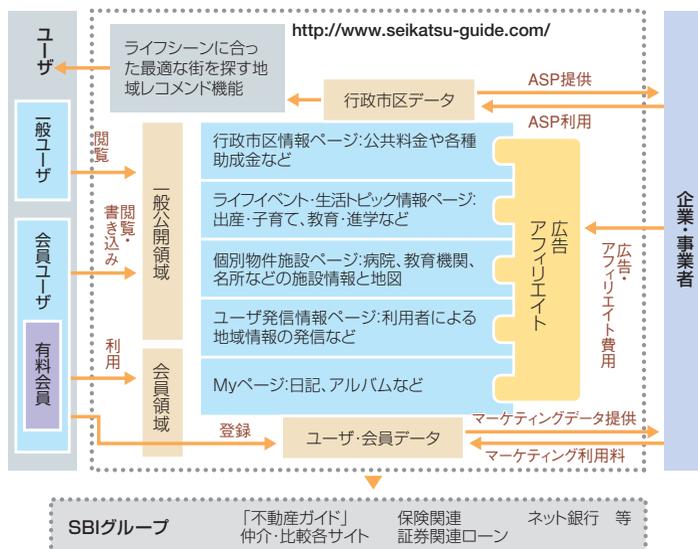
SBIグループの新たなコアビジネスとして、行政サービス比較検索サイト「生活ガイド.com (http://www.seikatsuguide.com/)」及び、総合比較ポータルサイト「比較ALL (http://www.hikakuall.jp)」の運営等を柱に、「生活関連ネットワーク事業」の取り組みを本格化させております。

比較・見積りポータルサイト「比較ALL」



コミュニティ型地域・生活情報サイト「生活ガイド.com」

地域・行政サービス情報をベースに地域の生活・施設情報とライフイベント情報を提供し、生活者自身が情報を付加、共有、参加できるコミュニティ型地域・生活情報サイト



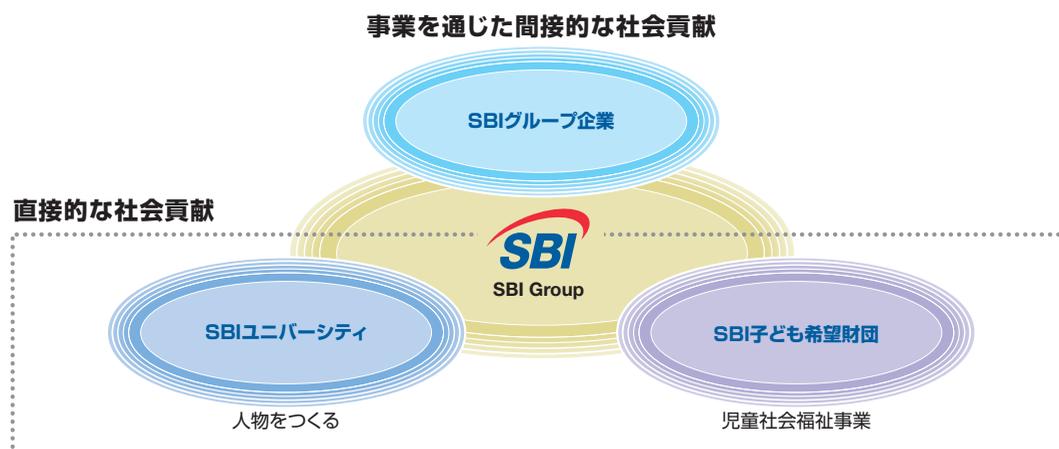
SBIモーゲージのネットワーク

SBIモーゲージには、住宅ローンのお申込み・ご契約ができる拠点が46カ所あります。今後もさらに全国の拠点拡大を進め、お客様へのきめ細かなサービスを提供してまいります。



SBIグループ

SBIグループの社会貢献の3つの柱



人材育成への取り組み

SBIグループは、日本の未来を担う「有為な人材」を一人でも多く輩出していきたいと考えています。私たちが育成を目指す「有為な人材」とは、一部門・一企業の利益に貢献するだけでなく、広く経済・社会に貢献しようとする高い志を有し、ビジネスにおける高い専門性を備え、国際的視野を持ち、確たる倫理的価値観と実行力を伴う胆識を備えた人物のことを言います。

新卒採用の開始

採用についてはこれまで、社会人経験のある転職者が中心でしたが、SBIグループでは、今春、初めて42名の新卒者を採用しました。これは、急速に業容が拡大するSBIグループの未来を担う優秀な幹部候補の確保と、独自の企業文化を育み継承する人的資源の育成を目的としたものです。

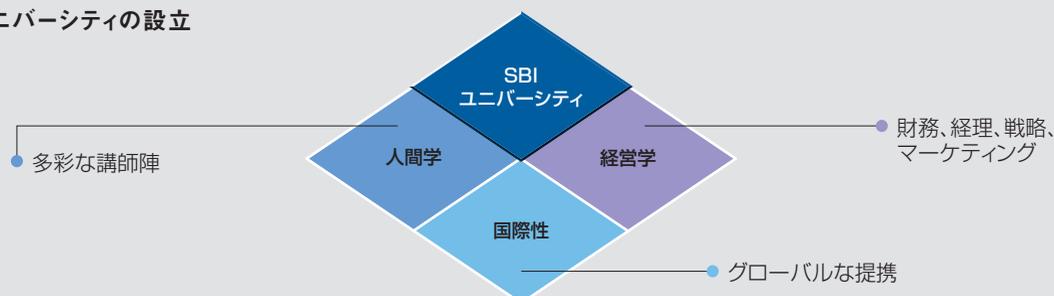
オープン・ユニバーシティの設立

インターネットを駆使した新しいスタイルの「理想の学び舎」として、SBIユニバーシティ株式会社を2006年5月に設立しました。

SBIユニバーシティでは、知識を詰め込む「知育」ではなく、人間力を磨くことを主眼とした「徳育」を重視しています。さらに、教育プログラムに最先端の経営学の知見を取り入れ、実践的な学問＝「実学」を学ぶ機会を提供しています。

また、高い意欲と志を有する受講生を社外からも広く集めます。一方的に知識を吸収することによってではなく、さまざまな背景と個性を有する人々——教える者と学ぶ者、あるいは学ぶ者同士——との相互対話と切磋琢磨によって、「有為な人材」の育成を図ります。

SBIユニバーシティの設立



CSRへの取り組み

企業は社会の一構成要素であり、社会があって初めて事業を営むことができます。したがって、企業は社会の維持発展のために貢献していかなければ、ゴーイングコンサーン(永続企業)として存在していくことはできません。だからこそSBIグループは、「企業の社会性」を強く認識し、「強くて尊敬される企業」の実現のため、CSR(企業の社会的責任)活動に積極的に取り組んでいます。

SBIグループの全事業に脈々と流れる基本的な価値観「信」「義」「仁」

SBIグループには、社会正義に照らして正しいことを真正面から事業化し、実践している会社が多くあります。これらの事業の根底にあるものは、儲かるかどうかではなく、「私たちの社会を公正で、快適で、環境適合的で、安全なものに

したい」という信念です。

CSR活動においても、この信念に基づいた独自の“3つの視点”に沿って進めています。

SBIグループの直接的な社会貢献

直接的な社会貢献活動としては、利益の中から適切な範囲内で児童社会福祉施設等への寄附を行うことを基本的な考えとしています。

2005年10月6日には「財団法人 SBI子ども希望財団」を設立し、社会的に最も弱い立場にある被虐待児の支援及び虐待防止にむけた活動を行っています。

2002年1月

ソフトバンク・ファイナンス取締役会にて基本方針を決定
税引後利益3億円以上を計上したグループ各社は利益の1%程度を児童社会福祉法人へ寄附を行う

2004年7月

寄附活動開始

全国の173児童社会福祉法人に約167百万円の寄附を行う

2004年12月

SBI児童福祉有限責任中間法人を設立

SBIグループ各社からの寄附金だけでなく、ストックオプションなどの寄贈を受け入れ、証券市場を活用して幅広く寄附活動を展開する日本初の試み

2005年10月

厚生労働省の設立認可を受け、「財団法人 SBI子ども希望財団」を設立

「信」信用・信頼の獲得

- ・内部監査体制の強化
- ・コーポレート・コミュニケーションの強化
- ・個人情報保護
- ・開かれた雇用機会と公正な処遇

「義」“正しい”事業の創造と遂行

- ・顧客中心主義の徹底
- ・新産業の創造と育成
- ・革新的金融サービスの提供
- ・社会貢献につながる事業の推進

「仁」直接的な社会貢献

- ・財団法人を通じた児童福祉の向上
- ・医学分野への研究助成

財団法人 SBI子ども希望財団を通じて活動を強化

寄附実績	社会貢献予算額 (百万円)	金額 (百万円)	寄附実施施設数 (施設)
2004年度 (SBIグループとしての活動)	¥167	¥167	173
2005年度 (財団としての活動)	¥200	¥155	105
2006年度 (財団としての活動)	¥380	(検討中)	(検討中)

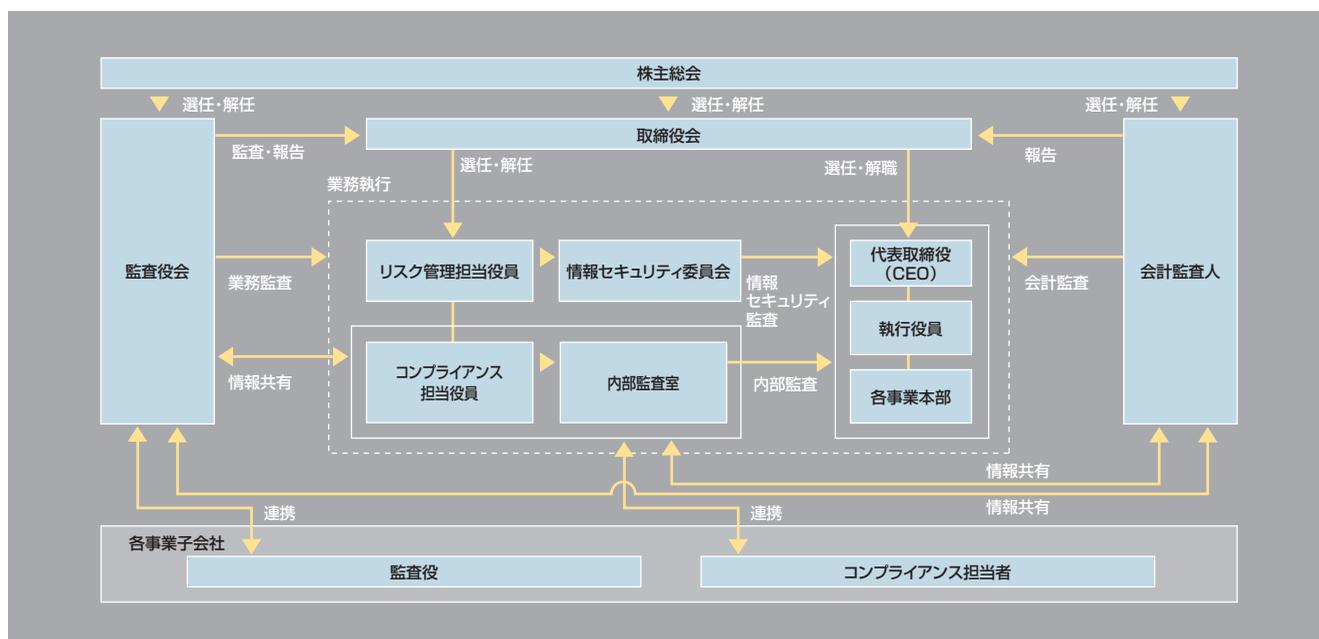
コーポレート・ガバナンス

当社は、経営の透明性、コーポレート・ガバナンスの充実のため、経営環境の変化に迅速に対応できる組織体制と株主重視の公正な経営システムを構築・維持改善していくことを、極めて重要な経営課題の一つと認識しております。

コーポレート・ガバナンスのための基本的枠組み

当社の取締役会は取締役13名（2006年6月29日現在）で構成されており、取締役並びに取締役会の機能及び責任を明確にするため、執行役員制度を導入しております。業務執行に関しては代表取締役執行役員CEO、取締役執行役員COO及び取締役執行役員CFOの3名のほか、各事業本部を統括する取締役執行役員2名の計5名があたっており、機能分化により急激な経営環境の変化に対応し得る柔軟な業務執行体制を構築しております。

当社の取締役会は原則として月1回開催し、重要事項の決定、業務執行状況の監督を行っております。監査役は4名で、会計監査人・監査役・内部監査室による各種監査を有機的に融合させてコーポレート・ガバナンスの実効性の確保を図っております。



コーポレート・ガバナンス強化のための取り組み

内部統制システムの整備

当社は経営の透明性、コーポレート・ガバナンスの充実のためには内部統制システムを整備し、健全な内部統制システムにより業務執行を行うことが重要であると認識し、その整備に努め、実施しております。

まず、法令遵守及び倫理的行動を当社の経営理念・ビジョンの実現の前提であるとし、その徹底を図るべく内部監査体制を構築してきました。具体的には、取締役間の意思疎通を図るとともに、代表取締役の業務執行を監督するべく取締役会規程に基づき原則として毎月1回の定時取締役会及び必

要に応じて臨時取締役会を開催するほか、コンプライアンス担当役員を定め、その直轄部門として内部監査室を設置しております。

また、当社グループにおいては、当社グループのコンプライアンス上の課題・問題の把握及び業務の適正性の確保のため、コンプライアンス担当役員が、当社グループのコンプライアンス担当者と共同で、グループ全体のコンプライアンスについて情報の交換を行うための会議を設置するものとしております。



各役員がグループ各社の代表を兼務しているSBIグループは、グループシナジーのさらなる深化を追求し、毎月の定例役員会議では各社間の情報交換等を行っています。

リスク管理体制の整備

当社の業務執行及び経営理念・ビジョンの達成を阻害するリスクに対しては、取締役会が定めるリスク管理規程に従い、リスク管理に関する責任者としてリスク管理担当役員を定めるなど、リスクの把握と適切な評価・管理を図っております。

例えば、当社の存続に重大な影響を与える経営危機が発生した場合、あるいはその可能性がある場合、リスク管理担当役員を総責任者として情報の収集や対応策及び再発防止策の検討・実施を行うとともに、関係機関への報告、情報開示を行うこととしております。

また、情報管理につきましては、リスク管理担当役員を委員長とし、各部門より任命された委員から構成される情報セキュリティ委員会を設置し、顧客情報をはじめとする情報管理体制全般の整備と管理機能の強化を図っております。さらにシステム等のリスクにつきましても、システムの二重化や複数拠点によるバックアップ体制を取ることでさまざまな事象にも対応できる体制を構築しております。

監査役監査、内部監査及び会計監査

当社の監査役会では、会計監査人による年間監査計画の説明をはじめとして、中間・本決算時においては、監査報告書に基づく説明を受けております。さらに、経営上の課題及び問題点につきましては、必要に応じて会計監査人及び内部監査室との情報共有、協議を図っております。

また、内部監査室は、必要に応じて外部専門家の協力を得て、取締役等による職務執行を監査し、法令・定款違反行為を未然に防止するとともに、経営上の課題及び問題点について、必要に応じて監査役会及び会計監査人との情報共有を図っております。

コーポレート・ガバナンスの充実に向けた最近1年間の取り組み

業容の拡大に対応するため、取締役を9名から13名に増員し、コーポレート・ガバナンス及びマネジメント機能のより一層の強化を図っております。

また、経営監督機能の強化を図るため、年度監査計画に基づいた網羅的な監査役監査を実施し、内部監査室においては外部専門家も交え、グループ会社を含めた総合的な内部監査を実施いたしました。これらにより一層の業務効率の改善と不正過誤の防止が図られました。

投資家向け情報開示につきましては、定時株主総会後の経営近況報告会の実施に加え、本決算、中間決算発表後に全国主要都市にて個人株主を対象とした会社説明会及びバイサイドアナリストを対象としたスモールミーティングを開催しているほか、当社のホームページでは決算短信、プレスリリース、四半期毎の決算説明会や株主向けの会社説明会等の動画・資料を掲載するとともに、ストリーミング動画により当社グループの決算概況や最新のトピックスをCEOが直接説明する「SBIチャンネル」を毎月2～3回程度を目処にホームページ上で配信する等、投資家への正確な企業情報の伝達に努めております。

さらに、2006年8月には財団法人日本情報処理開発協会より「プライバシーマーク」付与の認定を受け、当社の個人情報保護体制が客観的に高い水準であることが認められております。

財務報告

事業部門別の経営成績の分析

アセットマネジメント事業

アセットマネジメント事業では、産業クリエーターとしてIT（情報技術）分野を軸とした21世紀の中核的産業の創造及び育成を担うリーディング・カンパニーになるといった経営理念のもと、主に当企業グループが運営する投資事業組合を通じて投資先企業へのリスクキャピタルの供給、税務・財務管理の支援サービスや株式公開等に関するコンサルティングサービスの提供及び役職員の派遣を含む総合的な支援を継続しております。また、投資先企業間の業務・資本提携等のアライアンスを推進し、当企業グループのネットワーク及び株式公開支援ノウハウを活用し、投資先企業のさらなる企業価値増大の促進により、ファンドの投資成果向上を図っております。

2000年3月から7月に当初出資金1,505億円で設立した当社の旗艦ファンドであるソフトバンク・インターネットテクノロジー・ファンドは本格的収穫期が到来し、その投資成果を極大化するために運用期限を2年間延長しており、2007年6月に償還を迎える予定であります。2006年3月末時点での同ファンドが保有する時価を有する株式の含み益は1,611億円となり、投資残高、累計配当金を含む現預金等及び含み益の合計額は2,775億円となりました。また、SBIブロードバンドファンド、SBIビービー・メディアファンド及び当連結会計年度に設立したSBIビービー・モバイルファンド等より、引き続き今後の成長分野であるブロードバンド、モバイル関連企業等への投資を行う計画であります。当連結会計年度の当企業グループの運営する投資事業組合による投資実績額は470億円、新規公開またはM&Aにより公開株式となった投資先企業は9社となりました。

ブローカレッジ&インベストメントバンキング事業

ブローカレッジ&インベストメントバンキング事業は、主にSBIイー・トレード証券株式会社、SBI証券株式会社より構成されております。当連結会計年度においては、当社、SBIイー・トレード証券株式会社、SBI証券株式会社で証券戦略会議を設置し、今後のグループ証券戦略に関しまさまざまな検討を実施してまいりました。その結果、SBIイー・トレード証券株式会社を中心として展開してまいりました「ネット」を通じた証券業務と、SBI証券株式会社を中心とした「リアル」（対面営業型）証券業務の融合を加速させ、他社の追従を許さない差別化と圧倒的な競争力を獲得することが不可欠であるとの結論に至り、より迅速な意思決定と思い切った経営革新の実行

を可能とする経営体制の構築を目指し、SBI証券株式会社の完全子会社化を行い、当企業グループの中核事業であるアセットマネジメント、ブローカレッジ&インベストメントバンキングの各事業基盤を飛躍的に拡充し、さらにはプライベートバンキング業務における積極的な事業展開を推進しております。

証券市場の活況に伴い、各証券子会社の業績は好調に推移いたしました。SBIイー・トレード証券株式会社においては、過去最高の業績を達成いたしました。当企業グループの証券ビジネスは当連結会計年度末において預り資産5兆2,809億円、証券口座数1,327,984口座及び当連結会計年度の1日当たり平均売買代金は3,443億円となっております。

ファイナンシャル・サービス事業

ファイナンシャル・サービス事業において、マーケットプレイス事業では積極的なプロモーションが奏効し、金融系比較見積もりサイト「保険の窓口インズウェブ」「イー・ローン」等においてはトランザクション・ユーザー数（サイト上で実際に見積もり、資料請求、仮申込等の取引を行った数）が前年度比43.2%増の62万件となる等安定的に収益を拡大させているほか、国内最大級に成長したこれら金融系サイト運営ノウハウを活かして金融・非金融系サイトを新規に10サイト開設する等サービスラインアップを拡充し事業基盤の強化を図っております。

ファイナンシャル・プロダクト事業では、SBIリース株式会社が新規リース実行金額を堅調に伸ばしている一方で、SBIモーゲージ株式会社が住宅金融公庫提携商品「スーパーフラット35」を主体に融資残高を2,062億円（前年度末比202.7%増加）と大幅に積み上げ収益に大きく貢献すると共にリアル店舗の開設により新たな収益獲得を図っております。

ファイナンシャル・ソリューション事業ではSBIベリトランス株式会社がトランザクション件数を前年度比46.8%増の2,125万件、利用店舗数を1,881店舗（当連結会計年度末）と順調に増加させております。

その他事業では、モーニングスター株式会社やその子会社ゴメス・コンサルティング株式会社が提供する、ウェブサイトに関する評価や販売金融機関向け・企業向けのコンサルティングが順調に推移しております。

セグメント別売上高	2005年3月31日 終了事業年度		2006年3月31日 終了事業年度	
	百万円	%	百万円	%
	アセットマネジメント事業	24,463	30.0	40,807
株式等投資関連事業	15,900		24,793	
営業投資有価証券売上高	11,243		18,668	
投資事業組合等管理収入	4,657		6,125	
住宅不動産事業	7,992		14,223	
営業投資有価証券売上高	6,600		140	
投資事業組合等管理収入	—		10	
その他不動産関連事業収入	1,392		14,073	
投資顧問業務等	571		1,791	
ブローカレッジ&インベストメントバンキング事業	46,224	56.7	80,816	58.9
証券関連事業	44,923		79,513	
商品先物関連事業	1,301		1,303	
ファイナンシャル・サービス事業	12,408	15.2	19,844	14.5
セグメント間の内部売上高	(1,583)	-1.9	(4,220)	-3.1
合計	81,512	100.0	137,247	100.0

売上高

1)アセットマネジメント事業

株式等投資関連事業

ベンチャー企業、リストラクチャリングを必要とする企業、バイオ、ブロードバンド、メディア関連企業等への投資に関する事業であり、キャピタルゲインを目的とした保有株式等(営業投資有価証券)を売却した場合に計上される「営業投資有価証券売上高」、ファンドの設立時にファンド募集基金に一定割合を乗じて算定される設立報酬、ファンドの当初出資金ないしは純資産価額等に一定割合を乗じて算定される管理報酬及びファンドの運用成績により収受される成功報酬からなる「投資事業組合等管理収入」により構成されております。なお、当企業グループが運営するファンドへ当社又は連結子会社が出資した場合、ファンドの決算に基づき、ファンドで計上された売上高の出資割合相当額が営業投資有価証券売上高として計上されております。

当連結会計年度におきましては、営業投資有価証券売上高が18,668百万円(前年度比66.0%増加)、投資事業組合

等管理収入が6,125百万円(前年度比31.5%増加)となっております。営業投資有価証券売上高は主に、米国モーニングスター(Morningstar, Inc.)株式の売却やファンド決算取込等によるものであります。また、投資事業組合等管理収入は主に、2000年3月から7月にわたり設立されたソフトバンク・インターネットテクノロジー・ファンド(当初出資金総額150,500百万円)に加え、2004年9月から2005年4月に新たに設立したSBIブロードバンドキャピタル投資事業匿名組合、SBIブロードバンドファンド1号投資事業有限責任組合、及びSBIビービー・メディア投資事業有限責任組合からの収入であります。

財務報告

住宅不動産事業

不動産への投資に関する事業であり、住宅不動産事業におけるキャピタルゲインを目的とした匿名組合出資持分等を売却した場合に計上される「営業投資有価証券売上高」、不動産ファンドの組成時にファンド募集基金に一定割合を乗じて算定される設立報酬、ファンドの当初出資金ないしは純資産価額等に一定割合を乗じて算定される管理報酬及びファンドの運用成績により収受される成功報酬からなる「投資事業組合等管理収入」、不動産の企画・開発や土地・建物の仲介・転売等による「その他不動産関連事業収入」により構成されております。なお、当企業グループが運営するファンドへ当社又は連結子会社が出資した場合、ファンドの決算に基づき、ファンドで計上された売上高の出資割合相当額が営業投資有価証券売上高として計上されております。

当連結会計年度におきましては、営業投資有価証券売上高が140百万円(前年度比97.9%減少)、投資事業組合等管理収入が10百万円(前年度はなし)及びその他不動産関連事業収入が14,073百万円(前年度比911.1%増加)となっております。

投資顧問業務等

当連結会計年度において投資顧問業務等の収入が1,791百万円(前年度比213.2%増加)となっております。主な理由はSBIアセットマネジメント株式会社において投資顧問収入や投資信託の管理報酬等が増加したことによるものです。

2) ブローカレッジ&インベストメントバンキング事業

ブローカレッジ&インベストメントバンキング事業の売上高は主に証券関連事業及び商品先物関連事業から構成されております。

証券関連事業

証券関連事業収入は、証券売買取引に伴う委託手数料、新規公開株式の引受・売出手数料、株式の募集・売出しの取扱手数料等の収入より構成されております。

当連結会計年度におきましては、証券関連事業収入が79,513百万円(前年度比77.0%増加)となっております。当該収入は主にSBIイー・トレード証券株式会社、SBI証券株式会社及びE*TRADE KOREA CO., LTD.で計上されたものであります。

商品先物関連事業

商品先物関連事業収入は、商品先物取引の受取手数料等の収入より構成されております。

当連結会計年度において商品先物関連事業収入が1,303百万円(前年度比0.1%増加)計上されております。当該収入はSBIフューチャーズ株式会社で計上されたものであります。

3) ファイナンシャル・サービス事業

ファイナンシャル・サービス事業の売上高は主に、国内最大級の保険やローン商品の比較・一括見積もりサービスを提供するマーケットプレイス事業、リース事業の展開や証券化を前提とした長期固定金利型住宅ローン商品を提供するファイナンシャル・プロダクト事業、EC(電子商取引)事業者向けオンライン決済ソリューションの提供や金融分野向けシステム開発等を手がけるファイナンシャル・ソリューション事業及び、投資信託を主体に金融商品やインターネットサイトの比較・評価情報等を提供するその他の事業から構成されております。

当連結会計年度におきましては、ファイナンシャル・サービス事業収入が19,844百万円(前年度比59.9%増加)となっております。当該収入は主にSBIリース株式会社及びSBIモーゲージ株式会社等で計上されたものであります。

注:各セグメントの売上高及び前年度との比較数値は連結消去前の数字です。

売上原価

1) アセットマネジメント事業

アセットマネジメント事業の売上原価は当連結会計年度におきましては26,886百万円(前年度比110.8%増加)となっており、営業投資有価証券売上原価12,624百万円、投資損失引当金繰入額450百万円、販売目的不動産売上原価9,099百万円及び人件費を含むその他の原価4,713百万円より構成されております。

2) ブローカレッジ&インベストメントバンキング事業

ブローカレッジ&インベストメントバンキング事業の売上原価は、当連結会計期間におきましては4,142百万円(前年度比77.9%増加)となっており、信用取引の貸借利息等に係る金融費用等により構成されております。

3) ファイナンシャル・サービス事業

ファイナンシャル・サービス事業の売上原価は当連結会計年度におきましては9,385百万円(前年度比40.7%増加)

となっており、主にリース原価により構成されております。

注:各セグメントの売上原価及び前年度との比較数値は連結消去前の数字です。

販売費及び一般管理費

当連結会計年度におきまして販売費及び一般管理費は50,056百万円(前年度比41.7%増加)となっております。主なものは人件費、証券システムの業務委託費等であります。

その他損益

その他損益は純額で当連結会計年度27,317百万円(前年度比80.2%増加)の利益となっております。持分変動によるみなし売却益25,367百万円、投資有価証券売却益(純額)4,027百万円、特別法上の準備金繰入額2,420百万円等が主な内容であります。

キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度において、当企業グループは無担保社債を発行し、99,555百万円の資金調達を行いました。また、当社は第三者割当等による新株発行を実施し24,377百万円の資金調達を行いました。この結果、当連結会計年度末の自己資本は268,123百万円となり、前連結会計年度末の129,419百万円より138,704百万円の増加となりました。また、当連結会計年度末の自己資本比率は20.1%となり、前連結会計年度末の17.1%より3.0ポイントの増加となりました。

当連結会計年度末の現金及び現金同等物残高は132,545百万円となり、前連結会計年度末の106,460百万円より26,085百万円の増加となりました。

各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は次のとおりであります。

営業活動によるキャッシュ・フロー

税金等調整前当期純利益が76,912百万円あったものの、法人税等の支払額が12,654百万円あったことに加え、証券子会社の取引拡大による信用取引資産及び信用取引負債の増加額が172,818百万円ありました。これは公募増資等で調達した資金を自己融資として運用したことにより、キャッシュ・フローの表示上、投資活動によるキャッシュ・フローではなく営業活動によるキャッシュ・フローのマイナスとして表示されるという証券会社特有の取扱いによるものです。また、

当企業グループが運用するソフトバンク・インターネットテクノロジー・ファンドの出資口の一部取得等により、営業投資有価証券の増加額が49,110百万円となり、営業活動によるキャッシュ・フローは132,740百万円の支出(前連結会計年度25,531百万円の支出)となりました。

投資活動によるキャッシュ・フロー

投資有価証券の取得による支出が47,110百万円ありました。これには、住宅不動産事業の拡大に向けたゼファー株式会社株式を取得するための支出額15,385百万円が含まれております。また、投資有価証券の売却による収入が11,567百万円あったこと等の要因により33,137百万円の支出(前連結会計年度3,352百万円の収入)となりました。

財務活動によるキャッシュ・フロー

無担保社債の発行による社債発行による収入が99,555百万円ありました。また、少数株主に対する株式発行による収入が63,028百万円ありました。これには、SBIイー・トレード証券株式会社における公募及び第三者割当等による新株発行による収入額50,837百万円が含まれております。さらに長期借入による収入が52,100百万円、新株発行による収入が24,377百万円あったこと等の要因により200,746百万円の収入(前連結会計年度94,305百万円の収入)となりました。

なお、連結除外に伴う現金及び現金同等物の減少額11,480百万円には、エース証券株式会社を連結除外したことによる減少額11,112百万円が含まれております。

リスク要因

SBIグループの事業その他に関するリスク要因について、投資判断に重要な影響を及ぼす可能性があると考えられる主な事項を記載しております。なお、以下に記載しておりますリスク要因については、現時点において当社が判断したものであり、これらに限られるものではありません。SBIグループは、これらの潜在的なリスクを認識した上で、その回避ならびに顕在化した場合の適切な対応に努めてまいります。

(1) 事業環境の変化による影響について

当社グループは、投資事業、住宅不動産事業、証券業、住宅ローンやリース事業など、多岐にわたる事業を展開しておりますが、これらは株式市場や金利市場（マネーマーケット）、不動産市場などの関連市場及び政治・経済・産業等の動向に大きく影響を受けます。これらコントロールの及ばない外部要因によって業績が変動し、当社グループ全体の業績に大きな影響を与える可能性があります。

また、政府や官公庁、各証券取引所等は、当社グループが関わる証券市場及びその他の市場に係る制度改革や法律の改正を進めています。当社は、これらの動向を十分把握した上で適切に対応しておりますが、将来におけるこれら制度改革や法律の改正等の内容に大きな変更が加えられた場合、当社の業績に影響を及ぼす可能性があります。

(2) 競争について

当社グループが運営する事業は、革新的かつ高成長が期待できる分野に属しており、極めて将来性が高いと考えられることから、新規参入を含めた競争が激しく、市場の拡大以上にこれが過熱した場合、当社グループの競争力が将来にわたって維持できる保証はありません。引き続き現在の優位性を維持・拡大するため、一層の事業努力を継続してまいります。有力な競合他社の登場により、当社グループの優位性が損なわれ、業績に影響を与える可能性があります。

(3) システムリスクについて

インターネットを最大限に活用した事業を展開している当社グループは、コンピュータシステムに依存する部分が多いため、コンピュータシステムについてバックアップシステムの構築等の対策を講じておりますが、ハードウェア・ソフトウェアの不具合、人為的ミス、通信回線の障害・通信事業者に起因するサービスの中断や停止、コンピュータウィルス、サイバーテロのほか、自然災害等によるシステム障害等、現段階では

予測不可能な事由によりコンピュータシステムがダウンした場合、当社グループの事業に重大な影響を与える可能性があります。

特に、インターネットを主たる販売チャネルとしているブローカーレッジ&インベストメントバンキング事業においては、オンライン取引システムの安定性を経営の最重要課題と認識しており、監視機能や基幹システムの二重化、複数拠点におけるバックアップサイト構築等の対応を実施し、そのサービスレベルの維持向上に日々取り組んでおりますが、これらの対策にもかかわらず何らかの理由によりシステム障害が発生し、かかる障害への対応が遅れた場合、または適切な対応ができなかった場合には、障害によって生じた損害について賠償を求められたり、当社グループのシステム及びサポート体制に対する信頼が低下し、結果として相当数の顧客を失うなどの影響を受ける可能性があります。

(4) 投資リスクについて

アセット・マネジメント事業において当社グループが運営する投資事業組合等からの投資先企業群には、ベンチャー企業や事業再構築中の企業が多く含まれます。これらの企業は、その将来性において不確定要因を多く含み、今後発生し得るさまざまな要因により投資先の業績が変動する可能性があります。かかる要因には急激な技術革新の進行や業界標準の変動等による競争環境の変化、優秀な経営者や社員の維持・確保、財務基盤の脆弱性の他に、投資先企業からの未開示の重要情報等に関するものが含まれますが、これらに限定されるわけではありません。

また、住宅不動産事業については不動産の取得に際して事前に十分な調査を実施するものの、これら調査の及ばない範囲で不動産業界に特有の権利関係、地盤地質、構造、環境等に関する欠陥・瑕疵が取得後に発覚した場合、当該不動産の価値や収益性に大きな影響を与える可能性があります。さらに、火災、暴動、テロ、地震、噴火、津波等の不測の事故・自然災害が発生した場合、当該不動産の価値や収益性が毀損される可能性があります。

(5) 個人情報の保護について

当社グループは、インターネットを最大限に活用して金融、不動産、生活関連サービスなど広範囲にわたる事業を展開しており、多くのお客様の情報を取得・利用しています。また、銀行業・生損保業への進出を推進するなど、安心・安定・安全

を要求される金融業を行う事業会社として、顧客情報の流出や不正アクセス行為による被害の防止は極めて重要であると考え、お客様に当社のサービスを安心してご利用いただくために情報セキュリティの重要性を経営の最重要課題と認識しております。

2005年4月の個人情報保護法全面施行にあたって、当社においては「個人情報保護方針」を公表し、それを遵守すべく厳格なコンプライアンス・プログラム（個人情報管理規程）を策定し、それに基づいたセキュリティ対策を講じると同時に、「情報セキュリティ委員会」の設置など内部管理体制の整備や社員教育を実施し、顧客情報保護に細心の注意を払っております。また、以上に加えてセキュリティカードによる入室のログ管理や電子ファイルの管理等を徹底した結果、財団法人日本情報処理開発協会より、個人情報について適切な保護措置を講ずる体制を整備している事業者として、2006年8月に「プライバシーマーク」付与の認定を受けるなど、個人情報の保護に関するセキュリティー・レベルの維持・向上に努めております。

(6) 事業再編等

SBIグループは「Strategic Business Innovator＝戦略的事業の革新者」として、常に自己進化（「セルフエボリューション」）を続けていくことを基本方針の一つとしております。

当連結会計年度におきましては、2005年9月にエース証券株式会社の全保有株式を譲渡し、また同月に株式会社ゼファーとの業務・資本提携を実施いたしました。また、2006年3月にSBIパートナーズ株式会社、ファイナンス・オール株式会社を、当社を存続会社として吸収合併すると共に、SBI証券株式会社を完全子会社といたしました。

今後も当社グループが展開するコアビジネスとのシナジー効果が期待できる事業へのM&A（企業の合併・買収）を含む積極的な業容拡大を進めてまいりますが、事前の十分な投資分析・精査等の実施にもかかわらず、これらの事業再編・業容拡大等をもたらす影響について、必ずしも当社グループが予め想定しなかった結果が生じる可能性も否定できず、結果として当社グループの業績に影響を与える可能性があります。

また、当社グループがファンド事業を運営する上で、ファンド組成完了までの間、優良案件の先行取得のために特別目的会社を設立して一時的に自己資金にて投資を行う場合が

あります。当該特別目的会社については、出資比率や支配力等の影響度合いを鑑み、個別に子会社及び関連会社の範囲について決定しておりますが、今後会計慣行に基づく一定のルールが形成され、当社グループの会計処理方法に変更が生じた場合には、当社グループの連結の範囲に変更が生じ、財政状態及び経営成績に影響を与える可能性があります。

(7) 新規事業への参入

当社グループは「新産業クリエーターを目指す」との経営理念のもと、21世紀の中核的産業の創造および育成を積極的に展開しております。当連結会計年度におきましても、インターネット銀行の共同設立を行うための資本・業務提携を住友信託銀行株式会社と行い、また、新たにクレジットカード事業を展開する100%子会社であるSBIカード株式会社を設立する等、さまざまな新規事業への進出を実施しておりますが、かかる新規事業が当初予定していた事業計画を達成できず、初期投資に見合うだけの十分な収益を将来において計上できない場合、当社グループの業績に影響を与える可能性があります。さらに、これら新規事業において新たな法規制に従い、また、監督官庁の指導下に置かれる等の場合があり、これら法規制、指導等に関して何らかの理由によりこれらに抵触し、処分等を受けた場合、事業の遂行に支障をきたす可能性があります。

(8) キーパーソンへの依存

当社グループの経営は、当社代表取締役CEOである北尾吉孝をはじめとする強力なリーダーシップを持ったマネジメントに依存しており、現在の経営陣が継続して当社グループの事業を運営できない場合、当社グループの業績に影響を与える可能性があります。

連結貸借対照表

SBIホールディングス株式会社(旧ソフトバンク・インベストメント株式会社)及び連結子会社
2005年及び2006年3月31日現在

資産の部	百万円		千米ドル(注記1)
	2005	2006	2006
流動資産:			
現金及び現金同等物(注記 15)	¥106,460	¥ 132,545	\$ 1,128,329
定期預金	2,904	399	3,399
預託金(注記 4)	188,150	332,876	2,833,707
売掛金	1,013	1,303	11,096
営業投資有価証券(注記 6)	39,829	61,668	524,965
投資損失引当金	(463)	(338)	(2,876)
営業貸付金	8,059	16,501	140,473
たな卸不動産(注記 5、15)		26,333	224,166
トレーディング商品(注記 7)	2,859	3,093	26,332
信用取引資産			
信用取引貸付金	317,801	562,693	4,790,099
信用取引借証券担保金	15,680	18,547	157,884
有価証券担保貸付金			
現先取引貸付金	13,545		
その他	14	156	1,325
短期差入保証金(注記 4)	7,052	17,549	149,392
繰延税金資産(注記 25)	986	1,959	16,676
前払費用及びその他の流動資産(注記 4、9)	11,960	30,993	263,836
貸倒引当金	(401)	(691)	(5,882)
流動資産合計	715,448	1,205,586	10,262,921
有形固定資産(注記 10、11、15)	4,715	4,144	35,279
賃貸資産(注記 12)	8,231	11,225	95,558
投資その他の資産:			
投資有価証券(注記 6、15)	11,686	28,127	239,438
関係会社株式(注記 13)	807	23,534	200,341
ソフトウェア(減価償却費3,599百万円(2005年)及び 3,600百万円(30,649千米ドル)(2006年)控除後)	4,017	5,169	44,000
長期差入保証金	4,323	4,358	37,096
連結調整勘定	1,581	44,624	379,879
営業権	0	14	115
長期営業債権	2,824	1,701	14,485
繰延税金資産(注記 25)	880	1,310	11,151
その他の資産	3,362	3,760	32,012
貸倒引当金	(2,870)	(1,908)	(16,241)
投資その他の資産合計	26,610	110,689	942,276
資産合計	¥755,004	¥1,331,644	\$11,336,034

連結財務諸表の注記参照

負債・資本の部	百万円		千米ドル(注記1)
	2005	2006	2006
流動負債:			
短期借入金(注記 14、15)	¥ 8,732	¥ 11,398	\$ 97,025
一年内返済予定の長期負債(注記 14)	11,759	900	7,661
未払法人税等	7,506	19,535	166,293
信用取引負債			
信用取引借入金(注記 14、15)	238,766	302,283	2,573,281
信用取引貸証券受入金	45,824	65,030	553,591
有価証券担保借入金 - 現先取引借入金(注記 14)	1,165	56,553	481,427
受入保証金	151,652	303,385	2,582,658
預り証拠金(注記 9)	19,309	32,072	273,026
顧客預り金	15,427	21,495	182,979
前受金(注記 16)	2,667	3,671	31,248
未払費用	2,654	3,594	30,599
偶発損失引当金	5,219	5	46
繰延税金負債(注記 25)	3,367	2,096	17,841
その他流動負債(注記 7、14、29)	16,567	25,550	217,499
流動負債合計	530,614	847,567	7,215,174
固定負債:			
長期負債(注記 14)	36,000	152,410	1,297,438
繰延税金負債(注記 25)	2,051	2,053	17,479
その他固定負債(注記 17、18)	302	1,469	12,503
固定負債合計	38,353	155,932	1,327,420
特別法上の準備金(注記 19):			
証券取引責任準備金	2,523	4,715	40,141
商品取引責任準備金	152	213	1,813
特別法上の準備金合計	2,675	4,928	41,954
少数株主持分	53,943	55,094	469,006
資本(注記 20、21、33):			
普通株式			
授權株式数 : 2005年 27,190,000株			
2006年 34,169,000株			
発行済株式総数 : 2005年 8,542,344株			
2006年 12,290,692株	34,765	54,229	461,642
資本剰余金	53,467	115,692	984,863
利益剰余金	33,377	90,345	769,089
その他有価証券評価差額金	7,633	12,830	109,216
為替換算調整勘定	416	935	7,962
自己株式 2005年 11,083株			
2006年 135,664株	(239)	(5,908)	(50,292)
資本合計	129,419	268,123	2,282,480
負債及び資本合計	¥755,004	¥1,331,644	\$11,336,034

連結損益計算書

SBIホールディングス株式会社(旧ソフトバンク・インベストメント株式会社)及び連結子会社
2005年及び2006年3月31日に終了した連結会計年度

	百万円		千米ドル(注記1)
	2005	2006	2006
売上高 (注記 22、31)	¥81,512	¥137,247	\$1,168,359
売上原価 (注記 23)	21,323	37,596	320,047
売上総利益	60,189	99,651	848,312
販売費及び一般管理費 (注記 24)	35,319	50,056	426,116
営業利益	24,870	49,595	422,196
その他の収益(費用)			
受取利息及び受取配当金	194	277	2,361
支払利息	(63)	(563)	(4,793)
為替差益(純額)	107	826	7,027
投資有価証券売却益(純額)	3,868	4,027	34,282
持分変動によるみなし売却益(注記 26)	10,569	25,367	215,945
貸方連結調整勘定償却額(純額)	1,973	1,443	12,285
特別法上の準備金繰入額	(1,177)	(2,420)	(20,604)
減損損失		(273)	(2,323)
その他	(315)	(1,367)	(11,636)
その他の収益合計	15,156	27,317	232,544
税金等調整前当期純利益	40,026	76,912	654,740
法人税等 (注記 25):			
法人税、住民税及び事業税	10,360	22,990	195,707
過年度法人税等	(33)	1,280	10,897
法人税等調整額	(904)	(6,189)	(52,684)
法人税等合計	9,423	18,081	153,920
少数株主利益	(4,972)	(12,947)	(110,217)
当期純利益	¥25,631	¥ 45,884	\$ 390,603
1株当たり情報 (注記 2. w、30):			
当期純利益	¥3,579.29	¥4,957.08	\$42.20
潜在株式調整後当期純利益	3,280.47	4,627.04	39.39
配当金	350	600	5.11

連結財務諸表の注記参照

連結株主持分計算書

SBIホールディングス株式会社(旧ソフトバンク・インベストメント株式会社)及び連結子会社
2005年及び2006年3月31日に終了した連結会計年度

	普通株式の発行 済株式総数	百万円					
		資本金	資本剰余金	利益剰余金	その他有価証券 評価差額金	為替換算 調整勘定	自己株式
2004年4月1日	2,317,706	¥ 8,393	¥ 27,092	¥ 9,772	¥ 2,399	¥ 25	¥ (216)
株式分割(注記 20)	4,650,593						
公募増資による新株発行(注記 20)	1,250,000	22,414	22,413				
第三者割当増資による新株発行(注記 20)	187,500	3,362	3,362				
新株予約権等行使(注記 20)	125,678	596	599				
現金配当金(770円/株)				(1,785)			
役員賞与				(224)			
新規連結による利益剰余金減少高				(2)			
合併による利益剰余金増加高				11			
連結除外による利益剰余金減少高				(26)			
当期純利益				25,631			
その他有価証券評価差額金増加高					5,234		
為替換算調整額の増加高						391	
自己株式の取得	(247)						(24)
自己株式の売却	31		1				1
2005年3月31日	8,531,261	34,765	53,467	33,377	7,633	416	(239)
第三者割当増資による新株発行(注記 20)	481,861	9,927	9,927				
新株予約権等行使(注記 20)	289,889	2,392	2,392				
転換社債の転換(注記 20)	366,749	7,145	7,145				
連結子会社との合併に伴う株式の発行による 資本剰余金増加高(注記 20)	2,077,252		8,544				
株式交換による増加高(注記 20)	532,597		34,109				
現金配当金(350円/株)(注記 20)				(2,986)			
役員賞与				(568)			
合併による利益剰余金増加高				15,241			
連結除外による利益剰余金減少高				(41)			
当期純利益				45,884			
その他利益剰余金減少高				(562)			
その他有価証券評価差額金増加高					5,197		
為替換算調整額の増加高						519	
自己株式の取得	(50,121)						(2,909)
自己株式の売却	7		108				
持分法適用関連会社の保有する自己株式	(74,467)						(2,760)
2006年3月31日	12,155,028	¥54,229	¥115,692	¥90,345	¥12,830	¥935	¥(5,908)

	千米ドル(注記1)					
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	その他 有価証券 評価差額金	為替換算 調整勘定	自己株式
2005年3月31日	\$295,949	\$455,151	\$284,134	\$ 64,979	\$3,542	\$ (2,034)
第三者割当増資による新株発行(注記 20)	84,506	84,503				
新株予約権等行使(注記 20)	20,363	20,365				
転換社債の転換(注記 20)	60,824	60,824				
連結子会社との合併に伴う株式の発行による 資本剰余金増加高(注記 20)		72,732				
株式交換による増加高(注記 20)		290,367				
現金配当金(2.98米ドル/株)(注記 20)			(25,419)			
役員賞与			(4,838)			
合併による利益剰余金増加高			129,741			
連結除外による利益剰余金減少高			(345)			
当期純利益			390,603			
その他利益剰余金減少高			(4,787)			
その他有価証券評価差額金増加高				44,237		
為替換算調整額の増加高					4,420	
自己株式の取得						(24,761)
自己株式の売却		921				2
持分法適用関連会社の保有する自己株式						(23,499)
2006年3月31日	\$461,642	\$984,863	\$769,089	\$109,216	\$7,962	\$(50,292)

連結財務諸表の注記参照

連結キャッシュ・フロー計算書

SBIホールディングス株式会社(旧ソフトバンク・インベストメント株式会社)及び連結子会社
2005年及び2006年3月31日に終了した連結会計年度

	百万円		千米ドル(注記1)
	2005	2006	2006
営業活動によるキャッシュ・フロー：			
税金等調整前当期純利益	¥ 40,026	¥ 76,912	\$ 654,740
調整項目			
法人税等の支払額	(9,266)	(12,654)	(107,721)
減価償却費	3,617	5,794	49,319
投資損失引当金の繰入額		171	1,458
貸倒引当金の繰入額	178	499	4,250
減損損失		273	2,323
持分変動によるみなし売却益	(10,569)	(25,367)	(215,945)
営業投資有価証券評価損	268	638	5,435
投資事業組合からの分配損益	(2,944)	1,783	15,177
投資有価証券売却益(純額)	(3,868)	(4,027)	(34,282)
資産及び負債の増減			
営業投資有価証券の増加額	(7,865)	(49,110)	(418,061)
営業貸付金の増加額	(7,315)	(8,859)	(75,415)
たな卸不動産の減少(増加)額	788	(16,446)	(140,001)
顧客分別金の増加額	(81,640)	(142,543)	(1,213,439)
トレーディング商品の増加額	(145)	(336)	(2,864)
賃貸資産の増加額	(3,047)	(6,879)	(58,564)
信用取引資産及び信用取引負債の純増減額	(21,025)	(172,818)	(1,471,170)
顧客預り金等の増加額	11,862	523	4,451
信用受入保証金の増加額	63,580	153,297	1,304,985
有価証券担保貸付金及び有価証券担保借入金の純増減額	(2,562)	60,666	516,442
前受金の増加額	1,305	411	3,498
その他(純額)	3,091	5,332	45,391
営業活動によるキャッシュ・フロー	¥(25,531)	¥(132,740)	\$(1,129,993)
投資活動によるキャッシュ・フロー：			
無形固定資産の取得による支出	(2,040)	(2,461)	(20,953)
投資有価証券の取得による支出	(1,978)	(47,110)	(401,038)
投資有価証券の売却による収入	10,731	11,567	98,472
子会社株式の売却による収入	5,303	981	8,347
連結範囲の変更を伴う子会社株式の取得による支出(収入)	(2,515)	14,724	125,346
子会社株式の追加取得による支出	(1,901)	(4,286)	(36,489)
貸付による支出	(8,437)	(10,703)	(91,115)
貸付金の回収による収入	6,811	5,913	50,337
敷金保証金の差入による支出	(2,284)	(2,393)	(20,367)
敷金保証金の返還による収入	1,164	1,777	15,129
その他(純額)	(1,502)	(1,146)	(9,754)
投資活動によるキャッシュ・フロー	¥ 3,352	¥ (33,137)	\$ (282,085)

	百万円		千米ドル(注記1)
	2005	2006	2006
財務活動によるキャッシュ・フロー：			
短期借入金の増加(減少)額(純額)	¥ (5,087)	¥ 1,879	\$ 15,999
長期債務による収入	24,262	151,655	1,291,009
長期債務の返済による支出	(3,025)	(31,800)	(270,708)
配当金支払額	(1,776)	(2,966)	(25,253)
少数株主への配当金支払額	(879)	(2,218)	(18,879)
新株発行による収入	52,481	24,377	207,519
少数株主に対する株式の発行による収入	28,351	63,028	536,547
自己株式売却による収入	2	160	1,361
自己株式取得による支出	(24)	(2,908)	(24,761)
その他(純額)		(461)	(3,923)
財務活動によるキャッシュ・フロー	94,305	200,746	1,708,911
現金及び現金同等物に係る換算差額	75	729	6,210
現金及び現金同等物の増加額	72,201	35,598	303,043
新規連結に伴う現金及び現金同等物の増加額	25	1,967	16,739
連結除外に伴う現金及び現金同等物の減少額	(133)	(11,480)	(97,730)
合併による増加	6		
現金及び現金同等物の期首残高	34,361	106,460	906,277
現金及び現金同等物の期末残高	¥106,460	¥132,545	\$1,128,329

キャッシュ・フローの補足情報(注記 2.a)：

新たに連結したことに伴う連結開始時の資産及び負債の内訳並びに取得価額と取得による支出(純額)：

資産	¥ (63,890)	¥ (39,997)	\$ (340,490)
負債	46,894	10,550	89,812
連結調整勘定	(4,447)	(6,083)	(51,786)
特別法上の準備金	128		
少数株主持分	6,867	16,580	141,145
為替換算調整勘定	(11)		
取得価額	(14,459)	(18,950)	(161,319)
非連結子会社の現金及び現金同等物	11,944	17,999	153,227
関連会社株式からの振替額		15,675	133,438
取得のための支出	¥ (2,515)	¥ 14,724	\$ 125,346

株式の売却により連結子会社でなくなったことに伴う売却時の資産及び負債の内訳並びに売却価額と売却による収入(純額)：

資産	¥ 7		
負債	(1)		
売却額	6		
売却による収入	¥ 6		

連結財務諸表の注記参照

連結財務諸表注記

SBIホールディングス株式会社(旧ソフトバンク・インベストメント株式会社)及び連結子会社
2005年及び2006年3月31日に終了した連結会計年度

1. 事業の概況及び 連結財務諸表の作成基準

(当社)SBIホールディングス株式会社は、主としてインターネット関連企業に対するベンチャー・キャピタル事業を行うため1999年7月に設立されました。以後、合併・買収を通じてインターネット関連企業以外にも投資分野を拡大して参りました。

当社及び当社の連結子会社はアセットマネジメント、ブローカレッジ&インベストメントバンキング、ファイナンシャル・サービスの3つのコアビジネスを軸とした「総合的な金融サービス」を提供する企業グループとして積極的な事業展開を推進しております。一方、当社及び連結子会社はさらに不動産及び生活関連ネットワークの分野にも進出し、5つのコアビジネス体制により金融および金融以外の分野で広範囲のサービスを提供できる体制へと進化していかうとしています。

アセットマネジメント事業は、主にソフトバンク・インベストメント株式会社、SBIキャピタル株式会社及びSBIブロードバンドキャピタル株式会社により、日本最大級のベンチャーキャピタルファンドに加え、LBOファンド、企業再生ファンド及びメディアファンド等の運用管理が行われております。

ブローカレッジ&インベストメントバンキング事業では、主にオンライン証券最大の顧客口座数、預り資産、1日当たりの平均売買代金を有するSBIイー・トレード証券株式会社及びSBI証券株式会社により株式引受業務、証券化スキーム、コーポレートファイナンス及びプライベートエクイティのアドバイザー業務等を行っております。

ファイナンシャル・サービス事業では、主に当社、SBIモーゲージ株式会社、SBIリース株式会社、及びモーニングスター株式会社により、金融商品を比較できるマーケットプレイス、全期間固定の低金利住宅ローンやIT分野に特化したリース事業等を行っております。

添付の連結財務諸表は、日本の証券取引法及びその関連会計規則の規定に基づき、国際財務報告基準で要求されている会計処理及び開示の基準とは一部異なる日本基準(日本で一般に公正妥当と認められる会計基準及び会計慣行)に準拠して作成しております。

また、添付の連結財務諸表の作成に当たりましては、日本国外の利用者の方々になじみのある形式で表示するために、国内で公表された連結財務諸表に一定の組み替え及び並び替えを行っております。また、日本において一般に公正妥当と認められる会計基準及び会計慣行では求められていない注記を追加情報として記載しております。さらに2005年の連結財務諸表も2006年の表示形式で一定の組み替えを行っております。

なお、添付の連結財務諸表は、当社が主に営業活動を行っている日本国の通貨である円で表示しております。記載されている米ドル金額は、日本国外の読者のために表示したものであり、2006年3月31日の概算為替相場である1米ドルあたり117.47円のレートで計算したものにすぎません。この換算によって、日本円の金額が上記のレートあるいはその他のレートで米ドルに換算されうるということを意味するものではありません。

2. 重要な会計方針

a. 連結 — 2006年3月31日現在の連結財務諸表は、当社と連結子会社37社(2005年3月31日現在は36社)を含めております。支配力基準に従って、直接または間接に当社が経営に支配力を行使することができる会社を連結対象とし、当社が重要な影響力を行使することができる会社には持分法を適用しております。

非連結子会社1社(2005年3月31日現在は0社)及び関連会社7社(2005年3月31日現在は2社)に持分法を適用しております。それ以外の非連結子会社42社(2005年3月31日現在は12社)と持分法非適用関連会社3社(2005年3月31日現在は3社)は原価法を適用しております。これらの会社に持分法が適用された場合の連結財務諸表に及ぼす影響は軽微であります。

連結子会社及び関連会社への投資額が被投資会社の取得時の純資産を上回った場合はその金額が借方連結調整勘定として、投資額が被投資会社の取得時の純資産を下回った場合はその金額が貸方連結調整勘定として計上されます。連結調整勘定の償却については効果の発現する期間を合理的に見積もりできるものはその見積期間で、その他のものは20年間で均等償却しております。但し、金額が僅少なものについては発生時に一括償却しております。

連結会社間の重要な債権債務及び取引はすべて消去されております。また、連結会社間の取引から生じた資産に含まれる重要な未実現利益もすべて消去されております。

他の会社等の100分の20以上を所有しているにもかかわらず関係会社としなかった当該他の会社8社(2005年3月31日現在は5社)及び投資法人1社(2005年3月31日現在は1社)については、当社の営業目的であるベンチャー企業の投資育成等のために取得したものであり、傘下に入れる目的ではないため営業投資有価証券に計上しております。

営業投資有価証券に含まれている営業目的による投資事業組合等への出資(流動資産)に係る会計処理は、当社及び当社の連結子会社の出資持分割合に応じて持分法と同様の会計処理によっております。ただし、投資事業組合等の収益・費用は当社及び連結子会社の出資持分割合に応じて、連結損益計算書に収益・費用として計上しております。

投資有価証券に含まれている営業目的以外の投資事業組合等への出資(投資その他の資産)に係る会計処理は、当社及び当社の連結子会社の出資持分割合に応じて持分法と同様の会計処理によっております。

2005年度におけるソフトバンク・コンテンツ・パートナーズ株式会社(ソフトバンク・インベストメント株式会社に吸収合併)、SBIキャピタル株式会社及びSBIブロードバンドキャピタル株式会社、また2006年度におけるソフトバンク・インベストメント株式会社、SBIキャピタル株式会社及びSBIブロードバンドキャピタル株式会社等、当社の連結子会社の運用する匿名組合の資産・負債及び収益・費用は、実質的に営業者には帰属しないため、連結財務諸表規則に基づき連結の範囲から除外しております。

2004年4月19日開催の取締役会の決議により、当社は2004年4月19日、株式会社アスコット(現SBIイコール・クレジット株式会社)の普通株式6,000株をソフトバンク・ファイナンス株式会社(ソフトバンク・イーエム株式会社に商号変更)とアコム株式会社から、スワン・クレジット株式会社(SBIビジネスローン株式会社へ商号変更)の普通株式3,600株をソフトバンク・ファイナンス株式会社から取得いたしました。この結果、当社が所有する株式会社アスコット及びスワン・クレジット株式会社は、2004年4月から当社の連結子会社となりました。2004年8月2日、スワン・クレジット株式会社を存続会社として株式会社アスコットを吸収合併いたしました。その結果、当社が所有するスワン・クレジット株式会社の議決権比率は、2005年3月31日時点で82.5%となっております。

2004年5月15日、株式会社テックタンク(SBIテクノロジー株式会社に商号変更)は韓国にFinance All Solutions Co., Ltd.を設立いたしました。株式会社テックタンクは71百万円を出資しFinance All Solutions Co., Ltd.の議決権の85.7%を所有しております。Finance All Solutions Co., Ltd.の主な事業は韓国の金融分野でのシステム開発であり、2004年5月から当社の連結子会社となっております。

2004年6月29日、ファイナンス・オール株式会社(現在、当社に吸収合併)は株式交換により株式会社インターアイを完全子会社化いたしました。株式交換により交付したファイナンス・オール株式会社の株式数は1,886株であり、取得価額相当額は335百万円であります。これにより、株式会社インターアイは2004年6月から連結子会社となりました。株式会社インターアイの主な事業は格安航空券やレンタルサーバー等の一括見積サービスの提供であります。2005年7月、ファイナンス・オール株式会社は株式会社インターアイを吸収合併いたしました。

2004年6月、エスピーエルヴァ株式会社(SBIエルヴァ株式会社に商号変更)は重要性が増したため連結子会社となりました。

2004年6月29日、当社は100%子会社としてSBIブロードバンドキャピタル株式会社を資本金10百万円で設立いたしました。

2004年6月10日と6月17日、当社は、E*TRADE KOREA CO., LTD.の普通株式をLG Investment & Securities Co., Ltd.及びソフトバンク株式会社からそれぞれ2,820,000株及び2,400,000株を総額2,110百万円で取得いたしました。この結果、当社が所有するE*TRADE KOREA CO., LTD.の所有比率は、2004年6月17日現在で87.0%となり、E*TRADE KOREA CO., LTD.は、2004年6月から当社の連結子会社となりました。なお、2005年3月4日開催の取締役会決議により、2005年3月11日、当社はE*TRADE KOREA CO., LTD.の全株式をイー・トレード証券へ譲渡し、E*TRADE KOREA CO., LTD.はイー・トレード株式会社の連結子会社となりました。

当社は、2004年7月26日開催の取締役会の決議により、2004年7月29日モーニングスター株式会社の普通株式32,968株を総額7,085百万円でソフトバンク・ファイナンス株式会社から取得いたしました。この結果、当社が所有するモーニングスター株式会社の議決権比率は、2004年7月29日時点で50.43%となり、モーニングスター株式会社とその連結子会社であるモーニングスター・アセット・マネジメント株式会社、ゴメス株式会社(ゴメス・コンサルティング株式会社に商号変更)及びイー・アドバイザー株式会社(現在、モーニングスター株式会社に吸収合併)は、2004年7月から当社の連結子会社となりました。

2004年7月1日、当社は野村土地建物株式会社及び株式会社野村総合研究所と、両社が所有するエース証券株式会社の普通株式について株式公開買付制度を通じて両社より取得することにつき基本合意し、2004年7月14日開催の当社取締役会で公開買付の実施を決議いたしました。公開買付期間は、2004年7月15日から2004年8月5日であり、公開買付による買付株式総数は20,603,700株、買付総額は4,430百万円となりました。この結果、当社のエース証券株式会社の所有比率は55.93%となり、同社及び同社の連結子会社である株式会社エースコンサルティング、株式会社エースコーポレーション、エース土地建物株式会社は2004年8月から当社の連結子会社となりました。2005年3月、エース証券株式会社はエース土地建物株式会社を吸収合併いたしました。

エスピーアイ・キャピタルソリューションズ株式会社は重要性が増したため、2004年7月から連結子会社となりました。なお、2004年12月、エスピーアイ・キャピタル株式会社は同社を吸収合併いたしました。

2004年9月1日、当社は、オフィスワーク株式会社(SBIビジネス・ソリューションズ株式会社に商号変更)の普通株式700株をソフトバンク・ファイナンス株式会社から総額88百万円で取得いたしました。この結果、同社及び同社の子会社であるオフィスワーク・システムズ株式会社(SBIビジネス・ソリューションズ株式会社に商号変更)が2004年9月から連結子会社となりました。なお、両社は連結上の重要性がなくなったため、2005年3月末をもって連結の範囲から除外いたしました。

2004年11月29日、当社は、イコール・クレジット株式会社(SBIイコール・クレジット株式会社に商号変更)の普通株式4,000株をソフトバンク・ファイナンス株式会社から総額200百万円で取得いたしました。この結果、イコール・クレジット株式会社は、2004年11月から当社の完全子会社となりました。

2005年7月1日、当社は子会社のSBIベンチャーズ株式会社(ソフトバンク・インベストメント株式会社に商号変更)にファンド事業を分割譲渡し、SBIホールディングス株式会社に商号変更しました。

2005年8月3日開催の取締役会の決議により、2005年8月25日、エース証券株式会社は発行総額7,440百万円(63,335千米ドル)(1株当たり240円(2.04米ドル))の第三者割当増資により31百万株の新株を発行いたしました。当該取引により、エース証券株式会社は当社の関連会社となりました。

2005年8月26日、当社は個人株主からSBIパートナーズ株式会社(現在、当社に吸収合併)の普通株式516,700株を総額1,093百万円(9,303千米ドル)で取得いたしました。この結果、SBIパートナーズは2005年8月からの当社の連結子会社とな

りました。

2005年9月2日、当社は保有するエース証券株式会社の全株式20,603,700株を総額4,945百万円(42,095千米ドル)で売却しました。この結果、エース証券株式会社は2005年9月から当社の関連会社ではなくなりました。

2005年9月29日、当社は株式会社ゼファアの新株発行を引受け、普通株63,622株を総額15,386百万円(130,976千米ドル)で取得いたしました。この結果、株式会社ゼファアは2005年9月から当社の持分法適用関連会社になりました。

2005年12月30日、当社はこれまでに営業投資有価証券として所有していましたオートバイテル・ジャパン株式会社の普通株式12,000株を600百万円(5,108千米ドル)で追加取得いたしました。この結果、オートバイテル・ジャパン株式会社は2005年12月から当社の持分法適用関連会社になりました。

2006年1月27日に開催された臨時株主総会の承認により、当社は2006年3月1日にSBIパートナーズ株式会社を吸収合併いたしました。この吸収合併に際し、当社は新株842,392株を発行し、SBIパートナーズ株式会社の発行済み普通株式1株に対し0.05株の交換比率で、新株をSBIパートナーズ株式会社の株主に交付いたしました。

2006年1月27日に開催された臨時株主総会の承認により、当社は2006年3月1日にファイナンス・オール株式会社を吸収合併いたしました。この吸収合併に際し、当社は新株1,234,860株を発行し、ファイナンス・オール株式会社の発行済み普通株式1株に対し2.5株の交換比率で、新株をファイナンス・オール株式会社の株主に交付いたしました。

2006年1月27日に開催された臨時株主総会の承認により、当社は新株483,338株を発行し、SBI証券株式会社の発行済み普通株式1株に対し1.15株の交換比率で、新株をSBI証券株式会社の株主に交付いたしました。この結果、SBI証券株式会社は当社の完全子会社となりました。

b. 現金同等物 — 現金同等物は、容易に換金可能で、価値変動リスクがほとんどない短期投資であります。現金同等物には、定期預金、別段預金、通知預金、マネー・マネジメント・ファンド、中期国債が含まれ、すべて取得日から3ヶ月以内に満期または期日の到来するものです。

c. 有価証券の評価 — 有価証券は、保有目的により次のように分類されております。(1)売買目的有価証券(短期にキャピタル・ゲインを得る目的で保有されているもので、未実現利益及び損失は連結損益計算書に計上されます)、(2)その他有価証券(未実現利益及び損失を反映した公正価値にて評価され、評価差額は税効果考慮後の金額にて資本の部に計上されます)。売却原価は移動平均法に基づき算定しております。

その他有価証券のうち時価のないものは、移動平均法に基づいて原価法により計上しております。その実質価値が一時的なものでなく著しく低下した場合には実質価値まで減損処理し、減損損失を連結損益計算書に計上しております。

投資事業組合等への出資金は、当社及び連結子会社の出資持分割合に応じて、営業投資有価証券(流動資産)または投資有価証券(投資その他の資産)として計上しております。2006年3月31日に終了した連結会計年度より、投資事業組合等が投資する当社の子会社の株式は、当社及び当社の連結子会社の出資持分割合に応じて、連結貸借対照表に計上されています。投資事業組合等が売却した当社の子会社の株式の売却損益は、当社及び連結子会社の出資持分割合に応じて、連結損益計算書の「投資有価証券売却益(純額)」として計上されています。この変更により、2006年3月31日に終了した連結会計年度の売上総利益及び営業利益は2,830百万円(24,091千米ドル)減少しましたが、税金等調整前当期純利益に対する影響はありませんでした。

商品取引所法の規定により先物取引に関連して保有されている有価証券は、商品取引所が定めた充用価格によっており、主な有価証券の価格は以下のとおりであります。

利付国債	額面金額の85%
社債(上場銘柄)	額面金額の65%
株券(一部上場銘柄)	時価の70%相当額
倉荷証券	時価の70%相当額

d. 投資損失引当金 — 投資損失引当金は投資先会社の実情を勘案の上、その損失見積額を計上しております。

e. たな卸不動産 — たな卸不動産は、個別法による原価法で計上されています。

f. 貸倒引当金 — 貸倒引当金は貸倒実績率及び個別回収可能性を勘案し回収不能見込額を計上しております。

g. 有形固定資産 — 有形固定資産は、取得原価から減価償却累計額を控除した価値をもって計上しております。減価償却の方法としては、当社及び国内子会社は定率法、在外子会社は所在地国の会計基準に基づく定額法によっております。ただし、1998年4月1日以降に取得した建物(建物附属を除く)については定額法を採用しております。主な耐用年数は建物は3年から50年、器具備品は2年から20年です。賃貸資産についてはリース契約期間を償却年数とする定額法を採用しております。

h. 長期性資産 — 2002年8月、企業会計審議会(BAC)は「固定資産の減損に係る会計基準の設定に関する意見書」を公表し、また2003年10月、企業会計基準委員会(ASBJ)は企業会計基準適用指針第6号「固定資産の減損に係る会計基準の適用指針」を公表しました。この新しい会計基準は、2005年4月1日以後開始する会計年度から適用されることになりましたが、2004年3月31日以後に終了する会計年度に早期適用することも認められていました。

当社及び国内子会社(当社グループ)は、2005年4月1日より固定資産の減損に係る新会計基準を適用しております。

当社グループは、資産または資産グループの帳簿価格が回収できない可能性を示す事象や状況の変化が生じた場合に、長期性資産の減損の有無を検討しています。資産または資産グループの帳簿価額が、資産または資産グループの継続的使用および使用後の処分によって生ずると見込まれる割引前の将来キャッシュ・フローの総額を上回る場合、減損損失を計上します。減損損失額は、資産の帳簿価額が回収可能額(資産の継続的使用および使用後の処分によって生ずると見込まれる将来キャッシュ・フローの現在価値、または正味売却価格のいずれか高い金額)を超過した金額となります。

固定資産の減損に係る新会計基準の適用による影響により、2006年3月31日に終了した会計年度の税金等調整前当期純利益は273百万円(2,323千米ドル)の減少となりました。

i. リース — すべてのリースはオペレーティング・リースとして会計処理されています。日本のリース会計基準では、賃借人にリース物件の所有権が移転したとされるファイナンス・リースは資産計上されますが、その他のファイナンス・リースは仮に資産計上する場合における所定の情報が賃借人の財務諸表の注記に開示されている場合には、オペレーティング・リースとして処理することが認められています。

なお、賃貸資産は、減価償却累計額を控除した価額をもって計上しております。減価償却は、リース契約期間を償却年数とし、リース期間満了時のリース資産の見積処分価額を残存価額とする定額法によっております。

j. ソフトウェア — ソフトウェア(自社利用分)については、減価償却累計額を控除した価額をもって計上しております。減価償却は社内における利用可能見込期間である5年間の定額法によっております。

k. その他の資産 — 新株発行費及び社債発行費は、日本の商法の規定に基づき3年間で毎期均等償却しております。なお、一部の連結子会社では発生時に一括償却しております。無形固定資産は定額法により償却しております。

l. 偶発損失引当金 — 一部の連結子会社では、係争事件に伴う損失の支払に備えるため、その損失見込額を計上しております。

m. 完成工事補償引当金 — 一部の連結子会社では、引渡し物件の補修工事費に備えるため、2006年3月31日に終了した会計年度に完成した当社子会社の請負金額に対する見積補償額を計上しております。

n. 退職年金制度 — 退職給付引当金は、会計年度末の退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき計上しております。

o. 役員退職慰労引当金 — 一部の連結子会社は役員の退職慰労金の支出に備えて、役員退職慰労金規定に基づく会計年度末の要支給額を計上しております。

p. 収益及び費用の計上基準 — 売上高には、営業投資有価証券売上高、投資事業組合等管理収入、不動産関連売上高、証券取引関連収益、商品先物取引関連収益等が含まれており、売上原価には営業投資有価証券売上原価、不動産関連売上原価、投資損失引当金繰入額等が含まれております。

営業投資有価証券売上高 — 営業投資有価証券売上高は、当社、一部の連結子会社及び投資事業組合等で保有している営業投資有価証券の売上高、受取配当金及び受取利息を計上しております。

営業投資有価証券売上原価 — 営業投資有価証券売上原価は、当社、一部の連結子会社及び投資事業組合等で保有している投資育成目的の営業投資有価証券の売上原価、支払手数料、評価損等を計上しております。営業投資有価証券はその実質価額が一時的でなく著しく低下した場合には実質価額まで減損処理し、減損損失額を計上しております。支払手数料は発生時に計上しております。

投資事業組合等管理収入 — 投資事業組合等管理収入には、投資事業組合等設立報酬及び同管理報酬、同成功報酬が含まれております。投資事業組合等の設立時に募集基金に一定割合を乗じて算出される設立報酬及び運用成績により收受される成功報酬は報酬金額確定時にその報酬金額を収益として、投資事業組合等の純資産価額等に一定割合を乗じて算定される管理報酬は契約期間の経過に伴い契約上收受すべき金額を収益として計上しております。

長期請負工事収益 — 請負金額が300百万円(2,554千米ドル)以上かつ工期が1年以上の長期請負工事については工事進行基準によっており、その他については工事完成基準により収益を計上しております。

証券取引関連収益 — 証券取引関連収益は、証券売買取引に伴う委託手数料、新規公開株式の引受・売出手数料、株式の募集、売出しの取扱手数料等の収入を計上しております。

商品先物取引関連収益 — 商品先物取引の受取手数料については取引約定日基準により売上高として計上しております。

金融費用及び資金原価 — 信用取引に伴う支払利息及び現先取引費用等ブローカレッジ&インベストメントバンキング事業に係る金融費用については、売上原価に計上しております。上記金融費用以外の支払利息については、資産の平均残高に基づいて、営業資産(営業投資有価証券、賃貸資産等)に係るものと非営業資産に係るものとそれぞれ分割し、営業資産に係る資金原価は、売上原価に計上しております。非営業資産に係る支払利息については、営業外費用として計上しております。

q. 法人税等 — 法人税等は連結損益計算書の税金等調整前当期純利益に基づいて算定され、資産・負債の帳簿価額と税務申告上の価額との間の一時差異に対する税効果について、資産・負債法により繰延税金資産及び繰延税金負債を認識しております。これらの繰延税金資産及び繰延税金負債は現行の法人税法に基づいて計算されています。なお、繰越期限内に十分な課税所得の発生が見込まれていないことなどにより実現可能性が低いと判断される繰延税金資産に対しては評価性引当を行っております。

r. 消費税 — 当社及び国内連結子会社の受領した収益に課される消費税は仮受消費税として処理し、国・地方等の課税主体に納付しております。当社及び国内連結子会社が購入した製品、商品及びサービス等に課された消費税は、仮払消費税として処理しております。連結貸借対照表上で仮受消費税は仮払消費税と相殺され、相殺後の残高が流動資産(未収消費税)または流動負債(未払消費税)として計上されます。ただし相殺しきれない仮払消費税(控除対象外消費税)は販売費、一般管理費及びその他の収益(費用)として計上しております。

s. 外貨建債権債務 — すべての短期及び長期の外貨建金銭債権及び債務は、貸借対照表日の為替レートで日本円に換算されます。換算から生じる為替差損益は、為替予約によってヘッジされている場合を除き、連結損益計算書の中で認識されております。

t. 外貨建財務諸表 — 在外連結子会社の貸借対照表項目は、取得時のレートで換算される資本勘定を除き、各事業年度末の為替レートで日本円に換算されます。換算方法で生じる差異は、連結貸借対照表上、「為替換算調整勘定」及び「少数株主持分」として資本の部に表示されています。在外連結子会社の収益と費用は期中平均レートで日本円に換算されます。

u. デリバティブとヘッジ取引 — 当社及び連結子会社の利用しているデリバティブ取引は、主にヘッジ目的としての為替予約取引であります。また、一部の連結子会社では金利スワップ取引、株価指数先物取引、商品先物取引、債券先物取引等も行っております。

デリバティブは次のように分類され計上されております。a)すべての派生商品は債権または債務として認識し時価評価を行い評価差額は損益計算書に計上します。b)ヘッジ目的で使用されるデリバティブについては、もしデリバティブがヘッジ手段とヘッジ対象との間に高い相関性と効果があり、ヘッジ会計の要件を満たすのであればデリバティブの損益はヘッジ取引が終了するまで繰延されます。

先物為替予約は外貨による債権または債務及び投資等をヘッジするために使われており、ヘッジ会計の要件を満たす場合には契約レートで換算されます。

金利スワップ取引については、特定処理の要件を満たしているため、ヘッジの有効性の評価を省略しております。

v. 利益処分 — 各年度における利益処分にかかわる会計処理は、翌年度の株主総会により承認されたものが連結財務諸表に反映されております。

w. 1株当たり情報 — 1株当たり当期純利益は、普通株主に帰属する当期純利益を期中平均発行株式数で除すことにより計算しております。期中に株式分割が行われた場合は、株式分割が期首にあったものとして計算しております。

潜在株式調整後1株当たり当期純利益は、普通株式に係る当期純利益に希薄化効果を有する各々の潜在株式に係る当期純利益調整額を加えた合計金額を普通株式の期中平均株数に希薄化効果を有する各々の潜在株式に係る権利の行使を仮定したことによる普通株式の増加数を加えた合計株式数で除して算定します。

1株当たり配当金は添付の連結損益計算書に表示されており、その翌年に支払われますが、期中に株式分割が行われた場合も期首に遡って調整されることはありません。

x. 最近公表された会計基準

企業結合・事業分離等会計基準

2003年10月、企業会計審議会(BAC)は「企業結合に係る会計基準の設定に関する意見書」を公表し、また2005年12月27日付で、企業会計基準委員会(ASBJ)は企業会計基準第7号「事業分離等に関する会計基準」と、企業会計基準適用指針第10号「企業結合会計基準及び事業分離等会計基準に関する適用指針」を公表しました。この新しい会計基準は、2006年4月1日以後開始する会計年度から適用されることになりました。

企業結合に係る会計基準では、企業結合が基本的に持分の結合と判断されるための特定基準を満たす場合に限り、企業が持分ブローリング法による会計処理をすることができます。この判断基準は以下で構成されます。

- (a) 結合の対価が議決権付普通株式であること
- (b) 結合後の議決権比率が同程度であること
- (c) 議決権以外の支配関係を示す他の要因が存在しないこと

持分の結合と判断される基準を満たさない企業結合については、企業結合は取得とみなされ、パーチェス法の会計処理が要求されます。この会計基準は、合併会社の設立の形態をとることもある共同支配下の企業結合も適用対象となっています。のれん(負ののれんも含む)は20年以内の規則的償却が義務づけられますが、同時に減損テストの適用対象にもなっています。

事業分離等会計基準では、株主の持分が継続されず投資が清算される場合の事業分離には、分離元企業が受領した対価とみなされる公正価格と、分離先企業に移転された純資産の帳簿価格との差額は、損益計算書において事業分離に係る損益として認識されます。株主の持分が継続し、投資が清算されない場合の事業分離には、事業分離に係る損益は認識されません。

ストック・オプション

2005年12月27日付で、企業会計基準委員会(ASBJ)は「ストック・オプション等に関する会計基準」及び「ストック・オプション等に関する会計基準の適用指針」を公表しました。新しい会計基準及び指針は、2006年5月1日以降に付与されたストックオプションに適用されます。

この会計基準では、企業は、物品・サービスを受け取る対価として、付与日及び権利確定期間に公正価値に基づいて、従業員ストック・オプションの報酬費用を認識することが義務づけられています。この会計基準では、企業が、ストックオプションまたは受領した物品・サービスの公正価値に基づいて、従業員以外の者に付与されたストック・オプションを計上することも要求されます。ストック・オプションは、行使されるまでの期間は、貸借対照表の純資産の部に株式購入権という独立した項目で計上されます。この会計基準は、株式報酬型ストックオプションに適用されますが、現金報酬型ストックオプションには適用されません。また、この会計基準で、非上場会社が有意な公正価格で評価することができない場合、本源的価値でストック・オプションを評価することができます。

役員賞与

2005年3月31日に終了した会計年度より前の会計年度では、役員賞与は株主総会決議に基づき未処分利益の減少として会計処理していました。企業会計基準委員会(ASBJ)は企業会計基準適用指針公開草案(PITF)第13号「役員賞与の会計処理に関する当面の取扱い(案)」を公表し、企業に役員賞与を発生時に費用計上するように要請しましたが、利益処分の承認後に役員賞与を未処分利益の減少として処理することも認めておりました。

ASBJは、2005年11月29日に役員賞与に関する会計基準を公表し、上記の企業会計基準適用指針公開草案と差し替えました。新しい会計基準の下では、役員賞与は費用計上が義務づけられ、未処分利益の減少として処理することは認められなくなりました。この会計基準は、2006年5月1日以降に終了する会計年度から施行されます。企業は、役員賞与の支払いの対象となる会計年度末に支払見込額に基づき役員賞与引当金を繰り入れることにより費用として計上しなければなりません。

3. 会計基準の変更

商品先物取引関連収益

2005年5月に改定された商品先物取引に関する会計基準により、商品先物取引の受取手数料については取引日に売上高として処理することになりました。2005年5月より前は委託者が取引を転売又は買戻し及び受渡しにより決済したときに売上高として計上しておりました。この変更による損益への影響は軽微であります。

4. 預託金

2005年及び2006年3月31日現在において、商品取引所法の規定に基づき所定の金融機関に分離保管されている資産の内訳は以下のとおりであります。

	百万円		千米ドル (注記1)
	2005	2006	2006
預託金	¥1,184	¥300	\$2,554
短期差入保証金	2,390		
保管有価証券	104		

2005年及び2006年3月31日現在において、外国為替保証金取引にかかる預り証拠金の委託者に帰属する資産を商品取引所法に定める分離保管に準じて区分管理している資産の内訳は以下のとおりであります。

	百万円		千米ドル (注記1)
	2005	2006	2006
預託金	¥58	¥6,519	\$55,493

5. たな卸不動産

2006年3月31日現在におけるたな卸不動産の内訳は以下のとおりであります。

	百万円		千米ドル (注記1)
	2005	2006	2006
販売用不動産	¥ 7,062		\$ 60,112
開発用不動産	2,275		19,370
不動産信託受益権	16,996		144,684
合計	¥26,333		\$224,166

6. 営業投資有価証券及び 投資有価証券

2005年及び2006年3月31日現在における営業投資有価証券と投資有価証券の内訳は以下のとおりであります。

	百万円		千米ドル (注記1)
	2005	2006	2006
流動資産：			
時価のある有価証券	¥12,900	¥ 1,820	\$ 15,495
時価のない有価証券	3,519	6,552	55,779
社債等	89	336	2,854
投資事業組合等への出資金	23,083	52,960	450,837
その他	238		
合計	¥39,829	¥61,668	\$524,965
固定資産：			
時価のある有価証券	¥ 6,768	¥17,682	\$150,521
時価のない有価証券	2,566	2,142	18,232
投資事業組合等への出資金	2,250	5,667	48,247
国債・地方債等	16	15	126
社債等		2,000	17,026
投資信託	86	621	5,286
合計	¥11,686	¥28,127	\$239,438

2005年及び2006年3月31日現在におけるその他有価証券に分類されている有価証券の帳簿価額と評価額の内訳は以下のとおりであります。

	百万円			評価額
	取得原価	未実現利益	未実現損失	
2005年3月31日				
株式	¥12,533	¥7,339	¥204	¥19,668
国債・地方債等	10			10
投資信託	100		14	86
2006年3月31日				
株式	¥14,568	¥5,248	¥314	¥19,502
国債・地方債等	10		1	9
投資信託	605	17	1	621

	千米ドル(注記1)			評価額
	取得原価	未実現利益	未実現損失	
2006年3月31日				
株式	\$124,012	\$44,678	\$2,674	\$166,016
国債・地方債等	85		13	72
投資信託	5,150	145	9	5,286

2005年及び2006年3月31日現在で時価のないその他有価証券に分類されている有価証券の内訳は以下のとおりであります。

	帳簿価額		
	百万円		千米ドル (注記1)
	2005	2006	2006
株式	¥ 6,085	¥ 8,694	\$ 74,011
投資事業組合等への出資金	25,333	58,627	499,084
債券等	333	2,342	19,934
合計	¥31,751	¥69,663	\$593,029

2005年及び2006年のその他有価証券の売却収入は、それぞれ22,626百万円及び22,822百万円(194,282千米ドル)となっております。売却益と売却損(売却原価は移動平均原価法によります)は、2005年はそれぞれ5,108百万円及び119百万円、2006年はそれぞれ6,489百万円(55,244千米ドル)及び192百万円(1,639千米ドル)となっております。

2006年3月31日現在で、満期保有目的債券の償還スケジュールは以下のとおりであります。

	百万円		千米ドル (注記1)
	2005	2006	2006
1年以内償還予定	¥ 2		\$ 15
1年超5年以内償還予定	2,013		17,136
5年超10年以内償還予定	1		14

その他有価証券から子会社及び関連会社株式に保有目的を変更したものは2005年で106百万円、2006年で5,298百万円(45,099千米ドル)となっております。また、投資有価証券から子会社及び関連会社株式に保有目的を変更したものは2005年で5百万円、子会社及び関連会社株式からその他有価証券に保有目的を変更したものは139百万円(1,183千米ドル)となっております。

期末における時価が取得原価に比べ50%以上下落した場合には全て減損処理を行い、30~50%程度下落した場合には、当該金額の重要性、回復可能性等を考慮して必要と認められた額について減損処理を行っております。2005年で232百万円、2006年で1百万円(7千米ドル)の減損処理を行っております。

2005年及び2006年3月31日現在の営業投資有価証券に含まれている投資事業組合等への出資金の内訳は以下のとおりであります。

	百万円		千米ドル (注記1)
	2005	2006	2006
ソフトバンク・インターネットテクノロジー・ファンド1号	¥ 2,274	¥13,930	\$118,583
ソフトバンク・インターネットテクノロジー・ファンド2号	2,342	13,141	111,870
ソフトバンク・インターネットテクノロジー・ファンド3号	4,393	1,787	15,212
ソフトバンク・インターネット・ファンド	550	1,123	9,557
SBI・LBOファンド1号	2,601	2,434	20,722
企業再生ファンド一号投資事業有限責任組合	5,945	3,488	29,695
SBIメザニンファンド1号	1,671	2,485	21,154
SBIビービーメディア投資事業有限責任組合	1,959	1,898	16,156
バイオビジョン・ライフサイエンス・ファンド1号	1,710	2,232	18,998
その他のファンド	1,888	16,109	137,137
合計	¥25,333	¥58,627	\$499,084

7. トレーディング商品

2005年及び2006年3月31日現在のトレーディング商品の内訳は以下のとおりであります。

	百万円		千米ドル (注記1)
	2005	2006	2006
トレーディング商品(資産):			
株式	¥ 64	¥ 93	\$ 791
債券	2,693	2,888	24,585
デリバティブ取引	1	4	37
その他	101	108	919
合計	¥2,859	¥3,093	\$26,332
トレーディング商品(負債):			
株式		¥ 7	\$ 59
デリバティブ取引		19	160
合計		¥ 26	\$ 219

8. 差入有価証券等

証券関連事業において2005年及び2006年3月31日現在の差し入れている有価証券等の時価は以下のとおりであります。

	百万円		千米ドル (注記1)
	2005	2006	2006
信用取引貸証券	¥ 47,553	¥ 68,596	\$ 583,948
信用取引借入金の本担保証券	235,423	313,451	2,668,351
現先取引で売却した有価証券	2,117	1,211	10,311
差入保証金代用有価証券	102,984	161,916	1,378,362
消費貸借契約による貸付有価証券		53,796	457,955
その他	791	907	7,719

証券関連事業において2005年及び2006年3月31日現在の差し入れを受けている有価証券等の時価は以下のとおりであります。

	百万円		千米ドル (注記1)
	2005	2006	2006
信用取引貸付金の本担保証券	¥303,551	¥551,701	\$4,696,527
信用取引借証券	15,374	18,746	159,580
現先取引で買い付けた有価証券	14,290		
受入保証金代用有価証券 (再担保に供する旨の同意を得たものに限る)	195,624	313,503	2,668,795
先物取引受入証拠金代用有価証券	130	213	1,809
その他	14	154	1,311

9. 預託資産

取引証拠金の代用として保管有価証券を2006年3月31日現在、株式会社日本商品清算機構へ625百万円(5,322千米ドル)、受託取引員へ482百万円及び4百万円(41千米ドル)をそれぞれ2005年、2006年3月31日現在、預託しております。これらは、商品先物関連事業において保管有価証券(その他流動資産に含む)及び預り証拠金(負債)として連結貸借対照表上に計上しているものであります。

10. 有形固定資産

2005年及び2006年3月31日現在の有形固定資産の内訳は以下のとおりであります。

	百万円		千米ドル (注記1)
	2005	2006	2006
土地	¥ 1,678	¥ 1,403	\$ 11,943
建物・構築物	4,972	3,567	30,371
器具備品	3,951	3,954	33,661
その他	88	21	177
合計	10,689	8,945	76,152
減価償却累計額	(5,974)	(4,801)	(40,873)
有形固定資産(純額)	¥ 4,715	¥ 4,144	\$ 35,279

11. 長期性資産

2006年3月31日に終了した会計年度において連結子会社1社は273百万円(2,323千米ドル)の減損損失を計上いたしました。

連結子会社1社は管理会計上の最小単位である営業部点を基礎にグルーピングを行っております。また、寮、厚生施設等については共用財産としてグルーピングを行っており、本店については、移転の決定がなされていることから単独でグルーピングを行っております。

東京都の本店資産については、移転の決定がなされていることから帳簿価額を回収可能価額まで減額いたしました。この結果、2006年3月31日に終了した会計年度において261百万円(2,224千米ドル)の減損損失を計上いたしました。内訳は下記のとおりです。

	百万円	千米ドル (注記1)
建物	¥136	\$1,156
器具備品	11	97
借地権	114	971
合計	¥261	\$2,224

平塚市の営業所資産については、移転の決定がなされていることから帳簿価額を回収可能価額まで減額いたしました。この結果、2006年3月31日に終了した会計年度において7百万円(59千米ドル)の減損損失を計上いたしました。内訳は下記のとおりです。

	百万円	千米ドル (注記1)
建物	¥6	\$50
器具備品	1	9
合計	¥7	\$59

名古屋市の営業所資産については営業収益減少にともない帳簿価額は回収可能額に減額いたしました。回収可能価額は使用価値を使用しており、将来キャッシュ・フローを9.3%で割り引いて算定しております。この結果、2006年3月31日に終了した会計年度には5百万円(40千米ドル)の減損損失を計上いたしました。内訳は下記のとおりです。

	百万円	千米ドル (注記1)
建物	¥4	\$34
器具備品	1	6
合計	¥5	\$40

12. 賃貸資産

2005年及び2006年3月31日現在の賃貸資産の内訳は以下のとおりであります。

	百万円		千米ドル (注記1)
	2005	2006	2006
器具備品	¥16,113	¥ 21,932	\$ 186,707
ソフトウェア	1,331	1,853	15,773
合計	17,444	23,785	202,480
減価償却累計額	(9,213)	(12,560)	(106,922)
賃貸資産(純額)	¥ 8,231	¥ 11,225	\$ 95,558

賃貸収入と賃貸資産の減価償却費は、2005年においてそれぞれ3,994百万円及び3,497百万円、2006年においてそれぞれ4,792百万円(40,796千米ドル)及び4,183百万円(35,608千米ドル)となっております。

2005年及び2006年3月31日現在の、オペレーティング・リース契約(貸手側)に関する未経過リース料は以下のとおりであります。

	百万円		千米ドル (注記1)
	2005	2006	2006
1年以内	¥222	¥137	\$1,164
1年超	240	93	793
合計	¥462	¥230	\$1,957

2005年及び2006年のファイナンス・リース(貸手側)に関する情報は以下のとおりであります。

未経過リース料期末残高相当額(転貸リースに係るものも含む)

	百万円		千米ドル (注記1)
	2005	2006	2006
1年以内	¥4,640	¥ 5,037	\$ 42,879
1年超	4,871	15,628	133,036
合計	¥9,511	¥20,665	\$175,915

受取利息相当額

	百万円		千米ドル (注記1)
	2005	2006	2006
受取利息相当額	¥576	¥592	\$5,036

受取利息相当額は利息法により計算されております。

13. 関係会社株式

2005年及び2006年3月31日現在の非連結子会社及び関連会社への投資はそれぞれ807百万円と23,534百万円(200,341千米ドル)となっており、それぞれ非連結子会社株式492百万円及び3,688百万円(31,391千米ドル)、関連会社株式315百万円及び19,846百万円(168,950千米ドル)となっています。

14. 短期借入金及び長期負債

2005年及び2006年3月31日現在の短期借入金の内訳は以下のとおりであります。

	百万円		千米ドル (注記1)
	2005	2006	2006
短期借入金：			
銀行			
2005年	0.58~2.38%		
2006年	1.11~1.69%	¥5,812	¥ 7,100
その他			
2005年	0.23~2.13%		
2006年	0.20~5.25%	2,920	4,298
合計		¥8,732	¥11,398
			\$97,025

2005年の信用取引に対する借入金と現先取引に対する借入金の加重平均利率はそれぞれ0.63%及び0.57%であり、2006年においてはそれぞれ0.63%及び0.60%であります。

2005年及び2006年3月31日現在の長期負債の内訳は以下のとおりであります。

	百万円		千米ドル (注記1)
	2005	2006	2006
2008年満期円建転換社債型新株予約権付社債	¥ 13,000	¥ 5,940	\$ 50,566
2009年満期円建転換社債型新株予約権付社債	20,000	12,770	108,708
2008年満期無担保社債(固定利率1.23%)		50,000	425,641
2009年満期無担保社債(固定利率1.24%)		50,000	425,641
2008年満期無担保社債(固定利率2.00%)	1,400	1,400	11,918
2005年満期無担保社債(固定利率3.00%)	459		
銀行からの借入金(2005年:加重平均固定利率3.27%及び加重平均変動利率1.25%) (2006年:加重平均固定利率1.83%及び加重平均変動利率0.40%)	12,900	33,200	282,625
合計	47,759	153,310	1,305,099
1年以内に返済予定のもの	(11,759)	(900)	(7,661)
長期負債(1年以内に返済予定のものを除く)	¥ 36,000	¥152,410	\$1,297,438

2006年3月31日から5年以内に期限の到来する長期負債の内訳は以下のとおりであります。

	百万円		千米ドル (注記1)
	2005	2006	2006
2007年3月31日まで	¥ 900		\$ 7,661
2008年3月31日まで		21,900	186,430
2009年3月31日まで		106,040	902,699
2010年3月31日まで		24,470	208,309
2011年3月31日まで			
合計		¥153,310	\$1,305,099

2003年11月25日、当社は主にユーロ市場において13,000百万円の円建転換社債型新株予約権付社債を発行いたしました。この社債は2008年11月25日に満期となり、新株予約権は2006年3月31日現在で、1株当たり38,486.10円(327.62米ドル)で行使可能であります。新株予約権の行使により社債は当社の普通株式に転換されます。社債の発行価額は、社債の額面金額の100%であり、2006年3月31日現在で新株予約権の残存数は594個、発行する株式の総数は154,350株であります。

2004年4月8日、当社は主にユーロ市場において20,000百万円の円建転換社債型新株予約権付社債を発行いたしました。この社債は2009年4月8日に満期となり、新株予約権は2006年3月31日現在で、1株当たり39,438.50円(335.73米ドル)で行使可能であります。新株予約権の行使により社債は当社の普通株式に転換されます。社債の発行価額は、社債の額面金額の100%であり、2006年3月31日現在で新株予約権の残存数は1,277個、発行する株式の総数は323,803株であります。

2005年9月13日、当社は社債総額42,000百万円(357,538千米ドル)、利率1.23%の国内無担保普通社債を発行いたしました。この社債は2008年9月29日に満期となります。

2005年10月11日、当社は社債総額8,000百万円(68,102千米ドル)、利率1.23%の国内無担保普通社債を発行いたしました。この社債は2008年9月29日に満期となります。

2006年3月10日、当社連結子会社のイー・トレード証券株式会社は社債総額50,000百万円(425,641千米ドル)、利率1.24%の国内無担保普通社債を発行いたしました。この社債は2009年3月10日に満期となります。

当社は、以前に発行された新株引受権付社債の新株引受権のすべてを買戻し、ストック・オプション制度として当社の役員や従業員に付与しております。2006年3月31日現在、これらの新株引受権はその他流動負債に含まれております。

2006年3月31日現在の未行使の新株引受権の行使期間と行使価額の内訳は以下のとおりであります。

行使期間		1株当りの行使価額		増加する 普通株式数
自	至	円	米ドル	
2002年4月1日	2007年3月31日	¥ 2,083.30	\$ 17.73	2,592.02
2003年4月1日	2008年3月31日	2,083.30	17.73	18,792.25
2002年4月1日	2007年3月31日	25,464.90	216.78	3,952.04
2003年4月1日	2008年3月31日	25,464.90	216.78	4,010.13
2003年10月1日	2008年9月30日	25,464.90	216.78	581.10
				29,927.54

2003年6月2日のイー・トレード株式会社との合併により、当社はイー・トレード株式会社で発行された新株引受権を引き継ぎました。2006年3月31日現在の未行使の新株引受権の行使期間と行使価額の内訳は以下のとおりであります。

行使期間		1株当りの行使価額		増加する 普通株式数
自	至	円	米ドル	
2002年4月1日	2007年3月28日	¥1,910.70	\$16.27	7,960.19
2003年4月1日	2008年3月28日	1,910.70	16.27	10,953.82
2002年6月12日	2007年3月28日	2,116.40	18.02	1,496.88
2003年6月12日	2008年3月28日	2,116.40	18.02	2,959.74
				23,370.63

2006年3月1日のファイナンス・オール株式会社との合併により、当社はファイナンス・オール株式会社で発行された新株引受権を引き継ぎました。2006年3月31日現在の未行使の新株引受権の行使期間と行使価額の内訳は以下のとおりであります。

行使期間		1株当りの行使価額		増加する 普通株式数
自	至	円	米ドル	
2002年4月1日	2009年3月28日	¥4,464.00	\$38.00	30,216

新株引受権の行使価額は株式分割等により調整を行っております。

当社は、運転資金の効率的な調達を行うため取引銀行と当座貸越契約を締結しております。2006年3月31日現在において当座貸越極度額は92,846百万円(790,384千米ドル)あり、未実行残高は88,346百万円(752,076千米ドル)であります。

15. 担保に供している資産

2005年及び2006年3月31日現在で、それぞれ2,190百万円及び2,140百万円(18,217千米ドル)の短期借入金、並びに2006年3月31日現在で11,700百万円(99,600千米ドル)の長期借入金(2005年3月31日現在はない)に対し、担保に供している資産の内訳は以下のとおりであります。

	百万円		千米ドル (注記1)
	2005	2006	2006
現金及び預金	¥ 275	¥ 40	\$ 341
たな卸不動産		19,266	164,004
建物・構築物	152		
土地	152		
投資有価証券	612		
合計	¥1,191	¥19,306	\$164,345

2005年及び2006年3月31日現在、短期借入金の担保として自己融資見返り株券をそれぞれ2,211百万円及び801百万円(6,820千米ドル)差し入れております。

2005年及び2006年3月31日現在、信用取引借入金の担保として自己融資見返り株券をそれぞれ6,507百万円及び19,392百万円(165,083千米ドル)差し入れております。また2005年及び2006年3月31日現在、信用取引借入金の担保として顧客からの受入保証金代用有価証券をそれぞれ12,474百万円及び17,487百万円(148,862千米ドル)差し入れております。

2005年及び2006年3月31日現在、先物取引売買証拠金の代用として顧客からの受入保証金代用有価証券をそれぞれ130百万円及び213百万円(1,809千米ドル)、信用取引の自己融資見返り株券をそれぞれ35百万円及び18百万円(152千米ドル)差し入れております。

2005年 3月31日現在、取引所信託金代用有価証券として、信用取引の自己融資見返り株券66百万円をそれぞれ差し入れております。

2005年及び2006年3月31日現在、信用取引の自己融資見返り株券10百万円及び25百万円(215千米ドル)をそれぞれ差し入れております。

2005年3月31日現在、損害賠償等請求事件に係る立担保命令に基づく支払い保証の担保として定期預金2,500百万円を差し入れております。

16. 前受金

2005年及び2006年3月31日現在の前受金は、以下のとおりであります。

	百万円		千米ドル (注記1)
	2005	2006	2006
ソフトバンク・インターネットテクノロジー・ファンド1号	¥ 67	¥ 71	\$ 609
ソフトバンク・インターネットテクノロジー・ファンド2号	559	684	5,821
ソフトバンク・インターネットテクノロジー・ファンド3号	107	34	289
ソフトバンク・インターネット・ファンド	291	291	2,474
SBI・LBOファンド 1号	48	12	104
企業再生ファンド一号投資事業有限責任組合	90	36	311
SBIビービー・メディア投資事業有限責任組合	475	472	4,022
SBIブロードバンドファンド1号投資事業有限責任組合	162	258	2,192
バイオビジョン・ライフサイエンス・ファンド1号	121	88	753
ソフトバンク・コンテンツファンド		212	1,800
SBIバイオ・ライフサイエンス投資事業有限責任組合		133	1,129
SBIブロードバンドキャピタル投資事業匿名組合		262	2,229
顧客からの前受金		211	1,795
その他	747	907	7,720
合計	¥2,667	¥3,671	\$31,248

17. 退職給付制度

当社及び一部の国内連結子会社は、確定給付型の制度として厚生年金基金制度と、確定拠出型年金制度を設けております。また、一部の国内連結子会社は、確定給付型の制度として適格退職年金制度と厚生年金基金制度、確定拠出型年金制度、前払退職金制度のうちいずれかの制度またはいずれか複数の制度をそれぞれ設けております。また、一部の在外連結子会社は、退職金規程に基づく退職一時金制度を採用しております。

確定拠出型年金制度に関して、当社及び一部の連結子会社は、資格を有する従業員に対し従業員一人当たり給料の3%の掛金(年間216,000円までの限度額)を拠出しております。

当社及び一部の国内連結子会社は関東ITソフトウェア厚生年金基金に加入しており、同基金への加入員総数に対する当社グループの加入人員の割合による年金資産残高は2005年及び2006年3月31日現在で、それぞれ438百万円そして721百万円(6,139千米ドル)であります。

また、一部の連結子会社は総合設立型の全国商品取引業厚生年金基金に加入しており、2005年及び2006年3月31日現在の掛金納入割合による当基金に対する年金資産残高はそれぞれ238百万円及び319百万円(2,712千米ドル)であります。

2005年及び2006年3月31日現在の、その他固定負債に含まれている退職給付引当金は以下のとおりであります。

	百万円		千米ドル (注記1)
	2005	2006	2006
退職給付債務	¥ 1,855	¥ 139	\$ 1,181
年金資産	(1,810)	(143)	(1,215)
未認識数理計算上の差異	(66)		
前払年金費用	36	4	34
退職給付引当金	¥ 15		

上記退職給付引当金以外に、2005年及び2006年3月31日現在で、一部の在外連結子会社における退職給付引当金61百万円及び26百万円(220千米ドル)がその他固定負債に含まれております。

2005年及び2006年の退職給付費用に関する事項は以下のとおりであります。

	百万円		千米ドル (注記1)
	2005	2006	2006
勤務費用	¥260	¥123	\$1,049
利息費用	54	18	152
期待運用収益	(42)	(12)	(100)
数理計算上の差異の費用処理額	84	14	123
退職給付費用	356	143	1,224
その他	65	178	1,513
合計	¥421	¥321	\$2,737

上記の勤務費用には、総合設立型の厚生年金基金である関東ITソフトウェア厚生年金基金に対する拠出額(2005年は41百万円、2006年は70百万円(594千米ドル))、日本証券業厚生年金基金に対する拠出額(2005年は61百万円、2006年はなし)、及び全国商品取引業厚生年金基金に対する拠出額(2005年は8百万円、2006年は10百万円(83千米ドル))を含めております。

上記退職給付費用以外に、一部の在外連結子会社における退職給付費用として、2005年は27百万円、2006年は40百万円(342千米ドル)を計上しております。

一部の国内連結子会社は、退職給付債務の算定にあたり簡便法を採用しております。簡便法に基づき、退職給付債務は、従業員全員が各会計年度末に自己都合で退職するという想定条件の金額を計上しております。簡便法を採用している連結子会社の退職給付費用は勤務費用に含めております。

原則的な退職給付の会計処理を採用していた国内連結子会社1社は、2005年8月末日に連結範囲から除外されています。従って、連結子会社は全て退職給付債務の算定に当たり、2005年9月以降は簡便法を採用しております。なお、原則法により2005年4月から2005年8月までに計上された退職給付費用は勤務費用に含めております。

2005年の退職給付債務等の計算の基礎に関する事項は以下のとおりであります。

	2005
割引率	主に2.50%
期待運用収益率	主に2.50%
数理計算上の差異の処理年数	主に8~10年

18. 役員退職慰労引当金

役員退職慰労引当金は、商法の規定に基づき株主総会の承認を得て計上されます。

2005年及び2006年3月31日現在の役員退職慰労引当金残高はそれぞれ44百万円及び7百万円(61千米ドル)であり、その他固定負債に含まれております。

19. 特別法上の準備金

日本の証券取引法と商品取引所法により、証券会社と商品先物取引会社は、証券取引や商品先物取引に関する証券会社及び商品先物取引会社の債務不履行によって顧客が損失を被ることを防止するため、取引に比例した準備金の積立が必要であります。

20. 資本

日本の会社は、2006年5月1日までは商法の規定に従っております。

商法ではすべての普通株式は無額面株式であり、発行価額の50%以上を資本金に組み入れ、残額を資本準備金(資本剰余金に含まれる)に組み入れなければならないとされております。また、取締役会の決議により株式分割による新株の発行を行うことが認められております。この株式分割による新株発行では一般的に株主資本の変動はありません。

商法は支払配当と利益処分による社外流出項目(例えば、役員報酬)の総額の少なくとも10%を、資本準備金と利益準備金の合計額が資本金の25%に達するまで利益準備金として積み立てることを規定しております。また、資本準備金と利益準備金の総額のうち、資本金の25%を超える部分については株主総会の決議により配当可能利益とすることを認めております。さらに、取締役会の決議により資本準備金及び利益準備金の一部を資本金に組み入れることも可能であります。

商法は、定時株主総会の決議による自己株式の取得及び取締役会決議による自己株式の処分等を認めております。自己株式の取得総額については、配当可能利益と株主総会で減少させる場合の資本金、資本準備金及び利益準備金の各減少額との合計を超えることは認められておりません。

商法の規定により、配当可能利益は当社の帳簿上の未処分利益に基づいており、2006年3月31日現在の配当可能利益は69,769百万円(593,934千米ドル)となっております。現金支払に関する利益準備金の積み立て規定以外にも、商法は配当可能利益の算定において一定の制約を課しております。

期末配当は会計年度終了後の株主総会にて承認されます。中間配当は商法が規定する一定の条件を限度として取締役会の決議により支払うことができます。

2006年5月1日に新会社法(以下、「会社法」)が商法に替わって施行されることにより、2006年5月1日以降に発生する多くの事象や取引及び2006年5月1日以降に終了する事業年度にさまざまな改正が適用されます。財務及び会計処理に影響を与える重要な変更は以下のとおりであります。

a. 配当金

会社法のもとでは、株主総会決議に基づく期末配当に加え、年間を通じて随時配当することができます。以下の要件を充たす企業は、定款に定めていれば取締役会決議に基づき配当(現物配当を除く)を実施することができます。

- (1) 取締役会が設置されている
- (2) 会計監査人が設置されている
- (3) 監査役会が設置されている
- (4) 取締役の任期が、通常の2年ではなく、定款で1年と定められている

会社法では、一定の制限と追加の要件を満たせば、株主への現物配当(現金以外の資産)を実施することが認められます。

定款に定めていれば取締役会決議に基づき年1回中間配当を実施することができます。商法では、配当に充当できる資本剰余金及び利益剰余金に一定の制限が設けられていましたが、会社法においても配当可能額や自己株式の取得額について一定の制限が課されております。配当後の純資産額が3百万円を下回る配当は、認められておりません。

b. 資本金、準備金及び剰余金の増減及び組み入れ

会社法では、利益準備金(利益剰余金に含まれる)及び資本準備金(資本剰余金に含まれる)の合計額が資本金の25%に達するまで、配当金の支払時に配当額の10%を利益準備金または資本準備金として積み立てる必要があります。商法では、資本準備金及び利益準備金の合計額のうち資本金の25%を超える金額は、株主総会の決議により配当に充てることができます。一方、会社法では、資本準備金と利益準備金を配当に充てるためにそのような制限はありません。また、会社法では、資本金、利益準備金、資本準備金、その他資本剰余金及びその他利益剰余金は、株主総会決議により、一定の条件のもとで科目間の振替を行うことができます。

c. 自己株式及び自己株式の新株予約権

会社法では、取締役会決議により自己株式の取得及び処分を行うことが認められています。一定のルールにより算出された株主への分配可能額を超えて自己株式を取得することはできません。

会社法においては、従来負債の部に表示されていた新株予約権は、純資産の部の独立した項目として表示されます。また、会社法においては、自己株式だけでなく自己の新株予約権を取得することも認められています。自己の新株予約権は純資産の部の独立した項目として表示するか、新株予約権から直接控除しなければなりません。

企業会計基準委員会(ASBJ)は2005年12月9日に純資産の部の表示に関する新しい会計基準を公表しました。この新会計基準において、従来負債の部に表示していた項目の一部は、純資産の部に表示することになり、新株予約権、少数株主持分及び繰延ヘッジ損益がこれに該当します。この基準は2006年5月1日以降に終了する会計年度より適用されます。

2004年10月5日、1株を3株にする株式分割を行いました。これにより発行済株式数は4,657,939株増加し、自己株式は7,346株増加いたしました。この株式分割により新しく発行された新株に対する配当起算日は2004年10月1日となっております。また、2004年10月5日、会社定款変更により授権株式数を18,126,000株増加させ27,190,000株といたしました。

2005年において、既に償還された無担保社債の新株引受権及び2002年12月19日の株主総会で承認されたストックオプションとしての新株予約権の行使により普通株式125,678株を発行いたしました。その結果、資本金と資本剰余金は、それぞれ596百万及び599百万増加いたしました。

2005年2月23日開催の取締役会の決議により、2005年3月15日に公募増資を実施いたしました。公募増資により1,250,000株の普通株式を発行し、資本金と資本剰余金は、それぞれ22,414百万円、22,413百万円増加いたしました。

2005年2月23日開催の取締役会の決議により、2005年3月23日に第三者割当増資を実施いたしました。第三者割当増資により187,500株の普通株式を発行し、資本金と資本剰余金は、両方共に3,362百万円増加いたしました。

2005年9月2日開催の取締役会の決議により、2005年9月29日に第三者割当増資を実施いたしました。第三者割当増資により347,861株の普通株式を発行し、資本金と資本剰余金は、それぞれ¥6,448百万円(\$54,887千米ドル)、6,448百万円(\$54,884千米ドル)増加いたしました。

2005年10月25日開催の取締役会の決議により、2005年11月16日に第三者割当増資を実施いたしました。第三者割当増資により134,000株の普通株式を発行し、資本金と資本剰余金は、それぞれ3,479百万円(29,619千米ドル)増加いたしました。

2005年10月13日に開催の取締役会の決議および承認により、SBIキャピタル株式会社を完全子会社化するために、当社は新株49,259株を発行し、SBIキャピタル株式会社の発行済普通株式1株に対し3.01株の交換比率で、2005年11月30日現在の株主名簿に記載されたSBIキャピタル株式会社の株主に対し、2005年12月1日に新株を交付いたしました。株式交換に関して新しく発行された新株の配当起算日は2005年10月1日となっております。その結果、当社の資本剰余金は¥2,267百万円(\$19,299千米ドル)増加いたしました。

2006年1月27日に開催の臨時株主総会の決議および承認により、SBIパートナーズ株式会社を吸収合併するために、当社は新株842,392株を発行し、SBIパートナーズ株式会社の発行済普通株式1株に対し0.05株の交換比率で、2006年2月28日現在の株主名簿に記載されたSBIパートナーズ株式会社の株主に対し、2006年3月1日に新株を交付いたしました。この吸収合併に際して発行された新株の配当起算日は2005年10月1日となっております。この結果、当社の資本剰余金は¥8,544百万円(72,732千米ドル)増加いたしました。

2006年1月27日に開催の臨時株主総会の決議および承認により、ファイナンス・オール株式会社を吸収合併するために、当社は新株1,234,860株を発行し、ファイナンス・オール株式会社の発行済普通株式1株に対し2.5株の交換比率で、2006年2月28日現在の株主名簿に記載されたファイナンス・オール株式会社の株主に対し、2006年3月1日に新株を交付いたしました。この吸収合併に際して発行された新株の配当起算日は2005年10月1日となっております。この結果、当社の資本剰余金への影響はありませんでした。

2006年1月27日に開催された臨時株主総会の決議および承認により、SBI証券株式会社を完全子会社化するために、当社は新株483,338株を発行し、SBI証券株式会社の発行済普通株式1株に対し1.15株の交換比率で、2006年2月28日現在の株主名簿に記載されたSBI証券株式会社の株主に対し、2006年3月1日に新株を交付いたしました。株式交換に際して発行された新株の配当起算日は2005年10月1日となっております。この結果、当社の資本剰余金は31,842百万円(271,068千米ドル)増加いたしました。

2006年3月31日に終了した会計年度に、償還済の無担保社債に付与された新株引受権の行使、およびストックオプション制度に基づいて交付されたストックオプションの行使により、当社は普通株式289,889株を発行いたしました。この結果、当社の資本金および資本剰余金は、それぞれ2,392百万円(20,363千米ドル)、2,392百万円(20,365千米ドル)増加しております。

2006年3月31日に終了した会計年度に、円建転換社債型新株予約権付社債に付与されている新株予約権の行使により、当社は普通株式366,749株を発行いたしました。この結果、当社の資本金および資本剰余金は、7,145百万円(60,824千米ドル)それぞれ増加しております。

21. ストックオプション制度

2001年12月19日の株主総会で当社の従業員118名に対し、2003年12月20日から2011年12月19日までの間、1株当たり20,796円の行使価額でストックオプション(当社の普通株を購入する権利)を付与することが承認されました。このストックオプションの行使にあたり発行される最大株式数は12,382株であります。このオプションが与えられた日以降に、当社が株式分割や株式併合を行う場合、発行される株式数は定められた計算式に基づいて調整されます。

2002年12月19日の株主総会で承認されたストックオプション制度に基づき、同日の取締役会で当社の取締役9名と従業員109名に対し、2004年12月20日から2012年12月19日までの間、1株あたり5,984円の行使価額でストックオプションを付与することが決議されました。このストックオプションの行使にあたり発行される最大株式数は53,748株であります。

2002年12月19日の株主総会で承認されたストックオプション制度に基づき、2003年9月17日の取締役会で当社の取締役2名と従業員4名及び連結子会社の取締役3名に対し、2004年12月20日から2012年12月19日までの間、1株当たり17,879円の行使価額でストックオプションを付与することが決議されました。このストックオプションの行使にあたり発行される最大株式数は22,428株であります。

2003年6月23日の株主総会で承認されたストックオプション制度に基づき、2003年9月17日の取締役会で当社の取締役2名と従業員110名及び連結子会社の取締役6名と従業員86名に対し、2005年6月24日から2013年6月23日までの間、1株当たり17,879円の行使価額でストックオプションを付与することが決議されました。このストックオプションの行使にあたり発行される最大株式数は191,646株であります。

2003年6月2日のイー・トレード株式会社との合併により、イー・トレード株式会社のストックオプションを引き継いでおります。2002年6月20日のイー・トレード株式会社の株主総会で2004年6月21日から2012年6月20日までの間、1株当たり12,079円の行使価額でストックオプションを付与することが承認されました。このストックオプションの行使にあたり発行される最大株式数は122,325株であります。

2003年6月23日の株主総会で承認されたストックオプション制度に基づき、2003年10月23日の取締役会で当社の連結子会社の取締役17名に対し、2005年6月24日から2013年6月23日までの間、1株あたり27,655円の行使価額でストックオプションを付与することが決議されました。このストックオプションの行使にあたり発行される最大株式数は25,227株であります。

2005年6月29日に定時株主総会で当社の株主が承認したストックオプション制度に基づき、2005年7月20日の取締役会で当社の取締役7名と従業員89名及び子会社の取締役14名と従業員36名に対し、2005年7月28日から2013年6月29日までの期間に1株当たり35,078円の行使価額で当社の普通株を購入できるストックオプションを付与することが決議されました。このストックオプションの行使にあたり発行される最大株式数は35,057株であります。

2003年6月27日に開催されたディジिटブレン株式会社の株主総会で承認されたストックオプション制度を2006年3月1日に吸収合併により当社が引き継ぎました。このストックオプション制度は2004年1月1日から2006年12月31日までの期間に、1株当たり13,000円の行使価額で当社の普通株を購入できるストックオプションを付与することを定めています。このストックオプションの行使にあたり発行される最大株式数は8,655株であります。

2003年6月27日に開催されたエスピーアイ・ホームプランナー株式会社(SBIプランナーズ株式会社に商号変更)の株主総会で承認されたストックオプション制度は、2005年1月15日にSBIパートナーズ株式会社が株式交換により引き継ぎ、さらに2006年3月1日に当社が吸収合併によって引き継ぎました。このストックオプション制度は2005年6月28日から2013年6月27日までの期間に、1株当たり23,200円の行使価額で当社の普通株を購入できるストックオプションを付与することを定めています。このストックオプションの行使にあたり発行される最大株式数は786株であります。

2004年9月27日に開催されたエスピーアイ・ホームプランナー株式会社の臨時株主総会で承認されたストックオプション制度は、2005年1月15日にSBIパートナーズ株式会社が株式交換により引き継ぎ、さらに2006年3月1日に当社が吸収合併によって引き継ぎました。このストックオプション制度は2005年4月1日から2007年3月30日までの期間に、1株当たり25,600円の行使価額で当社の普通株を購入できるストックオプションを付与することを定めています。このストックオプションの行使にあたり発行される最大株式数は930株であります。

2004年9月27日に開催されたエスピーアイ・ホームプランナー株式会社の臨時株主総会で承認されたストックオプション制度は、2005年1月15日にSBIパートナーズ株式会社が株式交換により引き継ぎ、さらに2006年3月1日に当社が吸収合併によって引き継ぎました。このストックオプション制度は2006年10月2日から2010年9月30日までの期間に、1株当たり25,600円の行使価額で当社の普通株を購入できるストックオプションを付与することを定めています。このストックオプションの行使にあたり発行される最大株式数は934株であります。

2004年10月25日開催の取締役会では、2004年9月27日に開催されたエスピーアイ・ホームプランナー株式会社の臨時株主総会で承認されたストックオプション制度の詳細が決定されました。このストックオプション制度は2005年1月15日に株式交換によりSBIパートナーズ株式会社が引き継ぎ、さらに2006年3月1日には吸収合併により当社が引き継ぎました。このストックオプション制度は2006年10月2日から2010年9月30日までの期間に、1株当たり25,600円の行使価額で当社の普通株を購入できるストックオプションを付与することを定めています。このストックオプションの行使にあたり発行される最大株式数は60株であります。

2005年9月22日に開催されたSBIパートナーズ株式会社の株主総会で承認されたストックオプション制度は、2006年3月1日に吸収合併により当社が引継ぎました。このストックオプション制度は2005年12月1日から2013年10月31日までの期間に、1株当たり37,060円の行使価額で当社の普通株を購入できるストックオプションを付与することを定めています。このストックオプションの行使にあたり発行される最大株式数は800株であります。

2002年9月24日に開催されたファイナンス・オール株式会社の臨時株主総会で承認されたストックオプション制度は、2006年3月1日に吸収合併により当社が引継ぎました。このストックオプション制度は2004年9月25日から2012年9月24日までの期間に、1株当たり4,465円の行使価額で当社の普通株を購入できるストックオプションを付与することを定めています。このストックオプションの行使にあたり発行される最大株式数は6,840株であります。

2003年8月1日に開催されたファイナンス・オール株式会社の臨時株主総会で承認されたストックオプション制度は、2006年3月1日に吸収合併により当社が引継ぎました。このストックオプション制度は2005年8月2日から2013年8月1日までの期間に、1株当たり4,465円の行使価額で当社の普通株を購入できるストックオプションを付与することを定めています。このストックオプションの行使にあたり発行される最大株式数は38,240株であります。

2002年6月18日に開催されたソフトバンク・フロンティア証券株式会社(SBI証券株式会社に商号変更)の株主総会で承認されたストックオプション制度は、2004年2月2日にワールド日栄フロンティア証券株式会社(SBI証券株式会社に商号変更)が吸収合併によって引継ぎ、さらに2006年3月1日に当社が株式交換によって引継ぎました。このストックオプション制度は2004年6月19日から2008年6月18日までの期間に、1株当たり7,740円の行使価額で当社の普通株を購入できるストックオプションを付与することを定めています。このストックオプションの行使にあたり発行される最大株式数は986株であります。

2003年6月27日に開催されたソフトバンク・フロンティア証券株式会社の株主総会で承認されたストックオプション制度は、2006年3月1日に株式交換により当社が引継ぎました。このストックオプション制度は2005年7月1日から2013年6月26日までの期間に、1株当たり17,392円の行使価額で当社の普通株を購入できるストックオプションを付与することを定めています。このストックオプションの行使にあたり発行される最大株式数は2,565株であります。

2004年6月29日に開催の取締役会では、同日付で開催されたワールド日栄フロンティア証券株式会社の株主総会で承認されたストックオプション制度の詳細が決定されました。このストックオプション制度は、2006年3月1日に株式交換により当社が引継ぎました。このストックオプション制度は2006年6月30日から2014年6月29日までの期間に、1株当たり50,174円の行使価額で当社の普通株を購入できるストックオプションを付与することを定めています。このストックオプションの行使にあたり発行される最大株式数は32,059株であります。

2004年12月22日に開催の取締役会では、2004年6月29日に開催されたワールド日栄フロンティア証券株式会社の株主総会で承認されたストックオプション制度の詳細が決定されました。このストックオプション制度は2006年3月1日に株式交換により当社が引継ぎました。このストックオプション制度は2006年6月30日から2014年6月29日までの期間に、1株当たり31,914円の行使価額で当社の普通株を購入できるストックオプションを付与することを定めています。このストックオプションの行使にあたり発行される最大株式数は98株であります。

2005年6月29日に開催されたSBI証券株式会社の株主総会で承認されたストックオプション制度は、2006年3月1日に株式交換により当社が引継ぎました。このストックオプション制度は2007年6月30日から2015年6月29日までの期間に、1株当たり46,957円の行使価額で当社の普通株を購入できるストックオプションを付与することを定めています。このストックオプションの行使にあたり発行される最大株式数は39,017株であります。

2004年6月23日の株主総会で承認されたストックオプションは付与されることなく2005年6月28日に失効いたしました。これらのストックオプションの行使価額は、株式分割、株式併合、時価を下回る価額での新株発行または自己株式の処分を行った場合、定められた計算式に基づいて調整されます。上記は調整後の行使価格が記載されています。また、ストックオプションの行使条件については制約があります。

22. トレーディング損益

2005年及び2006年の売上高に含まれるトレーディング損益の内訳は以下のとおりであります。

	百万円						千米ドル(注記1)		
	2005			2006			2006		
	実現損益	評価損益	合計	実現損益	評価損益	合計	実現損益	評価損益	合計
株券トレーディング損益	¥ 670	¥(26)	¥ 644	¥ 999	¥(8)	¥ 991	\$ 8,506	\$(66)	\$ 8,440
債券等トレーディング損益	2,495		2,495	2,747	7	2,754	23,383	57	23,440
その他のトレーディング損益	187	22	209	882	(2)	880	7,505	(20)	7,485
合計	¥3,352	¥ (4)	¥3,348	¥4,628	¥(3)	¥4,625	\$39,394	\$(29)	\$39,365

なお、上記トレーディング損益には証券関連事業以外の損益が2005年及び2006年でそれぞれ7百万円及び71百万円(604千米ドル)含まれております。

23. 売上原価

2005年及び2006年の売上原価の内訳は以下のとおりであります。

	百万円		千米ドル (注記1)
	2005	2006	2006
営業投資有価証券売上原価	¥10,240	¥12,467	\$106,129
投資損失引当金繰入額	(71)	450	3,828
金融費用	2,327	4,127	35,130
リース原価等	5,374	6,075	51,713
その他売上原価	3,453	14,477	123,247
合計	¥21,323	¥37,596	\$320,047

営業投資有価証券売上原価には2005年及び2006年でそれぞれ616百万円及び209百万円(1,777千米ドル)の営業投資有価証券(ファンドによる投資含む)の評価損が含まれております。

24. 販売費及び一般管理費

2005年及び2006年の販売費及び一般管理費の内訳は以下のとおりであります。

	百万円		千米ドル (注記1)
	2005	2006	2006
役員報酬	¥ 973	¥ 1,280	\$ 10,895
貸倒引当金繰入額	239	678	5,770
給料・賞与	6,309	7,048	59,997
役員退職慰労引当金繰入額	13	8	72
退職給付引当金繰入額	285	104	889
賞与引当金繰入額	593	818	6,960
業務委託費	5,731	8,432	71,779
その他	21,176	31,688	269,754
合計	¥35,319	¥50,056	\$426,116

25. 法人税等

当社及び国内子会社は、利益に対し日本の国税及び地方税を課税されますが、法定実効税率は2005年及び2006年ともに40.69%であります。

2005年及び2006年3月31日現在の重要な一時差異として計上された繰延税金資産及び負債の内訳は以下のとおりであります。

	百万円		千米ドル (注記1)
	2005	2006	2006
繰延税金資産(流動):			
有価証券評価損	¥ 951	¥ 3,216	\$ 27,376
投資損失引当金繰入額	769	854	7,268
貸倒引当金繰入額	125	123	1,046
賞与引当金繰入額	266	274	2,329
投資事業組合等損益自己相殺否認	24		
税務上の繰越欠損金	294	998	8,498
未払事業税	717	1,381	11,759
その他	455	406	3,459
評価性引当額	(904)	(565)	(4,813)
繰延税金資産(流動)の合計	2,697	6,687	56,922
繰延税金資産(固定):			
税務上の繰越欠損金	3,199	1,758	14,967
貸倒引当金繰入額	898	525	4,471
投資有価証券評価損	753	730	6,210
証券取引責任準備金繰入額	1,036	2,005	17,071
その他	603	541	4,603
評価性引当額	(5,419)	(3,492)	(29,726)
繰延税金資産(固定)の合計	1,070	2,067	17,596
繰延税金資産合計	¥ 3,767	¥ 8,754	\$ 74,518
繰延税金負債(流動):			
その他有価証券評価差額金	¥ 5,077	¥ 6,823	\$ 58,087
その他	1		
繰延税金負債(流動)の合計	5,078	6,823	58,087
繰延税金負債(固定):			
その他有価証券評価差額金	1,914	2,744	23,363
その他	327	67	562
繰延税金負債(固定)の合計	2,241	2,811	23,925
繰延税金負債合計	¥ 7,319	¥ 9,634	\$ 82,012

2005年及び2006年の法定実効税率と、連結損益計算書上の実効税率との差異の調整の原因は次のとおりであります。

	2005	2006
法定実効税率	40.69%	40.69%
永久差異項目	0.10	0.22
持分変動によるみなし売却益	(10.63)	(13.21)
連結調整勘定償却	(2.70)	(0.76)
評価性引当金	(3.95)	(4.61)
その他	0.03	1.18
税効果適用後の法人税等の負担率	23.54%	23.51%

26. 持分変動による みなし売却益

「持分変動によるみなし売却益」は連結子会社等の新規株式公開等を含む資本取引による持分変動にともない会計上の投資簿価を調整した結果計上されます。2005年は主にイー・トレード証券株式会社の株式公開にともなう新株発行、2006年は主にイー・トレード証券株式会社の第三者割当増資によるものであります。

27. リース

当社及び当社の連結子会社は、事務機器、コンピュータ、事務所及びその他の資産をリースしております。

2005年及び2006年のリース費用は、それぞれ3,288百万円及び4,130百万円(35,159千米ドル)であります。このうち、ファイナンス・リースのリース料はそれぞれ794百万円及び1,222百万円(10,404千米ドル)であります。

2005年及び2006年で、所有権移転外ファイナンス・リースを資産計上した場合の取得価額相当額、減価償却累計額相当額、未経過リース料期末残高相当額、減価償却費相当額、支払利息相当額は以下のとおりであります。

	2005		
	百万円		
	器具備品	ソフトウェア	合計
取得価額相当額	¥3,954	¥1,025	¥4,979
減価償却累計額相当額	1,000	292	1,292
期末残高相当額	¥2,954	¥ 733	¥3,687

	2006					
	百万円			千米ドル(注記1)		
	器具備品	ソフトウェア	合計	器具備品	ソフトウェア	合計
取得価額相当額	¥6,124	¥1,317	¥7,441	\$52,134	\$11,211	\$63,345
減価償却累計額相当額	1,849	516	2,365	15,739	4,395	20,134
期末残高相当額	¥4,275	¥ 801	¥5,076	\$36,395	\$ 6,816	\$43,211

2005年及び2006年3月31日現在のファイナンス・リース(転貸リースを含む)に係る未経過リース料期末残高相当額は以下のとおりであります。

	百万円		千米ドル (注記1)
	2005	2006	2006
1年以内	¥1,730	¥ 2,547	\$ 21,679
1年超	3,203	12,508	106,485
合計	¥4,933	¥15,055	\$128,164

2005年及び2006年のファイナンス・リースに係る減価償却費相当額及び支払利息相当額は以下のとおりであります。

	百万円		千米ドル (注記1)
	2005	2006	2006
減価償却費相当額	¥740	¥1,143	\$ 9,729
支払利息相当額	86	114	969
合計	¥826	¥1,257	\$10,698

減価償却費は定額法、支払利息相当額は原則的方法により計算されていますが、連結損益計算書には反映されておりません。2005年及び2006年3月31日現在のオペレーティング・リース取引に係る未経過リース料は以下のとおりであります。

	百万円		千米ドル (注記1)
	2005	2006	2006
1年以内	¥111	¥ 8	\$ 71
1年超	8	7	57
合計	¥119	¥15	\$128

28. 関連当事者との取引

2005年及び2006年において当社と関連当事者との取引は以下のとおりであります。

	百万円		千米ドル (注記1)
	2005	2006	2006
関係会社株式取得		¥ 759	\$ 6,462
投資有価証券取得		50,500	429,897
関係会社株式売却	¥486		

29. デリバティブ

当社の利用しているデリバティブは主にヘッジ目的としての為替予約取引及び金利スワップ取引であり、為替予約取引に関しては外貨による債権または債務及び投資等をヘッジするため、金利スワップ取引に関しては借入金利の将来の金利市場における利率上昇率による変動リスクを回避するために使われ、投機的な取引は行わない方針であります。また、一部の連結子会社では株価指数先物取引、債券先物取引、為替予約取引を原資産の拡大等、商品先物取引については収益の補完を目的として利用しております。株価指数先物取引、商品先物取引については日計りを中心とする短期取引であり、取引の規模については上限を設けております。また、債券先物取引、為替予約取引については自己のトレーディングのために取り入れております。トレーディング業務においては、顧客ニーズへの対応、取引の円滑化等を目的としております。

デリバティブに係るリスクとして、為替予約取引は為替リスク、金利スワップ取引は市場金利の変動によるリスク、株価指数先物取引については株価変動リスク、債券先物取引は金利変動リスク、また商品先物取引は海外の商品市況、為替、景気動向及び気象状況の影響を受けます。為替予約取引は、取引の相手方が信用度の高い国内の金融機関であること、金利スワップ取引、商品先物取引、株価指数先物取引、債券先物取引は公的な市場における取引であることから、債務不履行による信用リスクはほとんど無いと認識しております。トレーディング業務については、マーケットリスクと取引先リスクがあげられます。

ヘッジ目的の為替予約取引については、管理部門が決裁申請を起案し、担当取締役の決裁を得て実行します。取引の実行後は、管理部門担当者が為替予約の残高等を把握し、随時担当取締役に状況報告を行っております。株価指数先物取引、商品先物取引、債券先物取引、一部の為替予約取引等、トレーディング業務においては社内管理規程を設け取引内容、取引高の制限や管理体制等を定めており、管理部門が日々監視を行っております。

デリバティブ取引の時価

2005年及び2006年3月31日現在のデリバティブ取引の時価は以下のとおりであります。

	百万円			
	2005			
	資産		負債	
	契約額	時価	契約額	時価
為替予約取引	¥ 67	¥2	¥256	¥3
債券先物取引			139	
合計	¥ 67	¥2	¥395	¥3

	百万円			
	2006			
	資産		負債	
	契約額	時価	契約額	時価
為替予約取引	¥222	¥1	¥1,027	¥11
日経平均先物取引			6	2
債券先物取引	403	3		
合計	¥625	¥4	¥1,033	¥13

	千米ドル(注記1)			
	2006			
	資産		負債	
	契約額	時価	契約額	時価
為替予約取引	\$1,888	\$10	\$8,743	\$ 97
日経平均先物取引			48	15
債券先物取引	3,435	27		
合計	\$5,323	\$37	\$8,791	\$112

みなし決済損益を時価として記載しております。時価につきましては、為替予約取引は決算日の先物為替相場、日経平均先物取引は決算日の日経平均先物相場、債券先物取引は決算日の債券先物相場により算定しております。

トレーディングに係るデリバティブ負債は、連結貸借対照表の流動負債の「その他」に含めて表示しております。

ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引は除いております

30. 1株当たり当期純利益

2005年及び2006年の1株当たり当期純利益及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益の算定上の基礎は以下のとおりであります。

	百万円	株	円	米ドル (注記1)
2005				
当期純利益		期中平均株式数	1株当たり当期純利益	
普通株式に係るもの	¥25,251	7,054,857	¥3,579.29	
潜在株式調整	(188)	585,307		
潜在株式調整後	¥25,063	7,640,164	¥3,280.47	
2006				
普通株式に係るもの	¥45,369	9,152,365	¥4,957.08	\$42.20
潜在株式調整	(113)	628,469		
潜在株式調整後	¥45,256	9,780,834	¥4,627.04	\$39.39

31. セグメント情報

事業のセグメントの状況は以下のとおりであります。

アセットマネジメント事業では主にファンド管理業務及びIT、バイオ、企業再生等の会社に対する投資を行っております。

ブローカレッジ&インベストメントバンキング事業では、主に株式(国内・海外)・債券・為替・保険・商品先物のあらゆる金融資産への投資仲介事業や資本市場からの資金調達、証券化スキーム、M&A、ストラクチャード・ファイナンスの提案といった高度な金融技術の提案を行っております。

ファイナンシャル・サービス事業では、主に金融商品の情報提供サービスや金融関連事業の統括を行っております。

2005年及び2006年の事業の種類別セグメント情報、所在地別セグメント情報、海外売上高は以下のとおりであります。

(1) 事業の種類別セグメント情報

	百万円					
	2005					
	アセット マネジメント 事業	ブローカレッジ& インベストメント バンキング事業	ファイナン シャル・ サービス事業	合計	消去又は全社	連結
a. 売上高及び営業損益						
外部顧客に対する売上高	¥ 24,258	¥ 45,397	¥11,857	¥ 81,512		¥ 81,512
セグメント間の内部売上高又は振替高	205	827	551	1,583	¥(1,583)	
合計	24,463	46,224	12,408	83,095	(1,583)	81,512
営業費用	13,843	31,409	11,366	56,618	24	56,642
営業利益	¥ 10,620	¥ 14,815	¥ 1,042	¥ 26,477	¥(1,607)	¥ 24,870
b. 資産、減価償却費及び資本的支出						
資産	¥101,083	¥617,000	¥41,160	¥759,243	¥(4,239)	¥755,004
減価償却費	48	1,256	3,986	5,290	(59)	5,231
資本的支出	589	2,067	3,664	6,320	(47)	6,273

百万円						
2006						
	アセット マネジメント 事業	フローカレッジ& インベストメント バンキング事業	ファイナン シャル サービス事業	合計	消去又は全社	連結
a. 売上高及び営業損益						
外部顧客に対する売上高	¥ 37,822	¥ 80,221	¥19,204	¥ 137,247		¥ 137,247
セグメント間の内部売上高又は振替高	2,985	595	640	4,220	¥ (4,220)	
合計	40,807	80,816	19,844	141,467	(4,220)	137,247
営業費用	30,387	42,279	17,548	90,214	(2,562)	87,652
営業利益	¥ 10,420	¥ 38,537	¥ 2,296	¥ 51,253	¥ (1,658)	¥ 49,595
b. 資産、減価償却費及び資本的支出						
資産	¥156,197	¥1,085,433	¥61,075	¥1,302,705	¥28,939	¥1,331,644
減価償却費	178	1,535	4,835	6,548	(44)	6,504
資本的支出	443	2,526	8,717	11,686	(21)	11,665

千米ドル(注記1)						
2006						
	アセット マネジメント 事業	フローカレッジ& インベストメント バンキング事業	ファイナン シャル サービス事業	合計	消去又は全社	連結
a. 売上高及び営業損益						
外部顧客に対する売上高	\$ 321,969	\$ 682,907	\$163,483	\$ 1,168,359		\$ 1,168,359
セグメント間の内部売上高又は振替高	25,408	5,063	5,451	35,922	\$(35,922)	
合計	347,377	687,970	168,934	1,204,281	(35,922)	1,168,359
営業費用	258,676	359,915	149,385	767,976	(21,813)	746,163
営業利益	\$ 88,701	\$ 328,055	\$ 19,549	\$ 436,305	\$(14,109)	\$ 422,196
b. 資産、減価償却費及び資本的支出						
資産	\$1,329,677	\$9,240,089	\$519,920	\$11,089,686	\$246,348	\$11,336,034
減価償却費	1,515	13,072	41,159	55,746	(377)	55,369
資本的支出	3,769	21,501	74,209	99,479	(180)	99,299

- 注：1. 営業費用のうち消去又は全社の区分に含めた配賦不能営業費用の金額は2005年及び2006年でそれぞれ2,024百万円及び1,807百万円(15,383千米ドル)であり、当社の管理本部等における販売費及び一般管理費であります。
2. 資産のうち、消去又は全社の区分に含めた全社資産の金額は2006年に40,904百万円(348,211千米ドル)であり、その主なものは余資産運用資金(現預金、金銭信託)であります。
3. 注)2より、投資事業組合等が保有する当社の子会社株式は、当社および連結子会社による投資事業組合の出資持分に基づいて連結されております。この結果、2006年において、「アセットマネジメント事業」における「売上高」及び「総資産」はそれぞれ2,830百万円(24,091千米ドル)及び76,658百万円(652,576千米ドル)減少しております。また、「フローカレッジ&インベストメントバンキング事業」の総資産は15,500百万円(131,951千米ドル)増加し、「消去又は全社」の総資産は655百万円(5,573千米ドル)減少しております。

(2) 所在地別セグメント情報

海外の連結子会社における売上高及び資産の金額は、全セグメントの売上高の合計及び全セグメントの資産の金額の合計額に占める割合において重要性が少ないので記載を省略しております。

(3) 海外売上高

	2006		
	百万円		
	北米	その他	合計
海外売上高(A)	¥13,344	¥7,870	¥ 21,214
連結売上高(B)			137,247
(A)/(B)	9.7%	5.8%	15.5%

	千米ドル		
	北米	その他	合計
海外売上高(A)	\$113,596	\$66,999	\$ 180,595
連結売上高(B)			1,168,359
(A)/(B)	9.7%	5.8%	15.5%

注: 「北米」及び「その他」は、それぞれ「アメリカ合衆国」及び「ヨーロッパ、香港、韓国」であります。

2005年の海外売上高は全売上高に占める割合において重要性が少ないので記載を省略しております。

32. 消費貸借契約により借り入れている有価証券等

消費貸借契約により借り入れている有価証券の2005年3月31日現在の時価は89,487百万円であります。2006年3月31日現在で借入している有価証券はありません。

33. 後発事項

a. 利益処分

2006年6月29日の株主総会で承認された事項は以下のとおりであります。

	百万円	千米ドル (注記1)
現金配当/1株当たり600円(5.11米ドル)	¥7,338	\$62,464
役員賞与	200	1,703

b. 新株予約権等の行使

既に行使された新株予約権等(注記21参照)に加え、2006年4月1日から2006年5月31日の間に新株予約権等の行使により、発行済株式総数が6,385.12株、資本金が58百万円(493千米ドル)、資本準備金が58百万円(493千米ドル)それぞれ増加いたしました。

c. 株式会社ネクサス

2006年5月12日開催の取締役会の決議により、当社は2006年5月29日に株式会社ネクサスの新規発行普通株式30,500株を総額3,498百万円(29,781千米ドル)(1株当たり114,700円(976.42米ドル))で取得いたしました。この結果、当社が所有する株式会社ネクサスの議決権比率は、2006年5月29日時点で22.8%となり、2006年5月より当社の関連会社となり、2007年度から持分法が適用されます。

d. 自己株式の取得

2006年7月31日開催の取締役会の決議及び承認により、当社は2006年8月1日にソフトバンク・イーエム株式会社(当社の主要株主)から自己株式1,047,900株を総額47,156百万円(401,426千米ドル)で取得いたしました。この結果、ソフトバンク・イーエム株式会社およびその親会社(ソフトバンク株式会社)が所有する当社の議決権は減少し、当社はこれらの会社の持分法適用関連会社から除外されました。

独立監査人の報告書

和文アニュアルレポートの作成と監査の位置付けについて

当社は、海外読者の便宜のために当社の事業概況及び連結財務諸表を含む財務内容を中心としたアニュアルレポートを英文で作成し皆様に提供しております。これと同時に、アニュアルレポートの開示上の公平性及び充実化の観点から、英文のアニュアルレポートを和訳した和文のアニュアルレポートも作成し皆様に提供しております。

当社は、英文アニュアルレポートと和文アニュアルレポートで内容上の重要な相違が生じないように配慮して和文アニュアルレポートを作成しております。なお、和文アニュアルレポート所収の当社の連結財務諸表につきましては、海外読者の便宜のために組み替えた監査済英文連結財務諸表の和訳を掲載しており、和訳された英文連結財務諸表の日本語の記載自体は監査法人トーマツ(Deloitte Touche Tohmatsu, a Japanese member firm of Deloitte Touche Tohmatsu (Swiss Verein))の監査の対象とはなっておりません。

尚、英文アニュアルレポートの財務セクションについては、下記のとおり英文の監査報告書が添付されております。

このアニュアルレポートが皆様にとって弊社をご理解していただく上でお役に立てれば幸いです。

Deloitte.

Deloitte Touche Tohmatsu
MS Shibaura Building
4-13-23, Shibaura
Minato-ku, Tokyo 108-8530
Japan

Tel: +81(3)3457 7321
Fax: +81(3)3457 1694
www.deloitte.com/jp

INDEPENDENT AUDITORS' REPORT

To the Board of Directors and Shareholders of
SBI Holdings, Inc.:

We have audited the accompanying consolidated balance sheets of SBI Holdings, Inc. (formerly SOFTBANK INVESTMENT CORPORATION) and consolidated subsidiaries as at 31st March, 2005 and 2006, and the related consolidated statements of income, shareholders' equity, and cash flows for the years then ended, all expressed in Japanese yen. These consolidated financial statements are the responsibility of the Company's management. Our responsibility is to express an opinion on these consolidated financial statements based on our audits.

We conducted our audits in accordance with auditing standards generally accepted in Japan. Those standards require that we plan and perform the audit to obtain reasonable assurance about whether the financial statements are free of material misstatement. An audit includes examining, on a test basis, evidence supporting the amounts and disclosures in the financial statements. An audit also includes assessing the accounting principles used and significant estimates made by management, as well as evaluating the overall financial statement presentation. We believe that our audits provide a reasonable basis for our opinion.

In our opinion, the consolidated financial statements referred to above present fairly, in all material respects, the consolidated financial position of SBI Holdings, Inc. and consolidated subsidiaries as at 31st March, 2005 and 2006, and the consolidated results of their operations and their cash flows for the years then ended in conformity with accounting principles generally accepted in Japan.

Our audits also comprehended the translation of Japanese yen amounts into U.S. dollar amounts and, in our opinion, such translation has been made in conformity with the basis stated in Note 1. Such U.S. dollar amounts are presented solely for the convenience of readers outside Japan.

Deloitte Touche Tohmatsu

29th June, 2006 (4th August, 2006 as to Note 33)

主要グループ会社

(2006年10月1日現在)

アセットマネジメント事業

SBIインベストメント株式会社

ベンチャーキャピタルファンド等の運用・管理
http://www.sbinvestment.co.jp/

ソフトトレンドキャピタル株式会社

ベンチャーキャピタルファンド等の運用・管理

SBIキャピタル株式会社

バイアウト・企業再生ファンド等の運用・管理

SBIキャピタルソリューションズ株式会社

メザニンファンド等の運用・管理

SBIブロードバンドキャピタル株式会社

ブロードバンドに特化したベンチャーファンドの運用

SBI KOREA HOLDINGS CO., LTD.

ベンチャーキャピタルファンド投資

SBIアセットマネジメント株式会社

投資信託委託業、有価証券等に係る投資顧問業
http://www.sbiam.co.jp/

ブローカレッジ&インベストメントバンキング事業

SBIイー・トレード証券株式会社

オンライン総合証券
http://www.etrade.ne.jp/

E*TRADE KOREA Co., Ltd.

オンライン証券業
http://www.etrade.co.kr/en/index.html

SBI証券株式会社

証券業
http://www.sbi-sec.co.jp/

SBIフューチャーズ株式会社

オンライン商品先物取引業
http://www.ecommodity.co.jp/

ファイナンシャル・サービス事業

モーニングスター株式会社

インターネットによる投資信託を主体とした金融商品の評価情報提供
http://www.morningstar.co.jp/

ゴメス・コンサルティング株式会社

Webサイトの評価・アドバイス・構築サービス
http://www.gomez.co.jp/

SBIペリトランス株式会社

EC事業者における電子決済サービスの提供
http://www.veritrans.co.jp/

SBIリース株式会社

IT分野を中心とする総合リース業
http://www.weblease.co.jp/

SBIイコール・クレジット株式会社

個人向け無担保消費者ローン事業、事業者向けローン事業
http://www.equalcredit.co.jp/

SBIテクノロジー株式会社

ITソリューション
http://www.sbi-tech.jp/

SBIモーゲージ株式会社

住宅ローン事業
http://www.sbi-mortgage.co.jp/

株式会社キャノウ*

金融に特化したインターネット広告代理業
http://www.canow.jp/

オートバイテル・ジャパン株式会社*

インターネット自動車購入支援サービス
http://www.autobytel-japan.com/

住宅不動産事業

SBIプランナーズ株式会社

建築工事業、建築物の設計・監理業、不動産の取引及びフィナンシャルプランニングに関するコンサルタント業
http://www.sbi-planners.co.jp/

株式会社ゼファー*

不動産の売買及び仲介、土地有効活用のコンサルティング業、建設業、不動産の賃貸及び管理、住宅設備関連機器の開発等
http://www.zephyr.co.jp/

*は持分法適用関連会社

沿革

1999	3月	ソフトバンク(株)の純粋持株会社化に伴う事業再編成を受けて、ソフトバンク(株)管理本部がソフトバンク・ファイナンス(株)として独立。金融関連分野における事業活動を統括する事業持株会社となる。	10月	ワールド日栄証券(株)(現 SBI証券(株))を買収し、子会社とする	
	7月	ベンチャーズ・インキュベーション事業を行う事を目的として、ソフトバンク・インベストメント(株)(現 SBIホールディングス株式会社、以下「SBI」)を設立。		10月	ファイナンス・オールの子会社であるペリトランス(株)(現 SBIペリトランス(株))が大証ヘラクレス市場に上場。
2000	6月	モーニングスター(株)がナスダック・ジャパン市場(現:大証ヘラクレス)に上場。	11月	イー・トレード証券(株)(現 SBIイー・トレード証券(株))がJASDAQ市場に上場。	
	9月	イー・トレード(株)(現 SBIイー・トレード証券(株))がナスダック・ジャパン市場(現:大証ヘラクレス)に上場。	2005	3月	公募増資によりソフトバンク(株)の持株比率が低下し、ソフトバンク(株)の連結子会社から持分法適用関連会社に変更。
	12月	SBIがナスダック・ジャパン市場(現:大証ヘラクレス)に上場。		7月	ソフトバンク・インベストメント(株)からSBIホールディングス(株)に商号変更。会社分割により、アセットマネジメント事業をソフトバンク・インベストメント(株)(旧SBIベンチャーズ(株))に移管し、持株会社体制へ移行。
2001	8月	ソフトバンク・フロンティア証券(株)(ワールド日栄証券と合併後、SBI証券(株)に商号変更)がナスダック・ジャパン市場(現:大証ヘラクレス)に上場。	2006	3月	SBIホールディングス(株)がSBIパートナーズ(株)及びファイナンス・オール(株)を合併。株式交換によりSBI証券(株)を完全子会社化。
2002	2月	SBIが東京証券取引所市場第一部に上場。	5月	SBIフューチャーズ(株)が大証ヘラクレス市場に上場。	
	12月	SBIが大証証券取引所市場第一部に上場。	8月	モーニングスター(株)の子会社ゴメス・コンサルティング(株)が大証ヘラクレス市場に上場。	
2003	6月	SBIがイー・トレード(株)(現 SBIイー・トレード証券(株))と合併し、事業持株会社としてイー・トレード証券(株)他を子会社とする。以後、SBIを中核会社とする事業再編を加速。	主要株主であるソフトバンク(株)の子会社がSBIホールディングス(株)の全株式を売却したことにより、ソフトバンク(株)の持分法適用関連会社より除外となる。		
	9月	ファイナンス・オール(株)が大証ヘラクレス市場に上場。			

役員

(2006年6月29日現在)



代表取締役執行役員CEO
北尾 吉孝



取締役執行役員COO
澤田 安太郎



取締役執行役員常務CFO
平井 研司



取締役執行役員常務
相原 志保



取締役執行役員常務
城戸 博雅



取締役
伊澤 健



取締役
井土 太良



取締役
松井 真治



取締役
川島 克哉



取締役
中川 隆



取締役
木下 玲子



取締役
円山 法昭



取締役
田坂 広志



常勤監査役
渡辺 進



監査役
黒澤 範夫



監査役
島本 龍次郎



監査役
藤井 厚司

会社概要

(2006年3月31日現在)

社名: SBIホールディングス株式会社
 設立: 1999年7月8日
 本社所在地: 〒106-6019
 東京都港区六本木一丁目6番1号 泉ガーデンタワー19F
 Tel: 03-6229-0100
 Fax: 03-3224-1970

従業員数: 1,272名(連結ベース)
 資本金: 542億2,910万9,209円
 決算期: 4月1日—3月31日

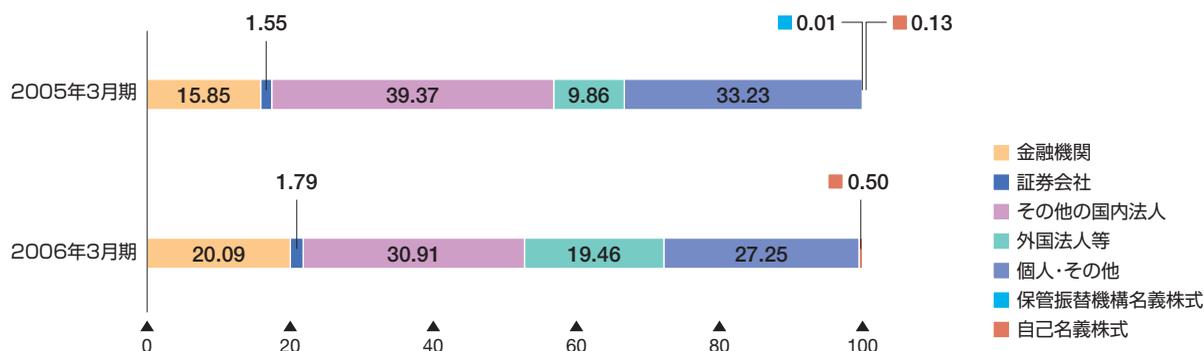
株式情報

(2006年3月31日現在)

株主名簿管理人: みずほ信託銀行株式会社
 上場証券取引所: 東京証券取引所市場第一部
 大阪証券取引所市場第一部
 (証券コード:8473)
 株式数: 会社が発行する株式の総数 34,169,000株
 発行済株式の総数 12,290,691.89株
 株主数: 135,676名

大株主	株主名	持株数(株)	持株比率(%)
	ソフトバンク・イーエム(株)	3,245,899.41	26.40
	日本マスタートラスト信託銀行(株)(信託口)	697,781.75	5.67
	日本トラスティ・サービス信託銀行(株)(信託口)	399,239.65	3.24
	日本証券金融(株)	358,573.00	2.91
	(株)ゼファー	347,861.00	2.83
	野村信託銀行(株)(投信口)	189,452.00	1.54
	北尾吉孝	165,312.98	1.34
	バンク オブ ニューヨーク ジーシーエム クライアント アカウントソ イー アイエスジー	156,046.15	1.26
	住友信託銀行(株)	134,000.00	1.09
	指定単受託者三井アセット信託銀行(株)1口	128,028.00	1.04

所有者別株式分布状況



SBIホールディングス株式会社
〒106-6019 東京都港区六本木1-6-1
泉ガーデンタワー19F
Tel 03-6229-0100 Fax 03-3224-1970
www.sbigroup.co.jp